社團 癌 研 究 會 編 纂



第二十七卷 第 三 號

# "GANN"

# THE JAPANESE JOURNAL OF CANCER RESEARCH

Founded by K. YAMAGIWA

and

Edited by M. NAGAYO

Vol. 27 No. 3

1933

Published Quarterly

by

THE JAPANESE SOCIETY OF CANCER RESEARCH

Editorial Office:

THE PATHOLOGICAL INSTITUTE OF THE TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY



# 目 次

# 原 著

癌細胞に對する新染色方式の適用技法ミ其の效果に				
就きて	小	室	英	夫…235
悪性腫瘍ミ動脈硬變、追加子宮筋腫ミ動脈硬變に就で	T			
	$\mathbb{H}$	中	長	治…261
慢性甲狀腺炎より發生せし甲狀腺肉腫の一例	小	峯	苦	茂…278
松果腺腫の一例	久	保	久	俊…298
過去22年間に於ける本教室の子宮癌腫治療成績抄錄	{緒中	方一川	上右征	新門307
子宮癌組織の新陳代謝に就て(豫報)	<b>{緒</b> 古	方松	上 右 信	新門···348
雜纂				
癌腫放射線療法の歐米に於ける最近の趨勢	Ш	Щ	保	城…350
<b>雜</b> 報				
〇理 事 會				
○癌研究所及康樂病院建築工事報告				
○寄 附 金				
〇人 事				

# Contents.

Bösartige Tumoren und Arteriosklerose. Zugleich ein Beitrage	
zur Beziehung von Myoma uteri und Arteriosklerose.	
C. Tanaka	261
Ein auf dem Boden einer chronischen Thyreoiditis entstandenes	
Schilddrüsensarkom. Y. Komine	278
Ein Fall von Pinealom. H. Kubo	293

# 葉 癌 研 究 會 趣 旨

近時ニ於ケル自然科學/進蓮ハ顯ル著シキモノアリ、従ツテ其基礎/上ニ立アル 醫學ニ在リテモ研究益々精尹加へ緻尹極ムルニ至レリ、茲ニ於テカ從來/醫學的 研究ガ多ク分科的ニシテ、同一疾病ノ調査ニ當リテモ各自己専門的見知ヨリ互ニ 相離レテ其作業ニ從と各方面/多數學者が提携シテ協同研究スルガ如キハ顯ル稀 レナリシニ反シ現代ニ於ケル學會/進運ハ此從來/研究方法ト共同的研究/緒モ 亦自ラ開カル、尹見ルニ到レリ癌/協同的研究/如キ其一例ナリ。

古來字内ノ隨所ニ見ラレ甚ダ酸鼻ナル難治ノ疾患タル癌ハ統計ニ黴スルニ之ガ為 メニ命ヲ致スモノ年々其数→増加スルノ何アリ、サレバ泰西ノ研究家ハ久シキ以 前ヨリ其疾患ノ本態ヲ究メント企圖シ國家竝ニ社會モ亦之ヲ變勵シ其研究ニ向テ 多大ナル援助ヲ與フルノ例甚ダ鷛ナカラザルナリ、抑モ癌ナル疾患ハ内科、外科、 其他各方面 / 臨牀醫學科ニ於テ扱ハレ其研究ハ解剖組織學的事項 / 外化學的並ニ 生物學的ニ互り甚が廣汎ナル領域ラ占ムルハ既ニ知ラル、所ナリ故ニ歐米諸國ニ 於テハ夙ニ癌ノ如キ大問題ハ學者ノ孤立的研究ラ以テハ到底其ノ本態ラ闡明スル 期ナキモノナルコトヲ悟リ各方面ノ學者相倚リテ其ノ 協同研究ヲ遂ゲンコトヲ企 テ特ニ癌研究會又ハ癌調査會ナルモノヲ設ケ完備セル研究設備 / 下ニ上記各方面 ノ研索ヲ分擔セシメントシテ研究ノ歩武ヲ淮メ來リシガ數年來國際癌研究協會開 設セラレ爾來各國ノ研究團體互ニ聯絡ヲ保チ之ガ研究ヲ進メントスルニ至リ我邦 亦卒先之ニ加入セリ、蓋シ我邦ノ如キハ歐米各國ニ比シ風土位ニ生活、慣習、體 質等ニ蓍シキ差異アルヲ以テ本邦研究者ノ之レニ加リテ此研究ヲ積ムノミニテモ 或ハ比較研究上望外ノ結果ヲ齎シ貢獻スルコト尠カラザルベク且ツ我國ニ於テモ 年々本病ノ爲メニ鬼籍ニ登ルモノ數萬ヲ下ラザルガ故ニ國家的ニモ 亦其研究ハ忽 諸ニ附スルコト能ハザルモノアリ、サレバ本邦ニ於テモ上記世界ニ於ケル現代醫 學/趨勢ニ順ヒ又一面人類ノ福祉ヲ増進セシメンガ爲メニ特ニ國際的性質ヲ有ス ル癌研究會ヲ設立シ、特殊ノ設備ヲ有スル研究所ヲ附屬シ癌研究ノ中央機關タラ シメ、又同時ニ治療所ヲ設立シ最新ノ研究結果ヲ應用實輸スルハ實ニ國際的時運 /風潮ニ鑑ミ科學近時 / 發達ヲ移シテ人類ノ幸福ヲ増進スル上ニ於テ刻下ノ緊要 ナル事業タルヤ明ナリ、之本會ノ設立ラ企テタル理由ナリ。

# 雅 癌 研 究 會 定 款

明治四十一年四月設立 大正三年十一月改正 大正十一年四月改正 大正三年 月法人登記 大正六年 四月改正 昭和 四年五月改正

### 第一章 目的及事業

- 第一條 本會ハ癌ニ陽スル研究及研究ノ獎 励ラ為シ、又ソノ豫防、撲滅ヲ計ルヲ以 テ目的トス
- 第二條 本會へ前條/目的ヲ達スル為メ癌 研究所、癌治療院ヲ設立シ又ハ學術集談 會/開催、優秀樂績へノ授賞、會誌/發 行、研究費/輔助並ニ癌ニ關スル豫防知 誰/普及等/實行ヲ期ス

#### 第二章 名 稻

- 第三條 本令ハ社園法人癌研究會ト稱ス 第三章 事務所
- 第四條 本介ハ事務所ヲ東京市本郷區本富 七町二番地ニ置ク

#### 第四章 资 產

- 第五條 水合ノ音素ハ左ノ如シ
  - 一、 癌研究會ヨリ引機キタル資金
  - 二、寄附金
  - 三、會員ノ會費
  - 四、前項以外ノ諸收入金
- 第六條 本會ハ前條資産ノ一部ヲ基本金ト ナスコトヲ得
- 第七條 基本金ハ訴議員會ノ決議ヲ經ルニ 非サレハ度分スルコトヲ得ス
- 第八條 本會ノ資産ハ有價證券ヲ買入レ又 ハ郵便官署若クハ確實ナル銀行ニ預ケ入 レ之レヲ保管ス

但場合ニ由リテ評議員合/決議ヲ經テ 不動産ヲ買入ルルコトヲ得

第九億本會收支ノ決算ハ翌年ノ定期總會 ニ於テ之ヲ報告スヘッ。 第十條 本會ノ會計年度へ毎年一月一日= 始マリ十二月三十一日=終ルモノトス

#### 第五章 會 員

- 第十一條 本會/目的ヲ贊成幇助スル者ハ 理事會/同意ヲ得テ會員タルコトヲ得
- 第十二條 會員ヲ分チテ左ノ三種トス 一、名譽會員 一、特別會員
  - 一、通常會員
- 第十三條 名譽會員ハ本會ノ事業又ハ學術 上特ニ功績アル者及ヒ本會ニ金壹千圓以 上ヲ寄附シタル者ニ就キ評議員會ノ決議 ヲ經テ會頭之ヲ推蔵ス
- 第十四條 特別會員ハ會費トシテー時ニ金 可圓以上ヲ納ムルモノトス
- 第十五條 通常會員ハ會費トシテ毎年金五 圓ヲ納ムルモノトス
- 第十六條 會員ペラント欲スル者ハ其ノ氏 名住所ヲ記シ本會事務所ニ申込ムヘシ
- 第十七條 退會セント欲スル者へ其旨本會 事務所ニ届出ツヘシ

#### 第六章 役 員

第十八條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

趣 裁 一

副總裁 二名以內

會 頭 一名

副會頭 二 名以內

理 事 十 名以內

(內理事長1名)

監 事 三 名以內

評議員會長 一名

評議員副會長 - 名

評議員 若干名

第十九條 本會へ皇族ヲ推戦シテ總裁トス 第二十五條 總會、評議員會へ東京ニ於テ 原總裁ハ總會ニ於テ之ヲ推載ス

會頭、副會頭ハ會員中ヨリ總會ニ於テ とり選舉ス

理事長、理事、監事、評議員へ會頭ノ 推薦ニ由リ總裁之ヲ囑託ス、但監事ハ 他ノ役員ヲ兼ヌルコトヲ得ス

評議員會長、評議員副會長八評議員中 ョリ互選ニョリ選舉ス

- 第二十條 會頭、副會頭、理事長、理事、 監事、評議員/任期ハ二箇年トス、但滿 期再選叉へ再幅スルコトヲ得
- 第二十一條 會頭、副會頭、理事長、理事 及監事ニ缺員ヲ生シタルトキハ補缺選舉 又 小鴨託 ヲナスコトヲ得、補缺員ノ任期 へ前任者/ 殘期間トス
- 第二十二條 會頭ハ本會ヲ總理シ且ツ總會 / 議長トナル

副會頭ヲ輔佐シ會頭事故アルトキハ之 ヲ代理ス

- 第二十三條 評議員ハ本會樞要ノ事項ヲ評
- 第二十四條 理事長ハ本會一切ノ會務ヲ處

理事長事故アルトキハ他ノ理事代テ其 職務ラ行フ

### 第七章 舍 議

- 之ヲ関ク、但時宜ニ依り變更スルコトヲ
- 第二十六條 定期總會へ毎年四月之ヲ開ク 但開命期ハ時宜ニ依り變更スルコトヲ得 第二十七條 總會/招集ハ會報叉ハ新聞者 クハ通知書ニ佐ツテ之ヲ行フ
- 第二十八條 總會ノ決議ハ出席會員ノ過半 数ヲ以テ之ヲ決ス
- 第二十九條 評議員會ハ必要ニ應シ會頭之 ヲ招集ス

#### 第八章 雜 則

第三十條 本會ハ必要ニ悪シ支會ヲ設クル コトラ得

支倉二間スル規程ハ評議会ノ決議ヲ經 テ別ニ之ヲ定ム

第三十一條 本會ニ書記若干名ヲ嚴ク 書記へ上長ノ命ヲ受ケ庶務會計ノ事務 ニ従事ス

書記ハ會頭之ヲ任免ス

#### 第三十二條

- 第三十三條 會誌癌ハ毎年4回之ヲ發行シ 無料ヲ以テ會員ニ頭布ス
- 第三十四條 本定款ノ變更ハ總會ニ於テ出 席會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトラ 要ス

# 事 務 所

東京市本鄉區本富士町二番地 東京帝國大學醫學部病理學教室內

社 图 法 人

究 癌 研

# 社園 癌 研 究 會 役 員

### 總 裁 大勳位功四級 伏見宮博恭王殿下

-					
副總裁	公 爵	近衞女麿			
會 頭 理事長	醫學博士	長 與 又 郎			
副會頭	醫學博士	稻田龍吉	副會頭	醫學博士	鹽田廣重
理事	醫學博士	木村德衞	理事	醫學博士	磐瀨雄一
理事		磯 村 豐太郎	同	醫學博士	佐々木 隆 興
同醫學	尊士 男爵	高木 喜寬	同	子爵	澁澤 敬三
同	醫學博士	南 大 曹	同	醫學博士	宫川米次
監事	男 爵	森村市在衛門	監事		今村 繁三
評議員會長	醫學博士	入澤 達吉			
評議員	醫學博士	入澤 達吉	評議員	醫學博士	磐瀨雄一
同	醫學博士	稻田龍吉	同	醫學博士	稻 垣 長次郎
同		稻 畑 勝太郎	同	醫學博士	今村 荒男
同		今村 繁三	同		磯 村 豐太郎
同		岩 垂 亨	同	醫學博士	岩永 仁雄
同		池田成彬	同		林
同	醫學博士	林 春雄	同		服 部 金太郎
同	醫學博士	芳 賀 榮次郎	同	醫學博士	八 旧 善之進
同	士  中  学  学  大	仁 田 直	同	醫學博士	西山信光
同	醫學博士	西 野 忠次郎	同		西 脇 濟三郎
同	醫學博士	本 田 雄五郎	同		細野順
同		堀 啓 次 郎	同	醫學博士	上肥 章司
同		遠山郁三	同	醫學博士	岡 田 和一郎
同	醫學博士	緒方知三郎	同	醫學博士	緒方十右衞門
同	醫學博士	大槻菊男	同		小 倉 正 恒
同	醫學博士	小澤修造	同	醫學博士	小澤 凱夫
同	醫學博士	小畑 龜樹	同		大 橋 新太郎
同	醫學博士	和田豐種	同		渡邊千代三郎
同		加 藤 晴比古	同	工學博士	片 岡 安
同	醫學博士	金 杉 英五郎	同	醫學博士	川添正道

評議	員 醫學博士	)]]	上漸	評議員	1 40	川崎榮助
同		門野	重九郎	同	醫學博士	勝沼精藏
同		米山	梅吉	同	醫學博士	吉 本 清太郎
同	醫學博士	高相	喬 明	同	醫學博士	高 橋 信
同	醫學博士	高村	庄太郎	同	醫學博士	高野 六郎
同	醫學博士 男爵	高木	喜寬	同	醫學博士	高安 道成
同	警學博士	田代	義 德	同	醫學博士	田宮猛雄
同	醫學博士	田村	春 吉	同		武 田 長兵衞
同		鶴田	禎次郎	同	醫學博士	都築正男
同	醫學博士	長與	叉 郎	同		長尾 欽彌
同	男 爵	中島	久萬吉	同	醫學博士	南條金雄
同	醫學博士	村田	宮吉	同		村山龍平
同		野村	德 七	同		久 保 德太郎
同	器學博士	吳	建	同	醫學博士	草 間 滋
同	醫學博士	黑田	三樹三	同	醫學博士	楠 本 長三郎
同		柳	莊太郎	同		矢野 恒太
同		山田	三次郎	同		山田準次郎
同		山本	留次	同	醫學博士	山 崎 佐
同	醫學博士	前田	松苗	画	工學博士	牧田環
同		松波	寅吉	闻	醫學博士	松山陽太郎
	醫學博士	增田	胤次	同		增田義一
同		真 鍋	嘉一郎	同	學學博士	福士 政一
同	醫學博士	藤 浪	# 100.	同	醫學博士	藤浪剛一
同	醫學博士	二木	謙三	同	男 爵	古 河 虎之助
同	士朝學智	古武	彌四郎	同	魯學博士	鯉沼茆吾
同	醫學博士	近藤	次繁	同	男 爵	近藤滋彌
同		有賀	長文	同		赤司鷹一郎
同		朝吹	常吉	同	警學博士	河本顧助
同	告申申	雨官	量七郎	[ii]		青木菊雄
同	醫學博士 男爵	青山	徹 藏	<b>a</b>		阿部房次郎
同	醫學博士	佐 多	爱彦	同	學學博士	佐谷有吉
同	場合和干	佐藤	三吉	同響學博	士 男爵	佐 藤 達次郎
同	醫學博士	佐 藤	亨	p)	士朝學曾	佐藤 恒丸

X

			4-4-4-6-19	
同	醫學博士	佐々木 隆 興	評議員	佐々木駒之助
評議員		坂田 幹太	同醫學博士	西鄉吉彌
同	島南韓干	清野 謙次	同	菊池 循一
同	工學博士	菊池 恭三	同 醫學博士	木村德衡
同	最春樟干	木村 哲二	同醫學博士	木下 正中
同	醫學梅士	三田定則	同醫學博士	三田村篤志郎
同		三 輪 善兵衞	同	三好 重道
同	醫學博士	宮川 米次	同醫學博士	南大曹
同	醫學博士	神保孝太郎	同醫學博士	島 薗 順次郎
同	子 爵	澁澤 敬三	同醫學博士	篠田 糺
同	男 爵	四條隆英	同醫學博士	鹽田廣重
同		鹽原叉策	同	鹽 谷 不二雄
同		鹽 野 儀三郎	间	平 生 釟三郎
岡		平井 政通	同	弘 世 助太郎
同		久 田 益太郎	同	日比谷平左衞門
同	工學博士	持 田 巽	同	森 平兵衞
同	醫學博士	森安連吉	同 男 爵	森村市左衞門
同	醫學博士	茂 木 藏之助	同醫學博士	瀨川昌世
同		關	同	關屋貞三郎
同	醫學博士	杉本東造	(1 p	ハ順)

## The Japanese Society of Cancer Research.

#### Patron

H. I. H. Prince Fushimi Hiroyasu

### Second Patron

Prince Fumimaro Konoe

### President

Chairman

Mataro Nagayo

### Vice-Presidents

Hiroshige Shiota

Rvokichi Inada

#### **Executive Committee**

Tokue Kimura,

Taizo Minami

Takaoki Sasaki

Yoneji Miyagawa

Baron Yoshihiro Takaki

Viscount Keizo Shibusawa

Toyotaro Isomura

Yuichi Iwase

Baron Ichizaemon Morimura

Shigezo Imamura

The subscription price is yearly \( \frac{4}{5} \), including postage. Make check, etc., payable to the Japanese Society of Cancer Research, the Pathological Institute of the Imperial University, Tokyo.

# 癌細胞に對する新染色方式の適用技法 ご其の效果に就きて

### 小室英夫

京都帝國大學理學部

予が 2592 年度後半を癌細胞の染色方式の 案出に 費して 成功 せざりしも (1), 12 月上旬, 漸く,或る暗示の下に新方式の工夫に箸手して 5 個の方式を 效案し,それによりて癌細胞を細胞核學的に 攷察するを得るに至れり。 2593 年 4 月 6 日,九州帝國大學醫學部解剖學教室に於いて開催せられし, 癌研究 會學術集談會の席上これに就きて 發表せり。 こは日本病理學會會誌第 23 年に公表せらるべし(2)。されば染色法研究の動機・經緯等に就きては重複を避け,同誌に護りて弦に發表せず,たゞ,染色技法の詳細ミ染色せられし切片の染箸工合及び色素によりて推知せらるる癌細胞の反應等を述べ,それ等方式の利點に就きて見在迄の觀察事實を記錄し同好者の參攷に供して批判を乞はんミす。

### 染色法に關する一般的注意

- 1) 色素は再蒸餾水に溶解するを可ごす。予は硬質硝子製の今村式蒸餾水製造裝置によりて、これを製造しつつあり。1回蒸餾のものが不純なるここを例證せんに、京都の水道水は甚だ屢、混濁を来し居り、藻類砂等の混入を發見するこご多きが如きものなるが、此の水を此の裝置にて蒸餾するに一定時間煮沸後容器中の水が黄褐色を呈し、甚しき沈滓を器底に生する程なり(普通蒸餾水ごして提供せらるるものを植物生理學的の實驗に使用して、水生菌の發生により予は實驗を放棄の已むなきに至りし苦き經驗を有す)。此の1回蒸餾水を、蒸餾器を清淨ならしめて再蒸籠するに、處理の終れる時器中の水は水給色を呈してモロモロを生じ居るが如し。されば色素の保存上よりも再蒸餾水を使用する方安全なり。
- 2) 水によりて脱色せんごする場合には蒸癰水を使用するこご、蓋し鹽類

を溶解し居る水には、色素が容易に溶出せざるここあり、叉、變色を起して 染色操作上不利なる場合あるが故なり。 其故蒸餾水を敷囘愛新して水洗の目 的を達するを可ごす。

3) 同一染色方式に使用する色素,丁字油等は特別の管罎を用意してそれに流し置き,他の場合に,それを其の 憔使用するここを得。Orange G 飽和丁字油 を用ゆる三色法の 場合には,Orange G を染め付くるこ同時にMethylviolett を脱色する目的を有するが故に,最初此の使用譜の Orange丁字油を材料面に掛けて,表面に沈箸せる色素を除き,新しき Orange 飽和丁字油を一滴落して染め付けを完了せしむるを可こす。

集談會にて演述せしが如く、ヘェマトキュシザン法が老成せる 癌細胞に不 敵當にして酸性色素を嗜好する事實(2),植物に於いて增殖旺盛なる活動性の 細胞は全體こして酸性なるここ、之れに反して、老成細胞は全體こして鹽基 性を色素反應によりて示すここ(3)、(4)、(5)等の過去の實驗細胞學的觀察結 果が、予に癌細胞の場合にも同樣の事實あるものならんこ、思はしめしが故 に、茲に酸性及び鹽基性の對比箸明なる色素二種又は三種を 1:1;1:2;2:1 の 比に組み合せて 6 個の染色方式を工夫し、目下研究中の 6 例の乳癌細胞に試 みたり、其の結果に就きて以下陳ぶる所あらんこす。

### 新染色方式 Neue Färbungsmethode

(I) 小室二色 II 法 (Sr.-Mv. 6 B 法). Säurefuchsin-Methylviolett 6 B - Verfahren nach 小室 (KOMURO).

第 1 表 (Tabelle I.)

Säurefuchsin 2%蒸 饝 水 溶 液
Aqua destill. Lösung

5'-10'

70 %酒精 (C<sub>2</sub>H<sub>5</sub>·OH)

滴下乃至 20'(tröpfeln-20')

注意(i) 材料の種類と性狀及び切片の厚さによりて、70%酒精により直ちに分色せらるるが故に、所要時間を明示も難も、10′—15′の場合多も。

Bemerkung(i) Gewöhnlich braucht man 10'-15' zur guten Differenzies rung; eine bestimmte Zeitdauer läßt sich nicht angeben, da sie sowohl von der Dicke der Schnitte und vom Charakter des Materials als auch von der Art des Objekts selbt abhängt.

50% ,, 30% ,, 蒸糯水 (Aq. des.) 滴下乃至 l'(tröpfeln — l')

Methylviolett 6 B 2 %蒸餾水溶液 Ag. des. Lösung

> 注意(ii) Pipette にて栽物硝子面の材料上に注ぎ乗せること。 Bemerk.(ii) Mit einer Pipette bringt man eine genügende Menge von Methylviolett 6 B-Lösung auf das Material des Objektträger.

使用濟の色素は、染色法名を明記せる、特別の管罎中に流し込み置き、次の同一染色に用ふる方便利にして經濟なり・

蒸鰡水(Aq. des.) 滴下又は PETRI 氏皿中にて短時洗滌.

Tröpfeln od. kurzes Abspülen

Bemerk.(iii) Zum Abspülen bringt man den Objektträger in eine Schale
mit Aqua destill. und spült die Schnitte schnell ab. Man trocknet
den Objektträger auf der Rückseite gut ab und tröpfelt 94(95)
% igen Alkohol auf die Schnitte.

94(95)%酒精を載物硝子の裏面をよく拭ひて、切片上に滴下す。

無水酒精(Alkohol absolutus) 滴下(tröpfeln)

製品を吟味して 100 %に近きものを使用し、硫酸銅 CuSO。にて 脱水せざる方可なり・

丁字測にて分色 (Mit Oleum Caryophylli (Eugenolum) differenziert man die Farben.) 約 ca. 2'

注意(iv) 裁物硝子の材料の貼付なき面(反對面)を十分に拭いて硝子板上に置き、水平に保ちて、Pipette にて材料上に所要量の丁字油を注ぎ、それを顕微識の裁物基上に乗せ、分色の狀態を檢鏡しつつ核及び細胞質の狀態が誤終目的に合致せる時に分色を中止して、手は「オの操作に数えて」

Bemerk.(iv) Zur Differenzierung trocknet man den Objektträger auf der Rückseite gut ab, bringt mit einer Pipette eine genügende Menge von Eugenolum auf das Material (auf den horizontal gehaltenen Objektträger) und bringt den Objektträger auf eine dem Objekttische aufliegende Glasplatte. Man beobachtet nun die schnell eintretende Differenzierung unter dem Mikroskope und unterbricht sie, wenn die Zustände des Kerns und des Zytoplasmas mit dem Beobachtungsziele zusammentreffen Nach der Entfernung von Eugenolum aus dem Objektträger muß man sodann schnell zum weiteren Verfahren übergehen.

Xylol にて材料面の丁字油を除く 3'-10'

Man bringt den Objektträger in einer Küwette mit Xylol zum Auswaschen des auf dem Schnitte übergebliebenen Eugenolums.

第二キュシロール (II. Xylel) 約30" (ca. 30 Sek.)

キュシロール・カルオブバルサム封鎖 (Man bettet die Schnitte dann in Xylol-Canadabalsam ein.)

此の染色法によりて染箸せらるる細胞の色調は,予の眼の感じ方に於いて 下の如し。

	鸦	語細胞の種類(乳癌)	增生。	增殖.	老成.	老衰.	
細胞	要素	染箸工合及び色素が	態 北. 光.	色。反。	北. 光.	色. 反.	
	細胞核	核 液(Karyolymph	)淡紫	弱酸	淡 橙	弱 鹽	
細胸		核 絲 質(Karyotin)	紫	酸	帶紫暗赤	驗	
	Kern	染色質仁(Chromocentr	en) "	>)	,,	.,	
Zelle	2	真正仁(Plasmosome	1) 紫赤(暗紅)	弱酸	赤紫	中, 弱鹽	
	刹	<b>胞 質 Zytoplasma</b>	紫	紫酸		中	

### 略字解 (以下之れに準ふ)

増生、=分裂によりて増生せる極めて新鮮なるものを意味せしめ、増生せる ものの略なり。

增殖. = 増殖中又は増殖せんミするものの略にして,前期 (Prophase) のもの, 縊れを起して二核又はそれ以上の多核を形成せんミしつつあるもの等を意味せしめたり。

増生, 増殖は活動性の細胞なり。

老成.=癌細胞ミして出來上れるもの,即ち老成せるもの.

老衰・=老衰せるものの略にして、老成せるものが愛に活動性を失へる狀態 を意味せしめたり。

北. 光. = 北窗光線 電燈を用ひず北側窗よりの光線によりて色調を検定せるここ。

色. 反. = 色素反應,色素の種類が異なるここ故,其の色調によりて細胞の酸, 鹽基性を推定せるものなり.

弱酸. =弱酸性 酸=酸性 弱鹽=弱鹽基性 鹽=鹽基性 中,=中性

中. 弱鹽=中性又は弱鹽基性

(II) 小室二色 III 法(Eos.-MB 法). Eosin-Methylenblau-Verfahren nach 小室.

第 3 表 (Tabelle III.)

(甲) Eos. (水)-MB(丁字油)法.

A) Eosin (Aqua destill.) - Methylenblau (in Eugenolum) - Behandlung.

Eosin (gelb) 0.5 %蒸餾水容液 (Aq. des.)Lösung	15 分以上十數時閒 (15 Min.— e:nige zehn Stdn.)
70%酒精(C <sub>2</sub> H <sub>5</sub> •OH)	30 — 60秒 (Sek.)
無水酒精(Alkohol absolutus)	**
同一上 ( " )	滴下 (tröpfeln)
丁学油飽和 Methylenblau	
以下前同斷 s. oben.	
(乙) <b>同變法</b> (EosMB. 水溶液連續 B) Sukzessionsfärbung mit Eos Lösung.	的染色法)。 in (Aq. des.) -Methylenblau (Aq. des.)
Eosin (同上) (oben)	l·數時間 (etwa 15 Stunden)
蒸罐水 (Aq. des.)	30 种 (Sek)
Methylenblau 1 %蒸餾水溶液 (Aq. des.)Lösung	30 分乃至數時間(30′—einige Stunden)
94 (95) %酒精 (C <sub>2</sub> H <sub>5</sub> •OH)	滴下 (tröpfeln)
無水酒精 (abs. ,, )	**
丁字油にて分色(Differenzierung)	約2分(ca. 2') s. Bemerk.(iv.)
以下前同斷 s. oben.	
Methylenblau (Aq. des.).	einem Lösungsgemisch von Eosin-
EosMB Eosin (gelb) 0.5%素 水溶混液 Methylenblau 1%	
Lösungsgemisch von Eosin-Me	ethylenblau 15 分以上數時間 (15'— einige Stunden)
Methylalkohol (CH3OH)	滴下 (tröpfeln)
無水酒精(Alkohol absolutus)	,,
丁字油にて分色 (Differenzierung mit	Eugenolum) s. Bemerk. (iv).
以下同前同斷 s. oben.	
50 1 1s	(Tabella IV.)

	胞素	\	淡	色皿	法			色出			淡		法别		淡当			(丙)		· 也		(丙)
	-		-		-		-		-		-	紫	-		-	_	-		-	小糸紫赤		
200	核絲	II	BES	赤	-	睃	藍	青	-	睃	赤	糸	- 5	<b>M</b>	赤	紫			Piff :	糸小	33	蝗
核	染色了	五仁		12		.,		,,		1.5	(約	.) ,,		11	,	,		,,		, ,		2 1
	真正	仁	暗	紫赤		,,	濃	藍青		,,	3	朱		,,	暗着	I色		11	藍	青		酸
斜	那胞	質	淡	紫	弱	酸	淡	藍青	33	酸	淡	榜	弱	鹽	淡当	表赤	弱	鼬	淡	赤紫	中,	弱鹽
	箸工合 應	3	北.	光.	色.	反.	北.	光.	色.	反.	北.	光.	色.	反.	北.	光.	色.	反.	北.	光.	色	反.
	察せる			增	档		3	增	殖	.		老	h	龙.	7	芒	N		9	移	行	型

第4表に示さるるが如く、甲法の二次的に色素を作用せらむるものにありては、丙 法の如き一次的に二色素を作用せらむる場合と其の反應を異にす。細胞内各要素の狀態を詳細に研究せんとする目的には甲法を推賞すべく、單に色素による反應を知らんとする場合には丙法の應用を可とす。丙法は明石真隆氏(6)より暗示を得て試みらものなるが、今後の研究に俟つべき點多々あり。同氏の厚意を茲に深謝す、

特に、第4表中移行型ミある項に讀者の注意を乞はんこす。こは乳癌細胞の老成せんこする過程にあるものの反應にして、真正仁 (Plasmosomen) がMethylenblau をこりて核の他要素 ミ劃然たる區別を示せるなり。予は真正仁を染色體 (Chromosomen) の一部に轉化するものと為さず、真正仁は核内の獨立せる單位と認め、核絲質 (Karyotin) と染色質仁 (Chromocentren) を同單位と為し、これが染色體に轉化せしめらるるものミ攷へつつあるが故に〔(3) 342—343、348 頁; (4) 764—765 頁, (7) 174頁; (8) 145 頁左欄參照〕,示表の如き明白なる色素反應による區別は予の上述の攷察を裏書するものミして、愉快を感ぜしめられたるこミなり。

(III)小室三色 II 法(SF.- Mv. 6 B - Org.G 法), Säurefuchsin-Methylviolett 6B - Orange G - Verfahren nach 小室,

蒸鱈水 (Aq. des.) → 滴下又は短時洗滌 (Tröpfeln od. kurzes Abspülen) s. Bemerk. (iii) in Tabelle I. 滴下(tröpfeln)

無水酒精(Alkohol absolutus) " "

丁字油飽和 Orange G ca. 2 (紫色が敵當に脱)s. Bemerk. (iv). in Eugenolum gesättigtes Orang G

以下前同斷 s. oben.

			第		6	表	(Ta	abelle	e VI.	.)			
細胞		細胞の	種類		增	生。增	殖			老	成。老	菽	
		核	液	淡		紫	弱	酸	淡		橙	弱	驗
細	核	核絲	質	北	( Jac	赤)	Ď	後	橙	(#	紫)		
	424	染色質	首仁		**		,	,		1)		*1	
胞		真正	仁	暗	紫	赤	弱	酸	暗刻	东(帶	紫)		
/36	細	胞	質	淡当	炎(帶)	淡赤)	,	,	淡		榕	21	
			1		北. 为	t.	色.	反。		北. >	£. 1	色.	又.

(IV) 小室三色 V 法 (Safr.-Mv. 6 B-Org. G 法).

Safranin-Methylviolett 6 B-Orange G-Verfahren nach 小室.

Methylviolett 6 B 2 %水. 溶. (Aq. des.) 5' 前後 (etwa 5 Min.) 95 %酒精 (C<sub>2</sub>H<sub>2</sub>·OH) 1'—2'

無水酒精 (Alkohol absolutus)

丁字油飽和 Orange G 2'—5' (Methylviolett が分色) s. Bemerk. (iv.) in Eugenolum gesättigtes Orange G せらるる迄, 普通3'位) s. Oben.

1	现察	部位	Ł		增生、增殖、老质								成.	老	衰.	
	染箸		合と反應		北簄	光彩	泉に。	i i)		色	. 反.	4	է.	光.	色	. 反.
	核		液	淡栖	(得	紫)	淡菜	(得	持橙)	弱	- M	炎 淡木	登(有	黄)	弱	顧
	核	絲	質	濃紫	( 得	赤)	紫		赤		西发	暗		橙		驗
核	染色	色質	仁		**			,,			-11		,,			*>
	真	Œ	仁	濃	赤	紫	濃	赤	紫		22	濃	紫	橙		**
細	胞	1	ĬĮ.	将	帶	紫)	淡	紫	赤	弱	Mi.	自橙		紫	中.	弱鹽
				小	室	液	Сн	AMI	PY液			小CH	IAM	室		
				- 6	刮	i	Ē	液				-	定	-		

備強 小室液\*に固定せるものは Pikrinsäure が、場合によりて、 酸性色素として作用する為めに CHAMPY 液にて固定せるも のと異れる染管工合を現すことあるを説明せんとして、第8 表の如く表示せしなり[\*)(9)参照]。

以上6個の染色方式を試み,種々の點に於いて良果を得たる上,予が知らんご欲せし細胞各要素の色素反應による性狀を知り得たり。目下研究中の6例の乳癌細胞に應用せる,上述六方式の染色法によりて得たる見在迄の結果を表記すれば第9表の如し。

細	胞要	素	癌細胞の	D種類	增增	生.殖.		7. 老		利			텥
	核	核	(Karyoly	mphe	995	後性	中性又	は弱鹽	基性	中性	又は	羽鹽	基性
細胞		核絲質	(Karyotii	n)	酸	性		基	14.	33	鹽	基	性
		染色質仁	(Chromoo	centren)				**				2.5	
Zelle		真正仁	(Plasmos	omen)	,	,		11		酸			性
		細胞質(	Zytoplasm	a)	弱質	<b> </b>	中性又	工彩鹽	基性	中性	又は	弱鹽	基性
			核分製中	の癌細	泡 (彩彩	色質細胞質		酸 弱酸	性				_

第9表より吾人は新に増生せる癌細胞又は増殖せんとしつつあるものは全 體として酸性なること、老成せるもの及び老衰せる癌細胞は之れに反して鹽 基性なることを知り得べし.

これに因つて予が昨年約半ヶ年を Hämatoxylin 法に費して失敗を重ねたる原因を見出せり。 卽ち

- 1) 老成癌細胞が、鹽基性色素に編入せられ居るヘェマトキュシリンに染箸せざりしは該細胞が鹽基性なる為めなりしなり。
- 2) 老成癌細胞が陰陽相和して Eosin をこるに反し、増生せんこする癌細胞が Eosin を受けつけざりし理由も自ら明なり。
- 3) 增生しつつある癌細胞は、全體 こして、酸性なりしが故に、ヘュマトキュシリッとに親和して染箸工合良好なりしなり。

### 本染色法應用の效果

以上6個の染色方式應用結果を綜合して第9表の如き事實を知り得るが故 に、これらの方式を應用するここにより

癌細胞の老成せるものなりや、將た、叉、增殖しつつあるものなりや を知り得るここに重大なる意義ありて、癌細胞の研究上重要なりこ信ず。 即ち、

- 1) 細胞全體ミして鹽基性色素に**濃染する**細胞の一関ある場合には,其の細胞なは增殖性の傾向を有するものミ認め得るここ。
- 2) 斯かる細胞なは濃染性にして Eosin 其の他の酸性色素に好染せず・核 の甚しき形態上の異常性を認む. 無核絲的 amitotisch に分裂する多く の細胞を見る.
- 3) 細胞全體こして鹽基性色素に淡染する細胞なあらば、これ老成せる細胞 園にして酸性色素に好染す・
- 4) 斯かる淡染癌細胞茎中には**有絲核分裂(Mi**tose) <u>を爲すものを認め、核の</u> 形態に大なる異常性を見ず、有絲核分裂を爲せるものは、鹽基性色素に 濃染して、その活動性を物語りつつあり。
- 5) 以上の如き濃染性 (Hyperchromatose) ミ淡染性 (Hypochromatose) ミは同一切片中に起る現象なるが故に、明に其の細胞の性質を判定し得る利便あり、即ち、鹽基性色素に淡染性の癌細胞は、全體として、鹽基性なることを示して老衰せるものか、又は、老成せんとしつつあることを意味し、該色素に濃染性のものは細胞全體として酸性を呈せる證左にして、増生せるものか、又は、増殖せんとしつつある活動性の癌細胞なる

が如し

#### 結 語

人類の癌細胞に對する色素反應による其の性狀ミ,植物體に生ぜるX線放射に由來せる腫瘍及びCoaltar 浸漬に由つて生起せしめられし腫瘍に於けるそれ等ミが一致せるこミ,換言せば,腫瘍化せんミする細胞型の有する性狀が動,植物に於いて差異なきこミは特筆に値すべし〔第9表,文獻(1),(4),(5)參照〕.

之れに囚つても、腫瘍は原形質を構成する膠質溶液の狀態を變化せしむる要因が與へられて、其の場所の細胞に起れる變化によりて生ずるものに外ならず。決して、外部より原因體を移植又は移注によりて受け入るるここのみによりて起るものにあらざるここを知り得べし[(5)及び(10) 参照].

此の關係に於いて、o-Amido-azotoluol<sup>1)</sup> を混和せる食餌を與へて肝臓癌 を Rattus norvegicus var. albus FITZINGER に作られし告田富三氏の研 究は、予にこりて 極めて 興味深く、 意味深長に感ぜしめられたり [(11) 参 照].

- 備攷 (4)上述の如き色調(第2,4,6,8表参照)は各人の色に對する感覺の差にて多少の差あるが故に Geradsichtiges Spektroskop にて日光光線の色帶を讀み、それミ北窓光線による染色切片の顯微鏡的觀察の色調ミを比較して、予が(5)の論文に於いて試みしが如く記載する要あれごも、一般的の記載法ミしては了解困難の憾みあり、其故本稿にては、予の眼に感ぜる色調を以て記録せり。
- (ロ)小室液にて固定せる材料は Pikrinsäure の脱色が十分ならざる時には、 それが黄色の酸性色素こして作用するが故に、二色 II 及び III 法を施せし 場合・一種の三色法を試みしこ同一效果を現すここあり。

<sup>1)</sup> 又吉田氏の O-Amido-azotoluol の Oliv 油溶液を注射して飼育せし野生豚鼠 (Cavia cobaya)に於ける甲狀腺の上皮化性に關する研究も、肝臓癌の場合と同じく、O-Amido-azotoluol な組織が選擇的に吸収せる點に於いて極めて重要なり。癌發生の原因研究上重要なる業績なりと信ず〔(12)参照〕。

#### (ハ)予は

 $94(95)\% C_2H_5 \cdot OH : H_2O_2(Oxyfull) = 20ca : 6 ca$ 

の比に混和せる液中に約24時間(ca. 24 Stunden) (又はそれ以上に 渉るこ こあり) 放置して Pikrinsäur. の黄色を脱しつつあり (Zur Entfärbung der Pikrinsäurefarbe).

本研究に使用せる材料は大阪帝國大學警導部西岡時雄, 藤野守次兩氏の御厚意と御 畫力によりて同大學外科教室より得たり、同外科各位の御助力と共に兩氏に深謝す。

本研究は帝國學士院 の 2592-2593 年度補助金と 木谷吉次郎氏の寄附によりて途行 するた得たり。 恩師池野成一郎博士並に 藤浪艦博士の 特別 なる 御後楼に貫ふ所大な り。

諸彦の御同情ある御配慮に對して滿腔の謝意を表するは箸者の喜しき責務なり。 (皇紀 2593 季 5 月 21 日誌)

### 參弦文獻 (Literatur.)

- 1) 小室英夫, 皇紀 2593: 癌細胞と内腫の細胞學的差異に關する研究. 帝國學士院昭和8年度學術研究獎勵資金及事業便覽. 107—109 頁.
- 2) ——, ——: 癌細胞の染色新方式に就きて、日本病理學會會誌. 第 23 年に發表. (Eine neue Färbungsmethode für Krebszellen. Erscheint in « Nihon Byôrigakkwai Kwaisi » Bd. XXIII.).
- 3) ——, 2590: On the histogenetical study of "X-Sen-Syuyo" (RÖNTGEN-Tumours) with special reference to the peculiarity of active nuclei and to the tissue-abnormality induced therefrom. 糖 "Gann" XXIV (3): 337—352, 圖版 (Plate) X-XI.
- 4) —, —: Mikrochemische und zytologische Befunde an röntgenbestrahlstem Pflanzengewebe. II. Unterschiede zwischen dem "Naturtod" (Altersschwäz chetod) und dem Röntgenbestrahlungstod in den Wurzelspitzen von Vicia faba. Fortschr. a. d. Gebiete d. Röntgenstr. XLII(6): 763—769.
- 5) —, 2592: Betrachtungen über die zytologischen Veränderungen in den in Kohlenteerlösung getauchten Wurzelspitzen junger Pflanzen. «La Cellule » XLI(3): 219—239. 插圆 (Textabbn.) 9 個, 圖版 (Taf.) 1 葉.
- 6) 明石眞隆, 佐藤重利, 2575: ロマノウスキ氏染色に用ゆるギームザ氏液の簡單なる製造に就きて. 東京醫事新誌. 第1946 號.
- 7) 小室英夫, 2584: Trllium の根端細胞に於ける核と其の染色體. 植物學雑誌. XXXVIII(452): 171—174. (外遊中の寄稿とて, 自ら校正せざり i 為めに設植多きは遺憾なり).

- 8) 小室英夫, 2593: 細胞及び細胞分裂の意義と腫瘍生起に關する細胞學的致察. I. 科學 III(4): 171—174. 插圖 5 個 (Über den Begriff der Zelle. Eine neue Auffassung von Zellteilung. Zytologische Betrachtung über die Entstehung von Tumor. I. «Kwagaku» III(4): 171—174, 5 Textabbn.).
- 9) ——, 2592: 新固定液(eine neue Mischungsformel für das Fixiermittel)に就 きて、同誌. Ibid. II(12): 513-514.
- 10) ——, 2593: 細胞及び細胞分裂の意義と腫瘍生起に 関する 細胞學的攷察. II (Dusselbe Thema wie oben dit. (8). II). 同誌. Ibid. III(6): 245—250. 插圖(Textabbn.) 4 個.
- 11) 吉田富三(Yoshida-Tomizo), 2592: Über die experimentelle Erzeugung von Hepatom durch die Fütterung mit O-Amido-azotoluol. 帝國學士院紀事.(Proceed. Imp. Acad.) VIII(9): 464—467. 搖圖(Textabbn.) 4個.
- 12) ——, 2592: Experimenteller Beitrag zur Frage der Epithelmetaplasie. VIRCHOWS Arch. f. pathol. Anat. u. Physiol. & klin. Med. CCLXXXIII(1): 29—40, 插圖(Textabbn.) 6 個.

附記 日本語記述論文に使用の文字に關する予の見解は科學 H(3): 129-130 に述べ置けり、共の使用 したき文字と一般活字との對照は同誌 H(12), 514 頁, 及び同誌 HI(6), 250 頁にあり、それを以て正談表に代へしめんとす。

### Résumé

# Über das Verfahren mit einer neuen Färbungsmethode für Krebszellen nach 小室 (KOMURO) und dessen Applikationswert

von

# 小室英夫

KOMURO - Hideo

Wissenschaftliche Fakultät der Kyôto Teikoku-Daigaku.

Ich machte die Erfahrung, daß die Hämatoxylinfärbung für Krebszellen vom Standpunkte der cyto-karyologischen Untersuchung: en aus nicht günstig ist [Lit. (2)]. Ich habe darum eine Färbungs: methode für Geschwulstzellen gesucht und gefunden:

- (I) Säurefuchsin-Methylviolett 6 B-Verfahren nach 小宅, s. Tabelle I.
- (II) Eosin-Methylenblau-Verfahren nach 小室, s. Tabelle III, A, B, u. C.
  - A) Eosin-(Aqua destill.)-Methylenblau ( in Eugenolum)-Behandlung.
  - B) Sukzessionsfärbung mit Eosin(Aq. des.) Methylenblau (aq. des.)-Lösung.
  - C) Gleichzeitige Färbung mit einem Lösungsgemisch von Eosin-Methylenblau (Aq. des.).
- (III) Säurefuchsin-Methylviolett 6 B-Orange G-Verfahren nach 小室, s. Tabelle V.
- (IV) Safranin-Methylviolett 6 B-Orange G-Verfahren nach 小学, s. Tabelle VII.

Bei Material, das mit 小宝-Fixiermittel<sup>2</sup> getötet und in dem noch etwas Pikrinsäurefarbe nachgeblieben ist, (halbgebleichtes Material) wirkt die Doppelfärbung als Dreifärbung.

Von diesen sechs Methoden wählte ich das günstigste Verafahren zur Beobachtung, den Materialzuständen gemäß, aus. Das Eosin-Methylenblau-Verfahren (C) ist vorzüglich zur Bestimmung der sauer-alkalischen Verhältnisse der Geschwulstzellen.

### Applikationswert.

Durch die Applikation dieser Färbungen kann man erkennen, ob die Krebszellen im lebhaft wachsenden Zustande sind oder im altersschwachen Zustande.

Diese Tatsache scheint mir von großer Bedeutung für die Krebszellforschung zu sein:

<sup>2)</sup> Gesättigte Lösung (Aqua destill.) von Pikrinsäure	4 Volm.
3%ige (Aq. des.) Lösung von Kalium bichromicum K2Cr2O7	3 .,
1%ige (Aq. des.) Lösung von Chromsäure CrO <sub>3</sub>	3 ,,
Siehe Lit. (9)	

- 1) Wenn man eine Gruppe der mit basischen Farben tiefgefärbten Zellen findet, kann man sie als solche, denen eine Vermehrungstendenz innewohnt, betrachten.
- 2) Diese Zellgruppe ist tiefgefärbt, nicht färbbar mit Eosin bzw. anderen Säurefarben und ihre Kerne zeigen bedeutende morphologische Abnormitäten. Es gab mehrere Kerne, die in amitotischer Weise geteilt waren.
- 3) Trifft man auf eine mit basischen Farben schwachgefärbte Zellmasse, so kann man sie als älter gewordene od., altersschwache Zellgruppe betrachten, die die Säurefarben gut affiziert hat.
- 4) In dieser schwachgefärbten Krebszellgruppe findet man mitotische Kernteilung, deren Kerne keine so große morphologischen Ungewöhnlichkeiten zeigen. Sind die mitotisch sich teilenden Kerne von dem basischen Farbstoffe tiefgefärbt, so zeigt der Farbcharakter ihre Aktivität an.
- 5) Hyperchromatose und Hypochromatose erscheinen in ein und demselben Präparate gleichzeitig im Verlaufe eines Färbungsverfahrens. Dadurch hat man den Vorteil mit Leichtigkeit den Charakter der Krebszellen sichtbar beurteilen zu können. Das will sagen, daß die mit den basischen Farben schwachgefärbten Krebszellen, im ganzen alkalisch erscheinend, im Zustande des Älterwerdens od. altersschwachen Zustande sind, und, daß die mit demselben Farbstoffe tiefgefärbten Zellen meistens sauere Verhältnisse zeigen und im frisch geteilten oder lebhaft wachsenden Zustande zu sein scheinen (Beweis).

### Schlußbemerkung.

Mittels dieser 6 Methoden konnte ich die Reaktion der Mamma» krebszellen bestimmen:

Tabelle IX'.

	1	beob	rt der achteten MKZ	send frisch	t wach: e od. geteilte elle	alterss	ewordene od. chwache elle	Übergangs: zustand
	Zelle	element		Rea	ktion	Rea	ktion	Reaktion
	Kern	Karyolymphe		schw. sauer		neutral od. schw. alk.		neutral od. schw. alk.
		Karyotin		sauer		Alkalisch		schw. alk.
Zelle		Chromo	centren	,,		,,		52
e		Plasmosomen		**		**		sauer
	Zytoplasma			schw. sauer		neutral od. schw. alk.		neutral od. schw. alk.
			Chromo	somen	sa	uer	Abki	irzungen:
			sog. Spindel: fasern		,,		alk.'=alkalisch MKZ=Mammakrebszelle schw.=schwach	
		Zytoplasma		schw. sauer				

Diese Ergebnisse stimmen mit denjenigen des Pflanzenmaterials überein [siehe Lit. (4), S. 764-766, Tabelle 1, 2 und 3].

Dies Zusammentreffen des saueren Zustands der lebhaft wachsenden Mammakrebszellen mit der Erzeugungsursache pflanzlicher Geschwülste (meine «Röntgengeschwulst »3) und «Phytoteertumor »4) in Beziehung zu dem saueren Zustande der Zelle ist sehr wichtig für die Erklärung der Tumorentstehung [cf. Lit. (1), (4) und (5)]: Die Geschwulst ist nichts anderes als eine Zellentartung an einigen Stellen, die die Entstehungsfaktoren der kolloidalen Zustandsveränderungen des Protoplasmas gegenüber den Gewebszellen des betreffenden Ortes erzeugt hat <sup>5)</sup>. Die Transplantation eines Tumorstücks und die Injektion von Tumorsaft aus anderem Tierkörper sind nicht immer nötig als Erzeugungsagenzien von Tumoren. Die sauer-alkalischen Veränderungen in den Gewebszellen scheinen mir eine große Rolle beim Vorgange der Tumorentstehung zu spielen [cf. Lit. (5) u. (10)].

<sup>3)</sup> Siehe Lit. (3)

<sup>\*\* (5)

5)</sup> In dieser Hinsicht ist das durch die Fütterung mit o-Amido-azotoluol erzeugte Hepatom von 書田富三 (Yoshida-Tomizô) bedeutungsvoll und interess sant (cf. Lit. (11)).

### 跋 Postskriptum

8月12日(12. August 皇紀 2593) 山羽儀兵君より

山羽儀兵, 石井友幸箸 Über die Wasserstoffionenkonzentration und die isbelektrische Reaktion der pflanzlichen Protoplasten, insbesondere des Zellkernes und der Plastiden. «Protoplasma» XIX (2): 194-212, Textabbn. 1-2.

なる近箸を恵送せられたり.

それにより、植物原形質の  $pH_i$  慣は植物の種類によりて差あれごも、細菌の**アルカリ性** IEP を例外 こして、 $1.6 \le 7.6$  の閒にあり、されご、多くの場合、普通の原形質は pH 5.0 の附近にあり (同箸第 1 表).

第2表に PISCHINGER, ZEIGER, JACQUIERT, NAYLOR 氏等の動植物組織細胞の數種類, 細胞要素が Alkohol, Formol, Chromessigsäure 等によりて固定せられし場合の pH をあけ, それが酸性の側に在るを指摘し居れり. 又山羽氏等はそらまめ根端細胞に NAYLOR 式の染箸法を試み第3表に其の結果を下の如く誌し居れり.

超定液 細胞要素	Chromessigsäure	Alkohol
細胞質 (Zytoplasma)	pH <sub>i</sub> 4.7	4.2
細胞核(Zellkern)	5.5	4.0
仁(Nukleolus)	5.7	5.5

茲に、根端組織の部を示され居らざるは慥憾なれごも、**そらまめ**根端細胞が全體こして酸性なるここを知り得しは予にこり、極めて興味深し

山羽氏等の業績を通覽して、特に予の注意を引きしは

- 2) 細胞核の pH 價が組織の異なるに依つて差異 あるここを 認めて, 第 18 表に下の如く示され居るここ.

	細胞核	細胞液
Stengel von Impatie	ens Balsami	na
Epidermis (表皮)	рH —	pH 4.0
Äußere Rinde (外部皮層)	4.8	5.
Siebteil (篩部)	. 5.8	5.0
Gefästeil (導管部,木部)	5.0	4.6
Mark (髓)	5.6	5.6
Allium	Cepa	
Blätter (grün) (綠葉)	4.2-4.4	4.8
,, (weiß) (白葉)	4.6	4 8-5.0
Zwiebelepidermis (鱗苗表皮)	4.2	4.0-4.2
Zwiebelmesophyll (——葉肉)	4.6-4.8	4.8-5.0
Wurzel (根)	5,0-5.2	

3) 分裂中の細胞が細胞全體 こして酸性 なるこミ (pH 4.0-6.2) [第19 表].

### 等,これなり。

之れ等の事實を靜觀するに、予が過去に於いて植物材料のX線腫瘍、たー る腫瘍の組織分化の研究に方りて、色素反應に違りて知り得たる細胞要素の 「酸-アルカリ性關係」、殊に

- 1) 旺んに成長しつ x ある細胞及び一旦退行性變化を起せし細胞が再び巨 大核ミなりて, 若返り、細胞分割法[科學 III (6), S. 248(10) 参照]に よりて増殖せんこするが如き場合には甚しく鹽基性色素嗜好性(basophil)にして細胞全體こして酸性なるここ,
- 2) 組織が部分によりて同一色素に對し、異れる染箸工合を示すここ、即 ち、成長點部位こそれを距るここ數 mm. 乃至十數 mm. の部位(成 長點部位 Vegetationsstelle, 原中心柱 Plerom, 原皮層 Periblem, 根冠 Kalyptra 等)の細胞核が酸性及びアルカリ性色素による二重染 色を施せる場合、或る部分の核は酸性色素嗜好性 (acidophil) なれご も、他は basophil なるが如きここ、

3) 單染色(例へば HEIDENHAIN 鐵明礬へェまごきュしりん法) を施せる 場合にありても同一切片中に組織部位の如何により, 又同一組織中に ても細胞の狀態に應じて, それに濃染するもの淡染するものごあるが 如く染箸度合を異にするこご

等の事實に對して、山羽氏等は水素イオン濃度の關係によりて説明の根據を 與へられしここ故、予にこりては甚だ愉快なり。蓋し氏等によりて聞接に予 の觀察事實が裏書されしものなればなり。

予が本論文に於いて述べしが如き事實も, 形態的に細胞ミ呼ばる >,

«蛋白質物,脂肪物質等を主體ミする膠質液にして 數種の分散媒中に各 各特殊の分散相を含める一の分散系ミ見なすべき原形質。

によりて構成せらるゝ動物體の或る部位に生ぜる,癌細胞なる特殊病的細胞に於いて認めたる事柄なり。且つ染色法攷案の動機が普通の染色法にて成功せず,X線腫瘍,た一る腫瘍等の細胞學的研究によりて得たる細胞の酸-アルカリ性關係に暗示せられしものなれば,山羽氏等の研究によりて,同樣に,色素反應に違る染箸性に差ありて,それに意味ありこなす,予の所說に妥當性あるここを證明せられしものこ謂ふを得ん乎。

### 攷 察 Betrachtungen

病的に特殊細胞に分泌物ある場合には、其の物質の存在に由つて該部位細胞が同一色素に對して、他細胞に異なる色調に染管すべきは理の當然なり。それを(4)電氣的(ロ)指示薬法(ハ)比色法等によりて水素イオン濃度を測定すれば、或る數値こして表示され得べし、されごも、其の數値は同一材料を使用するも、(4)(ロ)(ハ)等の測定法閒に多少の差あり、又、測定者に使用せし器械、指薬等によりても差を生ずるは已むを得じ[末尾文獻(3)参照]・さあれ、それに循りて組織閒に、文、病的部位に健康部位閒に「酸-アルカリ性關係」に於いて差あるここを知り得べし、癌、肉腫等の材料に就きての pH 價を觀察者により

7.07以上, 即ちアルカリ性

7.07以下, 即ち 酸性

ご為すが如き大差を示して、吾人をして反對の結果ならずやご思はしむれご も、こは

- 1) 材料の採取方が該原形質に及ぼせる變化
- 2) 測定法の差異
- 3) 材料の部位による差異,即ち,腫瘍細胞の老成部位ミ増生しつゝある部位に於ける異同

等の主要件によりて生ずるものなれば、研究者各自が

- (4)材料採取方法
- (ロ)自己の測定法
- (ハ)使用材料の部位

を明示して参攷に供し、讀者はそれを基準ミして其の結果を攷察せざるべからず.

それ等の結果を参攷に供して自己の研究材料に予が提案せし染色法(單に,細胞核 5細胞質, 又は,組織相互開の"酸-アルカリ關係"を見んさせばMethylenblau-Eosin の同時染色法を試むるを可ごす。此の試みの改良法は目下工夫中なり)を試みて同一組織細胞開相互,又は,異種組織間の關係を察知し,其の研究目的に合致する判定を下さざるべからず。

斯く論ぜしは組織内部の pH 價の測定 は困難 にして, 其の數値に差異を生する要因あるが故に, 甲を是こして乙を否こ為し難き場合あるものなれば, 其の文獻の攷察に方 り て 注意を要するここゝ, 各々自己の研究材料に對しては色素に染箸する度合を攷慮し, 其の細胞の形態的異常性を觀察して, 老成せるものか, 增生しつゝあるものか等を判定し, 所謂形態的癌細胞の分類法のみに重要性を置きてそれに捕はれざるここに悪意せざるべからざるここを自己の 小經驗に基きて述べんこせしにあり. 蓋し, 予は自己の染色法を應用して癌細胞の研究を爲しつゝある時癌細胞の形態に基く分類よりも, 其の色素反應に違る "細胞の酸 - アルカリ性関係 "と其の細胞核の形態的變化の攷察に基く、老成せるものか、增生しつゝあるものかを判定するここに重大なる

意義あるここを痛感せしめられ居るが故なり(之れに就きては他日の機會に、 特に論ずるこころあるべし)。

何如ミならば、予は科學 III (6)、本論文「結語」等に於いて詳論せしが如く、腫瘍は移植せられしものが其の移植地に増殖する場合を除き(これさへも、腫瘍組織片の移植、又は、腫瘍遮液の移注によりて、腫瘍發生の要因を外部より與ふる場合 三解釋するこミを得べし)、同一動植物の自己體内に於いて生ぜし腫瘍發生の要因が或る部位に作用し、それが該部位の原形質に膠質化學的、蛋白物理化學的變化を起し、其の結果、細胞の內容に形態的異狀を生ぜしむるものにして、其の異常が酸性の原形質狀態 三相俟ちて特殊細胞羣の生起、それの異常增生の組織內浸潤を結果す、之れ、即ち、組織異常 三轉移現象の一面なり。こは增生しつ、ある場合の狀態にして、老成せるものにありてはacidophil ミなり(第9表参照)、結節をなし、其の細胞團が種々の形態をこれるもの多し、これ癌細胞團の形態的分類が存する所以ならん(第10表中の結節形成ミは種々の形態をこれる細胞團を意味す)。

上述の關係を表示すれば次の如し。

- (4\*) 皇紀二五九○丁: X線放射に由來する植物體內に生ぜる Neoplasma, 予の謂 ふ, X線腫瘍の組織分化に關する研究, (I)巨大細胞及び巨大核が組織異常 を起すこと並に活動性核の性狀に就きて、日本病理, 食誌 XX:761-765。
- (ろ)皇紀二五九○茂: Über die Gewebeabnormität infolge von Riesenkern- und Riesenzellenentstehung durch Tauchung in Kohlenteerlösung bei *Pisum sativum*-Wurzelspitze. 帝, 學 紀, (Proc. Imp. Acad.) VI (9):375-378, 括岡 3,
- (は)皇紀二五九一丙: Über die Entstehung der Gewebeabnormität und des Knotenanfangs infolge von Infiltration spezieller Zellgruppen in RÖNTGEN≥ bestrahltem Pflanzengewebe. 同誌(Ibid.)♥Ⅱ(3):117-120, 括圖 2.
- (に)皇紀二五九一庚: X線腫瘍の組織分化に關する研究, II. 特殊細胞撃の浸潤が組織異常を起すことに就きて、日本病理, 會誌 XXI:704-707.
- (ほ)皇紀二五九二丁: Coaltar 溶液浸漬幼植物根端組織と Coaltar 塗擦動物組織の細胞核學的研究。同誌 XXII:420-426。

<sup>6)</sup> 植物性腫瘍に於ける此の關係は下記の論文中に述べ置けり、 本論文引用文獻中の(3),(4),(5),(8),(10).

#### 第 10 表 (Tabelle X)

腫瘍片の移植又は腫瘍濾液の移注 (外部より發生要因を移轉するこご) 或る組織に及す腫瘍發生要因のの作用 (一生物體の自體内に於ける)

原形質の膠質狀態及び蛋白物理化學的條件の變化

細胞及び細胞核に於ける退行性變化の種々相(\*細胞質の變化を)

結節形成(オ)(イ) 腫瘍形成完了(ロ)

轉移形成經路

第10表中の記號略字の意義は第11表の如し(第9表参照)。

第 11 表 (Tabelle XI)

記號	癌細胞の狀態	色素親和性		
(ロ) 老成せるもの		酸性色素嗜好性		
(才)	旺盛に増生しついあるもの	鹽基性色素嗜好性		
(1)	移行型のもの	多くの場合多少酸性色素嗜好性 鹽基性色素嗜好性なる <b>異正仁</b> を有す		

<sup>5)</sup> 腫瘍後生要因[小室(10), 248-249頁參照] は組織の變り目に其の作用を管明に及し、其所に腫瘍を發生せしむることは、豊に、音に動物に於いて然るのみならず、植物材料に於いても、亦然り。多く組織の變り目に腫瘍を發見せしことは、低に、拙箸日本病理、會誌 XX:761-765[脚註号(い)]

<sup>,,</sup> 日本病理, 會議 XXII:420-426(脚註 6) (ほ)

<sup>·</sup> 科學 II (6):245-250 [10]

に述べたり。

<sup>8</sup> Cf. 小室: 帝國學士院紀事 VII(3):117:120(脚註®(は))

<sup>· :</sup> 日本病理會誌 XXI:704-707 [脚註の(に)]

上の記載ご第10表に述べし、原發及び轉移腫瘍の形成經路に就きての推定 は予の數種の癌細胞に關する觀察結果の總括的結論なり、それを究明して其 の對策を講する所に、癌研究の使命あるにあらずや、ご愚狡すればなり、

此の見地に立てる癌細胞の研究法が細胞學的が法ミして新生命ある所以なり、其故,敢て予はミ癌細胞の新研究法ミして本稿を艸し,以て同學者諸彥の批判を乞ふなり。 (皇紀 2598 季 8 月 23 日誌)

下記の論文は組織内部(腫瘍組織を含む), 細胞要素等の PH, PH; を測定せる記錄 こして參攷資料に富めり。 御參攷迄に列擧せん。

- 1) Reiss, P.: Remarques sur le  $P_{\rm H}$  intérieur du noyau cellulaire et ses variations expérimentales. Comp. Rend. Acad. Scs. CLXXIX: 641—643.
- Quelques données sur le P<sub>H</sub> intérieur apparent du protoplasme et du noyau. Arch. Physique biolog. IV(1): 85—42.
- 3) VLÈS, Fred, Paul Reiss et Edmond Vellinger: Recherches potentiométris ques sur le  $P_{\rm H}$  intérieur de l'oeuf d' Oursin. Bull. Inst. Océaograph. on. 450:1-14, 插圖 2.
- VLÈs, Fred: Recherche sur le P<sub>II</sub> intérieur cellulaire. Arch. Physique biolog. IV(1):1—20, 指圖 11,
- 5) VLÈS, et André de COULON: Recherche sur les propriétés physico-chimiques des tissus en relation avec l'état normal ou pathologique de l'organisme. Ibid. IV(1):43-85, 插圖 1-11.
  - 億弦 «酸─アルカリ関係»ご跋中にあるは «酸アルカリ性関係»の意なり.

### Résumé für das Postskriptum.

Durch die Arbeit von 川瀬 (YAMAHA) und 石井 (ISHII) in "Protoplasma" XIX (2), S. 194-212 waren meine früheren Resultate, die durch die Anwendung der Farbstoffe bei gesundem bzw. pathologischem (RÖNTGENgeschwulst und Phytoteertumor) Pflanzengewebe "sauer-alkalische Verhältnisse der Zelle" festgestellt worden waren [cf. 小宝: (3), (4) und (5)], indirekt mitaufgenommen worden. Diese Verhältnisse der Zellelemente und Gewebezellen haben die Krebszellforschung zur Erfindung eines neuen Färbungsverfahrens angeregt

[cf. 小室: 日本病理. 會誌 XXIII (2)].

Wie ich in meinem Vortrag bei der Tagung der 無研究會 (Nipponschen Gesellschaft für Krebsforschung) am 6. April dieses Jahres in der 九州帝國大學醫學部 (Medizinischen Fakultät an der Kyūshū Teikoku-Daigaku) dargelegt habe, der in dem Tagungsberichte 日本病理學會會誌 "Nihon Byôrigakkwai Kwaisi" XXIII. Jahrgang (2) veröffentlicht wurde, gelang die Färbung der älter gewordenen Krebszellen mit Hämatoxylin meist nicht gut; nur die lebhaft wachsenden oder infiltrierenden Krebszellen nahmen das Hämatoxylin stark an. Der Kern der ersten Art Krebszellen war acidophil. Diese Eigenschaften stimmen mit denjenigen der Zellen meiner Röntgengeschwulst und meines Phytoteertumors überein. Die Doppelfärbung mit einer sauren und alkalischen Farbe und die

Dreifärbung mit einer alkalischen Farb. und einer sauren Farb. wurden von mir dadurch gefunden.

Die Veränderung der sauer-alkalischen Verhältnisse in den Zellen eines Cewebes ist mit eine wichtige Entstehungsursache des Tumors, mit Ausnahme des transplantierten, die Transplantation von Tumorstückchen oder die Injektion von filtriertem Tumorsafte kann man auch als einen äußeren Tumorerzeugungsfaktor ansehen. Wäre der Erzeugungsfaktor im Organismus selbst entstanden oder durch Transplantation auf irgendein Gewebe gegeben, so würden die kollo dchemischen und protein - physico - chemischen Verände: rungen im Protoplasma an den entsprechenden Stellen hervorgerufen worden sein. Die Überganszellen zwischen zwei anderen Geweben sind sehr empfindlich gegenüber der Wirkung der Tumorerzeugungs: faktoren. In den pflanzlichen Materialien wurden die Tumoren auch an dieser Stelle gefunden, cf. 小室: 日本病理. 會誌XX [Fußnote 6) (い)]; Ibid. XXII [Fußnote 6) (ほ)]; 科學 "Kwagaku" III (6) [10]. Für die Tumorentstehung werden folgende Entartungen angenom: men:

### TABELLE X' (cf. 小室 [10])



In der Tabelle X' wird man die Zeichen (A), (L) und (U) bemerken; die Erklärung findet sich in Tabelle XI', cf. Tabelle IX (Tabelle IX' im ersten Résumé).

<sup>9)</sup> Cf. 小室: 帝國學士院紀事 (Proc. Imp. Acad.) VII (3): 117-120 [Fußnote 6) (は)].

<sup>- :</sup> 日本病理. 會誌 XXI: 704-707 [dieselbe (に)].

TABLLE XI'

Zeichen	Zustand der Tumorzellen	Farbenaffinität	
(A)	älter gewordener	acidophil	
(L)	lebhaft wachsender	basophil	
(U)	Übergangszustand	meistens etwas acidophil mit basophilen Plasmosomen	

Kurz, die Ansicht des Verfassers geht dahin, daß die Tumorentstehung nichts anderes ist als eine Gestaltänderung von Zellen und von Gewebe an irgendeiner Stelle eines Organismus mit anderen Worten, der Tumor ist eine Veränderung der kolloidalen Zustände des Protoplasmas, die durch die Wirkung von Tumorerzeugungsfaktoren<sup>10)</sup> hervorgerufen wurde.

Nach meinen Beobachtungen an Krebszellen verschiedener Art konnte ich in ihrer morphologischen Klassifikation kein ausschlaggebendes Faktum erkennen. In der Krebsforschung scheint es mir wichtig und von Bedeutung zu beachten, daß die Krebszellen im lebhaft wachsenden Zustande oder in dem älter gewordenen im Gewebe waren. Die Aufgabe der Krebsforschung ist es, die zur Beseitigung dieser Gewebezustände am besten geeigneten Gegenmaßregeln zu finden.

Von diesem Gesichtspunkte aus würde sich mein Färbungs-

- 10) Als Tumorerzeugungsfaktoren sind zu nennen [cf. 小宝 (10), S. 248-249]:
  - physikalische Einwirkung (Röntgen- u. Radiumstrahlen, Ultraviolettlicht, Wärme usw.),
  - chemische Einwirkung (Salze, Säuren, Kohlenteer, Paraffin, Ruß, die chemische Substanz vom Hauptbestandteile des Geschmacksmaterials usw.),
  - 3) eine Art gewohnheitsmäßig einwirkender Druckkraft, z. B. der konstant einwirkende Druck des Pfeifenmundstücks auf die Lippen (Lippencarzinom)—in diesem Falle steht die Nicotinwirkung zweifellos in Zusammenhang mit der Entstehung von Lippencarzinom.
  - als Folge einer parasitischen Einwirkung von Bakterien, z. B. Tumefacienstumor von Erwin F. Smith und der durch die Bakterien aus menschlichem Carzinom erzeugte Rattentumor von F. Blumenthal.

verfahren als sehr günstig und einfach erweisen, um die saueralkalischen Verhältnisse der Krebszellen zu bestimmen. In dieser Richtung und Methode wäre neues Leben für die Krebsforschung von der Zytologie zu erwarten. Ich möchte darum mit diesem Aufsatz eine neue Methode für die Krebsforschung veröffentlichen.

京都, den 25. August 皇紀 2593.

# 悪性腫瘍ミ動脈硬變 追加 子宮筋腫ミ動脈硬變に就て

助手田中長治

新潟醫科大學病理學效室(川村教授指導)

# Bösartige Tumoren und Arteriosklerose. Zugleich ein Beitrag zur Beziehung von Myoma uteri und Arteriosklerose.

Von

## Choji Tanaka.

Pathologisches Institut der medizinischen Fakultät zu Niigata. Vorstand: Prof. Dr. R. Kawamnra.

Schon seit mehreren Jahren ist es behauptet, dass zwischen den bösartigen Tumoren und der Arteriosklerose irgend eine Beziehung besteht, und wir haben darüber die Mitteilungen von BUSCH, NEUBÜRGER, CASPER und SUZUE. Aber die Studien über diese Beziehung sind noch nicht erschöpfend. Also will ich hier meine Untersuchungsresultate mitteilen.

Mein Material besteht aus 1760 Leichen, die von 1912 bis zu 1932 am hiesigen Institut seziert wurden. Da die Arter osklerose eine senile Krankheit ist, ist es bedeutungslos, jüngere Leichen zuuntersuchen. Also wählte ich Leichen über 40 Jahre aus den gesamten Fällen. Malignöse Tumoren tragende Leichen über 40 Jahre sind insgesamt 189 Fälle. Als Kontrollfälle wählte ich 380 Leichen über 40 Jahre, welche an anderen Krankheiten ausser malignösen Tumoren gestorben waren.

Bei den Fällen, deren Eingeweide nach der Sektion in 10% Formol aufbewahrt worden waren, untersuchte ich genauerweise die Veränderungen der Arterien. Aber an den Fällen, deren Material nicht aufbewahrt worden war, wies ich meine Untersuchungen auf die Sektionsprotokolle hin. Die in den Sektionsprotokollen eingetragenen Arterien waren Aorta, Kranzarterien des Herzens und Basilararterien des Gehirns. Als Beobachtungspunkt wählte ich natürlicherweise ganze Aorta und bezutzte zwei obige Arterien als Hilfsmittel. Es ist äusserst schwierig, sklerotische Gefässveränderungen in irgend einer exakten Weise auszudrücken. Ich versuchte also den Grad der Gefässveränderungen ungefähr in drei Klassen einzuteilen und folgende Zeichnungen zugeben:

- + .... fast glatte Intima und nur wenige Fettflecke.
- ++ ....Verdickungen der Intima, gelbe oder grau-weisse Erhabenheiten und geringfügige Verkalkungen.
- ## · · · der schwerste Grad, atheromatöse Geschwüre und starke Kalkablagerungen.

Auf diese Weise habe ich 189 Fälle von malignösen Tumoren unt rsucht (Tab. I). Dabei handelt es sich um 173 Carcinome, 9 Sarcome, 3 Hypernephrome, 2 Endotheliome, I Melanom und Chorionepithelioma malignum.

TABELLE I.
Fälle mit bösartigen Tumoren.

Alter	Veränderungen der Aorta				
	Zahl	+	++	##	unklar
40-45	33	21=63.6%	11=33.3%	1= 3.1%	
46-50	39	22=56.4%	14=35.9%	2= 5.1%	1=2.6%
51-55	29	16=55.2%	11=37.9%	2= 6.9%	
56-60	33	15=45.5%	13=39.4%	4=12.1%	1=3.0%
61-65	22	1= 4.5%	15=68.2%	6=27.3%	
66-70	17	3=17.6%	6=35.3%	8=47.1%	
71-75	13	1= 7.6%	6=46.2%	6=46.2%	
76-80	1		1=100%		
81-85					
86-90	2			2=100%	
91-95					
	189	79=41.8%	77=40.7%	31=16.4%	2=1.1%

Auf gleiche Weise wurden 380 Fälle von Kontroll untersucht (Tab. II).

TABELLE II. Kontrollfälle.

Alter	Zahl	Veränderungen der Aorta				
		+	++	##		
40-45	103	33=32.0%	56=54.4%	14=13.6%		
46-50	62	19=30.6%	30=48.4%	13=21.09		
51-55	- 68	10=14.7%	36=52.9%	22=32.4%		
56-60	60	4= 6.7%	30=50.0%	26=43.3%		
61 - 65	34	2= 5.9%	18=52.9%	14=41.2%		
66-70	23		11=47.8%	12=52.2%		
71-75	12		2=16.7%	10=83.3%		
76-80	10		3=30.0%	7=70.0%		
81-85	5		1=20.0%	4=80.0%		
86-90	1			1=100%		
91-95	2		1=50.0%	1=50.0%		
	380	68=17.9%	188=49.5%	124=32.6%		

Vergleicht man nun die Ergebnisse bei den Fällen mit bösartigen Tumoren mit den Kontrollfällen, so ergibt sich, dass bei den malignösen Tumoren zur grossen Hälfte eine leichte Arteriosklerose bis in der Gruppe 56–60 Jahre vorliegt und über 66 Jahre erst eine schwere Arteriosklerose über 40% zum Vorschein kommt: dagegen bei den Kontrollfällen ist eine leichte Arteriosklerose schon 30% in der Gruppe 40–45 Jahre und mit Zunahme des Lebensalters nimmt ihre Zahl rasch ab. Eine schwere Arteriosklerose tritt bereits über 40% in der Gruppe 56–60 Jahre auf.

Als ganzes beobachtet, wird die schwere Arteriosklerose bei den Kontrollfällen zweimal so häufig gefunden wie bei den Tumorfällen (32.6% zu 16.4%). Bei der Arteriosklerose des mittleren Grades ist der Unterschied nicht so deutlich. Dagegen ist die leichte Arteriosklerose bei den malignösen Tumoren 2.5 mal so

häufig wie bei den Kontrollfällen.

Das oben gewonnene Ergebnis ist also mit den Mitteilungen von Busch, Neubürger, Casper und Suzue überstimmend.

## Schluss;

- Bei den Fällen mit bösartigen Tumoren, besonders bei Krebsen, tritt die Arteriosklerose später auf als bei den Kontrollfällen.
- 2. Wenn die gleichaltrigen Individuen vergleichen werden, ist der Grad der Arteriosklerose bei den Fällen mit bösartigen Tumoren niedriger als bei den Kontrollfällen.
- 3. Bei den Fällen mit bösartigen Tumoren ist das Auftreten einer schweren Arteriosklerose relativ selten.

Wie dieses auffallendes Verhalten zuerklären ist, dass bei den Tumorträgern die Arteriosklerose selten vorkommt, haben Busch und Suzue Konstitution oder Disposition vorgeschlagen. Casper war der Ansicht, dass hier die Störung des Cholesterinstoffwechsels von Bedeutung ist. Es ist allgemein angenommen, dass die Hypercholesterinämie ein wichtiger Faktor für Entstehen der Arteriosklerose ist. Ferner durch zahlreiche Beobachtungen und Experimente ist es beinahe zweifellos, dass zwischen malignösen Tumoren und dem Cholesterinstoffwechsel eine gewisse innige Beziehung besteht. Als Massstab des Blutcholesterins wird das Rindenfett der Nebenniere von vielen Autoren angenommen.

Aus diesem Gedanke untersuchte ich den Fettgehalt der Nebennierenrinden des obigen Materials, um den Cholesterinspiegel des Blutes zuvermuten. In den Tabellen III und IV waren die Ergebnisse zusammengestellt. Hierbei sind die Zeichnungen des Fettgehaltes folgende:

- + ..... Rindenfett gering oder Rinde grau-weisslich.
- ++ .....Rindenfett mittelmässig oder Rinde fleckig gelb.
- # Rindenfett reichlich.

X

TABELLE III. Fälle mit bösartigen Tumoren.

4.14	Zahl	Fettgehalt der Nebennierenrinde				
Alter		+	++	##	unklar	
40-45	33	13=39.4%	11=33.3%	6=18.2%	3= 9.1%	
46-50	39	14=35.9%	17=43.6%	5=12.8%	3= 7.7%	
51-55	29	13=44.8%	8=27.6%	6=20.7%	2= 6.9%	
56-60	33	11=33.3%	11=33.3%	5=15.2%	6=18.2%	
61-65	22	4=18.2%	9=40.9%	7=31.8%	2= 9.1%	
66-70	17	7=41.2%	4=23.5%	4=23.5%	2=11.8%	
71-75	13	3=23.1%	8=61.5%	2=15.4%		
76-80	1	1=100%				
81-85				-		
86-90	2			1=50.0%	1=50.0%	
91-95						
	189	66=34.9%	68=36.0%	36=19.0%	19=10.1%	

TABELLE IV. Kontrollfälle.

Alter	Zahl	Fettgehalt der Nebennierenrinde				
		+	++	+++	unklar	
40-45	103	46=44.7%	33=32.0%	17=16.5%	7= 6.8%	
46-50	62	23=37.1%	20=32.3%	16=28.8%	3= 4.8%	
51-55	68	21=30.9%	30=44.1%	14=20.6%	3= 4.4%	
56-60	60	12=20.0%	20=33.3%	23=38.4%	5= 8.3%	
61-65	34	11=32.4%	8=23.5%	11=32.4%	4=11.7%	
66-70	23	4=17.4%	9=39.1%	8=34.8%	2= 8.7%	
71-75	12	4=33.3%	4=33.3%	3=25.0%	1= 8.4%	
76-80	10	4=40.0%	2=20.0%	1=10.0%	3=30.0%	
81-85	5	2=40.0%	1=20.0%	1=20.0%	1=20.0%	
86-90	1	1=100%				
91-95	2		2=100%			
	380	128=33.7%	129=33.9%	94=24.7%	29= 7.7%	

Vergleicht man die Ergebnisse bei den Fällen mit bösartigen Tumoren und bei den Kontrollfällen, so ergibt sich, dass in Fettgehalten des leichten und mittleren Grades kein deutlicher Unterschied vorhanden ist; dagegen bei den Kontrollfällen reichliches Rindenfett ungefähr 6% mehr als bei den malignösen Tumoren. Obwohl dieser Unterschied nicht so gross ist, kann man doch sagen, dass bei den malignösen Tumoren die in der Nebennierenrinde reichliches Fett enthaltenden Fällen selten sind als bei den Kontrollfällen; mit anderen Worten ist der Cholesteringehalt des Blutes bei malignösen Tumoren geringer als bei den Kontrollfällen. Und nach meiner Meinung ist dieses Ergebnis mit der oben erwähnten Tatsache überstimmend, dass bei malignösen Tumoren eine schwere Arteriosklerose selten ist.

## Ein Beitrag zur Beziehung von Myoma uteri und Arteriosklerose.

Im Jahre 1925 hat Pape mitgeteilt, dass bei den Uterusmyomen manchmal eine hochgradige Arteriosklerose auftritt. Um diese Mitteilung nachzuprüfen, wählte ich 23 Fälle über 40 Jahre mit Uterusmyomen. 10 Fälle davon haben gleichzeitig bösartige Tumoren, andere 13 Fälle Uterusmyome allein. Durch oben erwähnte Methoden untersuchte ich den Grad der Arteriosklerose von diesem Material und verglich die Ergebnisse mit den der Kontrollfälle, welche in Tabelle II aufgestellt worden sind. Gewonnene Schlüsse sind folgendmassen:

- 1. Bei den Fällen mit Uterusmyomen tritt eine schwere Arteriosklerose mehr auf, als bei den Kontrollfällen.
- 2. Bei den Fällen, welche malignöse Tumoren und Uterusmyome gleichzeitig haben, ist die schwere Arteriosklerose geringer als bei den Kontrollfällen, aber im Vergleich mit den malignösen Tumoren ist, wie aus der Tabelle I ersichtlich, die schwere Arteriosklerose zugenommen.
  - 3. Also ist die Arteriosklerose bei den nur Uterusmyome

tragenden Fällen unter allen Tumor- und den Kontrollfällen am stärksten. (Autoreferat.)

#### 內容目次

#### 第一編

- 1, 緒言
- 2. 研究材料, 其方法及び結果
- 3. 考 按
- 4. 結論

第二編

- 1. 绪言
- 2, 研究材料, 其方法及び結果
- 3. 綜括及び考接
- 4. 結論

迫 加

文 戲

## 第一編

## 1. 緒言

悪性腫瘍ミ動脈硬變ミの間に若干の關係ありミ言ふここは、既に二三の先進學者に依つて唱へられたる所なり、即ち NEUBÜRGER<sup>(29)</sup>氏は騰動脈の硬變を有せるものに於て癌腫を見るここ著しく稀なりミ述べたり。又 Busch (4) 氏は動脈の變化を單なる內膜の脂肪沈著、輕度の硬變及び高度の硬變の三つに分ち、癌腫の屍體ミ總解剖例ミを比較するここによつて癌腫の剖檢例に於ては內膜の脂肪沈著及び輕度の硬變が多く,反對に强度の硬變が少きここを見たりミ報告せり。吾國 に於 ては、大正 14 年の日本病理學會總會に於て鈴江<sup>346</sup>氏が京都帝大醫學部の 2584 例の剖檢記錄を用ひての 研究 の結果を發表せり、同氏の結論に依れば「癌腫性體質は非癌腫性體質よりも動脈硬變を伴ふここ少し」ご言ふ、最近に於ては Casper<sup>(10)</sup>氏が 160 體の悪性腫瘍ミ 300 體の對照に就て統計的研究を行へる結果、悪性腫瘍例に於ては對照例よりも動脈硬變の度の低きここを結論せり。

以上の如く,諸家の意見を綜合するに,悪性腫瘍に於ては悪性腫瘍に非ざるものに比して動脈硬變を伴ふこミ少しこいふに一致す。余は最近新潟醫科大學病理學教室に於て,この悪性腫瘍ミ動脈硬變ミの關係に就きて研究する機會を得たるを以てここにその結果を述べんミ欲す。

## 2. 研究材料, 其方法及び結果

本研究の材料は明治 45 年より昭和 7 年に至る間, 新潟醫科大學病理學教室に於て剖檢に附せられたる 1760 體の 剖檢例なり、動脈硬變 は一つの老人性疾患にして年齢の若き屍體を檢查するここは意味少きため, 余は 40 歳以上の屍體をえらべり。この內記錄の不完全なるもの, 或は年齢の不明なるものを除きて惡性腫瘍例體, 對照こして惡性腫瘍以外の疾患で死亡せるもの 380 體をこれり、動脈の變化は精細を期するため, 余は次に述べるが如き標準をつくり, 材料のフェルマリン固定標本こして保存 せられてあるものにつきては全部親しく檢索せるも, 一部は既に材料が失はれたるため已むなく剖檢記錄の記載せる所に從ひたり、剖檢記錄中常に記載せられてあるものの大動脈,心職電狀動脈及び腦底動脈のみなるを以て, 余は動脈硬變の程度を檢查するために大動脈を主こし他の二つは參考こせり.

動脈硬變の比較研究にあたり、その程度を極めて精確に言ひ現すここは勿論非常に困難なるここなり。Busch® 及び Casper(10) 兩氏 は 動脈硬變の程度を三つに分ち、鈴江(24)氏は動脈の全く健康なるものより高度の硬變に至るものまでを五種に分類せり。又當教室に於ける伊藤(20)氏は「日本人の動脈硬變症の研究(第一報告)」なる論文に於て大動脈内膜の變化を内眼的に次の七つに分けられたり。即ちの度は殆んご全く平滑なる内膜、一度は唯だ少數の脂肪斑、2度は多數の脂肪斑を有するも限局性の肥厚を有せざるもの、3度は少數の限局性肥厚を有するも石灰沈著を有せざるもの、5度は多數の限局性肥厚を争するも石灰沈著を有せざるもの。5度は多數の限局性肥厚に少數の石灰沈著を有せるもの及び6度は高度のアテローム變化(石灰沈著、潰瘍形成等)なり。余は率ろ Busch® 及び Casper(10)兩氏の述べる如き三つの程度に分ち、多數の動脈を檢查せる後、この分類法に從つて差し支へなきここを確信せり。動脈に見る徽毒性變化は勿論こゝに述べる硬變より除外せり。

余の分類生は CASPER (10) 氏のこれるもの 三略、同様にして(+)を以て動脈の内膜が全く平滑なるか、軽度の散在性、少数の脂肪斑を有せるものを示す。即ち生理的範圍にあるか、或は軽度の動脈硬變を示すものにして、伊藤

氏のいふの度及び1度が之に屬す。(冊)を以て内膜の肥厚。 黄色乃至は灰白色の隆起及び軽度の石灰沈著を有するものを示す。即ちアテロマトーゼ及び中等度の動脈硬變にして,伊滕氏のいふ2度より5度までが之に屬す。(冊)は强度の硬變にして高度の石灰沈著及び潰瘍を有し,伊滕氏のいふ6度ミー致す。

上に選び出せる 189 體の悪性種瘍例に就て年齢を 5 歳毎に區切り、各年齢群の動脈硬變の度 をあらはす時は次の 第1表を得。この悪性腫瘍中には癌腫 173、肉腫 9, ヒベルチフローム 3, 内被細胞腫 2, 黑色腫及び悪性脈絡膜上皮腫各々 1 例を含む。

同様にして380體の對照例につきて第2表を得

第 1 表 惡性腫瘍例

年 齡	數	齢			の變化	變 化	
		+	++	##	不 明		
40 - 45	- 33	21=63.6%	11= 33.3%	1= 3.1%			
46 - 50	39	22=56.4%	14= 35.9%	2= 5.1%	1=2.6%		
51 - 55	29	16=55.2%	11= 37.9%	2= 6.9%			
56 - 60	33	15=45.5%	13= 39.4%	4= 12.1%	1=3.0%		
61 - 65	22	1= 4.5%	15= 68.2%	6= 27.3%			
66-70	17	3=17.6%	6= 35.3%	8= 47.1%			
71-75	13	1= 7.6%	6= 46.2%	6= 46.2%			
76-80	1		1=100.0%				
81-85							
86-90	2			2=100.0%			
91-95		,					
合 計	189	79=41.8%	77= 40.7%	31= 16.4%	2=1.1%		

第 2 表 對照例

年齡	数	大動脈の變化		
	21	+	++	##
40-45	103	33=32.0%	56=54.4%	14= 13.6%
46-50	62	19=30.6%	30=48.4%	13= 21.0%
51-55	68	10=14.7%	36=52.9%	22= 32.4%
56-60	60	4= 6.7%	30=50.0%	26= 43.3%

6165	34	2= 5.9%	18=52.9%	14= 41.2%
6670	23		11=47.8%	12= 52.2%
71-75	12	*	2=16.7%	10= 83.3%
76-80	10		3=30.0%	7= 70.0%
81-85	5		1=20.0%	4= 80.0%
86-90	1			1=100.0%
91-95	2		1=50.0%	1= 50.0%
合計	380	68=17.9%	188=49.5%	124= 32.6%

## 3. 考接

以上の2表につきて考按するに、悪性腫瘍例に於ては軽度の動脈硬變が60 歳までは全體の略、半数を占め、66 歳以上になりて强度の動脈硬變が40% こなる・對照例に於ては既に40歳から輕度の動脈硬變が30%にして年齢の進むに從ひ急劇にその數を減少するも反對に强度の動脈硬變は56歳から既に40%をこせり、年齢のすゝむに從ひ强度の硬變の増加するここ兩者に於て變りなきも悪性腫瘍にありてはその増加するここおそし、

次に全體ミして强度の動脈硬變を比較するに、悪性腫瘍例にありては對照例の約半数にすぎず(16.4%:32.6%)。 中等度の動脈硬變にてはその差著しからざるも、軽度の動脈硬變は悪性腫瘍例にては對照例の約2.5 倍の多きに上る(41.8%:17.9%)。 尚ほこの 關係は個々の年齢群につきても言ふを得べし。 例へば66—70歳にありては悪性腫瘍例に於て軽度の硬變が尚ほ17.6%を占むるに對し對照例にはそれがなく、反對に强度の硬變は悪性腫瘍例に於て47.1%なるに對し對照例にては52.2%なり、76歳以上の悪性腫瘍につきては剖檢數少きため精確なるここは云ふ能はず。

尚ほ Casper<sup>(10)</sup> 氏は大動脈に沿へる淋巴腺へ腫瘍の轉移を來し大動脈を りかこむ時はその部分にのみ强度の動脈硬變を生ずるここに注意せり。余も 亦悪性腫瘍の検索中,斯くの如き二つの例を見出したり。即ち 2 例こも肺臓 癌にして腫瘍塊は大動脈壁 三 固く癒著し、大動脈の他の部分は比較的平滑な るに拘らず癒著せる部分にありては限局性に高度の硬變を示せるものなり。

## 4. 結論

余は以上の如く統計的に悪性腫瘍, 就中癌腫ごその他の疾患にて死亡せる

ものこを比較するここに依りて次の結論を得たり。

- (1) 悪性腫瘍, 殊に癌腫にありては對照例より動脈硬變はおそく發現す。
- (2)同年齢のものを比較するに悪性腫瘍に於ては對照例におけるよりも動脈硬變の度低し。
  - (3) 悪性腫瘍には强度の動脈硬變の發現比較的稀なり。

以上の結果は Busch (a), Casper (10) 及び鈴江(34諸氏の研究の結果を全く一致するものなり。

## 第二編

## 1. 緒言

以上の如き悪性腫瘍ミ動脈硬變ミの關係を説明するため Busch ® 氏は體質を暴けたり。即ち Busch ® 氏によれば癌腫が動脈壁に影響を及ぼすには非すして體質的或は素質的要素が關係すこいふ。 鈴江 ® 1 氏は何等説明を與へざるも癌腫性體質は非癌性體質のものよりも動脈硬變症を伴ふここ少きものなりミ結論して同樣に體質を考へたり。 Casper ® 氏は之に對し動脈硬變ミ悪性腫瘍ミの關係を説明するため兩者に關係ありこ思はるゝコレステリン新陳代謝をあけたり。

動脈硬變の發生に對してヒベルコレステリチミーが重要なる要素をなすここにつきては今日異論なき所なり、即ち家兎,その他の實驗動物にコレステリンを攝食せしむる時は人間に見るが如き動脈硬變を生ず。この際同時に血管に機械的障碍を與ふる時は容易に動脈硬變を生ずるも、ヒベルコレステリチミーを生ずる程多量のコレステリンを攝取せしむる時は單にそれのみにて動脈硬變を生ぜしむるここ可能なり。多くの學者は何れも動脈硬變の發生に關し、血管の機械的乃至毒素的作用よりも寧ろヒベルコレステリチミーに重きをおけり(ANITSCHKOW (1)-(5),CHALATOW (1),MOISSEJEFF (27),WACKER U.HUECK (37),CLARKSON a. NEWBURGH (12) 等)。尚 MJASSNIKOW (28) 氏は臨床的に大動脈及び冠狀動脈の硬化症には規則的にヒベルコレステリチミーの證明を得らるゝここをあげたり。又同氏は動脈硬變の發生に對し、動脈壁の

機械的或は毒素的障碍ミヒベルコレステリチミーの二つの假定をあけ、殊に後者を重要なる要素ミせり。 PRIBRAM 及び KLEIN<sup>(31)</sup> 氏等は同様に臨床的に良性及悪性硬化症性高血壓何れにおいてもヒベルコレステリチミーを見るも、唯高度の悪液質及び心臓の機能障碍には之を缺くミ述べたり。當教室における井田<sup>(18)</sup>氏の研究によれば動脈硬變には副腎皮膚のコレステリン含有量増加する。

以上文獻の記載せる所を見るに、動脈硬變ミヒベルコレステリチモーの關係につきてはもはや疑ふ所なきものゝ如し。

次に悪性腫瘍ミコレステリン新陳代謝の關係につきては最近數多くの研究 がなされたり。GUTHMANN(16) 氏は多くの子宮癌の患者を檢し血液内コレス テリン含有量は普通以下に減少し、病變の進行するにつれ減少の度増加する も、手術後再發なきものにありては普通になるのみならず、時には通常價以 上の含有量を示すここを見たり、同氏は尙腟、卵巢及び乳癌につきて研究せ るに同樣の結果を得たり. DANNENBERG(18) 氏の動物實驗の結果によれば, 肉腫を有する10匹の鼠の内、4匹は血液コレステリン含有量の著しき差な く、4匹は明かに増加し、殘りの2匹は明かに減少せり。 MATTICK 及び BUCHWALD(26) 氏等によれば癌患者の血漿にはヒペルコレステリチミーを譜 明すごいふ。BURGHEIN® 氏は悪性腫瘍及びその 周圍 にはコレステリン含 有量多きここを見たり、JACOB 及び本島(21) 兩氏 の 研究によればレントゲン 線照射により一般狀態可良なる時は血液コレステリン増加するも、悪液質な る時は反對に減少す。動物に實質的に生ぜしめたる癌腫につきても多くの研 究あり。その内二三を擧ぐるに、BERNSTEIN 及び ELIAS の氏等は二十日鼠 の癌の發育はリポイドを含むここ少き食物により著しく障碍さるゝも、コレ ステリン或はレチ、ンの添加により發育障碍は減少さるゝこごを見、殊にコ レステリンは强く癌の發育を促すミ述べたり。 RONDONI(32) 氏は腫瘍の増殖 はリポイドの種類により相違あるも、何れもその注射により色々の影響あり こいふ。JAFFÉ(23)氏によればテール癌を生ぜしむる際テールにリポイドを混 合する時は癌の發生するここ少く、又おそきもリポイドを攝食せしむる時は

多く,且早く生するこいふ。井田<sup>(18)</sup>氏の研究によれば腫瘍の際,副腎皮質のコレステリン含有量は腫瘍の形態(主に潰瘍の有無),經過,合併症の有無により一定せずこいふ。又同<sup>(19)</sup>氏の最近の發表によれば、家兎肉腫を有する家兎の血液コレステリン含有量は普通以上の價を示す。肉腫を家兎に移植せる直後はコレステリン含有量著しく高く,一定の時日後には降下するも尚ほ普通以上の含有量なりこ。

以上を要約するに、悪性腫瘍患者又は動物にありてはコレステリン新陳代 謝の障碍ありご考ふるここを得。

副腎皮質のコレステリン含有量は ASCHOFF<sup>(47)</sup> 氏によれば血液コレステリン含有量を代表すこ. 井田<sup>(18)</sup>氏も亦その論文中において「諸種疾患に際し,副腎類脂肪量の消長は大概生前における血液類脂肪量の消長ご平行す」ご述べられたり.

以上,悪性腫瘍及び動脈硬變は共にコレステリン新陳代謝に關係あり,且 血液コレステリン含有量は副腎皮質の脂肪含有量ご平行するここより,余は 第一編にのべたる材料につきて副腎皮質の脂肪含有をはかり,以て生前の血 液コレステリン含有量を知らんごせり。

## 2. 研究材料, 其方法及び結果

研究の材料は第一編にのべたる189例の惡性腫瘍及び380例の照對にしてこの各々の副腎の横斷面につきて肉眼的に皮質脂肪含有量を檢査せり。材料の失はれたるものは剖檢記錄の記載せる所に從へるも、明確なる記錄なきものは表中に不明こして扱へり。尚ほ腫瘍の轉移により皮質の大部分破壞せられたるものも同樣に不明こせり。皮質脂肪含有量の分類の標準次の如し。

- (+) 皮質に脂肪を殆んご含有せざるか,少量を含むもの.
- (井) 中等量を含むもの、又は斑狀に黄色を呈せるもの。
- (冊) 豐富に含有するもの。

悪性腫瘍及び對照例を各々5歳毎の年齢群に分ち副腎皮質の脂肪含有量を あらはす時は第3,第4の表を得。

第 3 表 惡性腫瘍例

年 齢		副腎皮質の脂肪含有量			
	數	31/41	++	##	不 明
40-45	33	13= 39.4%	11=33.3%	6=18.2%	3= 9.1%
46-50	39	14= 35.9%	17=43.6%	5=12.8%	3= 7.7%
51-55	29	13= 44.8%	8=27.6%	6=20.7%	2= 6.9%
56-60	33	11= 33.3%	11=33.3%	5=15.2%	6=18.2%
61-65	. 22	4= 18.2%	9=40.9%	7=31.8%	2= 9.1%
66-70	17	7= 41.2%	4=23.5%	4=23.5%	2=11.8%
7175	13	3= 23.1%	8=61.5%	2=15.4%	
76-80	1	1=100.0%		4 _	
81-85					
86-90	2			1=50.0%	1=50.0%
9195					
合 計	189	66= 34.9%	68=36.0%	36=19.0%	19=10.1%

第 4 表 對照例

年 齢	副腎皮質の₀脂肪含有量齢數				
	製人	+	++	##	不 明
40-45	103	46= 44.7%	33= 32.0%	17=16.5%	7= 6.8%
46-50	62	23= 37.1%	20= 32.3%	16=28.8%	3= 4.8%
51-55	68	21= 30.9%	30= 44.1%	14=20.6%	3= 4.4%
56-60	60	12= 20.0%	20= 33.3%	23=38.4%	5= 8.3%
61-65	34	11= 32 4%	8= 23.5%	11=32.4%	4=11.7%
66-70	23	4= 17.4%	9= 39.1%	8=34.8%	2= 8.7%
7175	12	4= 33.3%	4= 33.3%	3=25.0%	1= 8.4%
76-80	10	4= 40.0%	2= 20.0%	1=10.0%	3=30.0%
81-85	5	2= 40.0%	1= 20.0%	1=20.0%	1=20.0%
86-90	1	1=100.0%			
91-95	2		2=100.0%		
合計	380	128= 33.7%	129= 33.9%	94=24.7%	29= 7.7%

## 3. 綜括及び考按

第3及び第4の表を比較するに、脂肪含有量の少量のもの及び中等量のものにありては除り著しき差を見ざるも、豐富に含有するものにありては、對照例は悪性腫瘍例より約6%多し、この差は除り多からざるも、悪性腫瘍に

ありては副腎皮質内に脂肪を豐富に含有するもの對照例より少きここは事實なり、換言すれば悪性腫瘍の際には對照例よりも血液中のコレステリン含有量の高度なるもの少し、而してこの事實は第一編にのべたる悪性腫瘍には動脈硬變を伴ふここ少しこいふ事實に相當す。

## 4. 結論

以上の事實に基き、余は悪性腫瘍の場合動脈硬變症の軽度なるは少くこもコレステリン新陳代謝の障碍に一定の意義をおくべきものならんご信ず。

## 追加、子宮筋腫ミ動脈硬變

PAPE<sup>(30)</sup> 氏は子宮筋腫の際には動脈硬變を伴ふここ多しこ述べたり。余は上述の研究中,之を確めんこして 40 歳以上の 子宮筋腫を有せる例,23 例を集めたり。この内 10 例は筋腫こ同時に悪性腫瘍を伴へるものにして 13 例は筋腫のみを有するものなり。余は以上の例につきて第一編に述べたるこ同様の研究方法により動脈硬變の度を檢査せり。筋腫の例はその數少きため個々の年齢群に分けて表にあらはすここは止め,全體につきてのみその結果をあぐるここゝせり。

- (1)子宮筋腫を有するもの23例
  - (+) = 7 = 30.4% (+) = 5 = 21.8% (+) = 1 = 47.8%
- (2) 悪性腫瘍ミ子宮筋腫を同時に有するもの 10 例
  - (+) = 4 = 40.0% (+) = 3 = 30.0% (+) = 3 = 30.0%
- (3)子宮筋腫のみを有するもの13例
  - (+) = 3 = 23.1% (+) = 2 = 15.4% (+) = 8 = 61.5%
- (1)の子宮筋腫を有するものご第2表にあけたる對照例ごを比較するに高度の硬變は前者に多し. (2)の悪性腫瘍ご合併せるものは對照例より高度の硬變少く,輕度の硬變多し. されご第1表の悪性腫瘍例に比較する時は尚ほ高度のもの多く,輕度のもの少し. 且子宮筋腫のみのものに比して高度の硬變著しく少し. (3)の子宮筋腫のみのものは他の何れの群よりも高度の硬變多し.

結論 子宮筋腫の際には對照例に比して高度の硬變多し. 悪性腫瘍ミ合併

する時はその程度を減ずるも尚ほ悪性腫瘍のみの場合よりも<u></u>造かに高度の硬 變多く發現す。

## 太 獻

1) ANITSCHKOW N., Über die Veränderung der Kaninchenaorta bei experimenteller Cholesterinsteatose. Ziegler's Beitr. 56(1913). 2) Anitschkow N., Über Atherosklerose der Aorta bei Kaninchen und über deren Entstehungsbedingung. Ziegler's Beitr. 59(1914). 3) ANITSCHKOW N., Die Bedeutung des erhöhten Cholesteringehaltes für die Entstehung der Aortenatherosklerose. Deutsch. med. Wsch. N. 24(1914). 4) Anitschkow N., Zur Ätiologie der Atherosklerose. Virch. Arch. 249 (1924). 5) Anitschkow N., Einige Ergebnisse der experimentellen Atheroskleroseforschung. Zent. bl. f. Path. 36(1925). 6) BEITZKE H., Zur Entstehung der Atherosklerose. Zent. bl. f. Path. 46(1929). 7) BERNSTEIN S. und H. Elias, Lipoide und Carcinom wachstum. Z. f. Krebsforsch. 26 (1927). 8) BURGHEIM F., Über Beziehungen zwischen Krebs und Lipoidstoffwechsel. Klin. Wsch. 1931. Nr. 9. 9) Busch M., Das Verhalten der Aorta bei Krebsträgern: Ein Beitrag zur Frage: Arteriosklerose und Konstitution. Zent. bl. f. Path. 34(1923-4). 10) Casper J., Bösartige Geschwülste und Arteriosklerose. Z. f. Krebsforsch. 36(1932). 11) CHALATOW S. und N. ANITSCHKOW, Über experimentelle Cholesterinsteatose und ihre Bedeutung für die Entstehung einiger pathologischer Prozesse. Zent. bl. f. Path. 24(1913). 12) CLARKSON S. and L. H. NEWBURGH, The Relation between atherosclerosis and ingested Cholesterol in the the rabbit. Jour. of exp. Med. 43(1926). 13) DANNENBERG FR., Über den Cholesteringehalt des Blutes gesunder und Jensensche Sarcome tragender Ratten. Biol. Z. 344. H. 1/3 (1923). 14) EBNER E. F. MANDL und G. Pich, Über das Verhalten des Blutserums Krebskranker nach operativen Eingriffen. Wien. klin. Wsch. 1932. Nr. 1. 15) GLASER F., Vegetatives Nervensystem, Hypercholesterinämie und Atherosklerose in ihren Beziehungen zueinander. Klin. Wsch. 6(1927). Nr. 50. 16) GUTHMANN H., Beiträge zum Carcinomproblem. IV. Das Verhalten des Cholesterinspiegels. Arch. Gynäk. 140 17) HENKE F. und O. LUBARSCH, Handbuch der spez. path. Anatomie und Histologie VIII. (Drüsen mit inneren Sekretionen). 18) 井田瑞春, 人副腎類 脂肪含有量に關する形態學的並に化學的研究. 北越醫學會雜誌. 第 46 年. 第 11 號. 19) 井田瑞春、肉腫家兎血液のコレステリン含有量に就て. 北越醫學會雜誌. 第48 20) 伊藤辰治, 日本人の動脈硬變症の研究(第1報). 日本病理學會 會誌. 第 20 年. 21) JACOB E. und R. MOTOJIMA, Über die Veränderung des

Cholesterinstoffwechsels durch Röntgenstrahlen bei Krebskranken. Z. f. Krebsforsch. 26(1927). 22) JACOB E., Lipoidstoffwechsel und Krebs. Z. f. Krebsforsch. 32(1930). 23) JAFFÉ und Eliassow, Versuche zur Beeinflussung der Entstehung und des Wachstums des Teerkarziuoms. Verh. dtsch. path. Ges. 1927. 24) KUACK A. V., Über Cholesterinsklerose. Virch. Arch. 220(1915). MATTICK W. L. and REINHARD, Further studies of the effect of radiation on blood cholesterol in malignant disease. Jour. of canc. res. 14(1930). 26) MATTICK W. L. and K. BUCHWALD, Blood cholesterol studies in cancer, II. with investigation as to possible diagnostic relations. Jour. of canc. res. 12(1928). 27) Moissejeff A. J., Altes und Neues in der Lehre von der Arteriosklerose. Zent. bl. f. Path. 35(1924-5). 28) Myassnikow A. L., Klinische Beobachtungen über Cholesterinämie bei Arteriosklerose Z. f. klin. Med. 102. 29) NEUBÜRGER, Beiträge zur Histologie, Pathogenese und Einteilung der arteriosklerotischen Hirnerkrankungen. Jena. 1930. 30) Pape R., Über allgemeinkonstitutionelle Verhältnisse bei Myoma uteri Z. f. Konstitutionslehre. 11(1925). 31) PRIBRAM H. und O. KLEIN, Über den Cholesteringehalt des Blutserums bei arteriosklerotischem Hochdruck. Med. Klin. 17(1924). RONDONI P., Die Einwirkungen verschiedener Lipoide auf das Wachstum des Mänsekrebses Z. f. Krebiforsch. 32, H. 4(1930). 33) 角田,梅原, 食餌性アテ ロスクレローゼの比較研究. 日本病理學會會誌. 5卷. 34) 鈴江懷, 癌腫と動脈 硬化症との關係. 日本病理學會會誌. 15 卷. 35) THÖLLDTE M., Hypercholesterinamie, Blutdruck und Gefäßveränderung im Tierversuch. Zent. bl. f. Path. 77 (1927). 36) Versé M., Zur Frage der experimentellen Atherosklerose. Zent. bl. f. Path. 34(1923-4). 37) WACKER und HUECK, Über experimentellere Arteriosklerose und Cholesterinämid Münch. med. Wsch. 38(1913).

# 慢性甲狀腺炎より發生せし甲狀腺肉腫の一例

(圖版 XV)

## 小 峯 善 茂

東京帝國大學醫學部病理學教室

# Ein auf dem Boden einer chronischen Thyreoiditis entstandenes Schilddrusensarkom.

Von

#### Y. Komine.

Aus dem Pathologischen Institute der Kaiserlichen Universität zu Tokio. Vorstand: Prof. M. Nagayo.

Mit Tafel

Es handelt sich um eine 55 jährige Frau. Seit Mai 1931 bemerkte sie auf der lincken Seite des Halses einen derben Knoten, der sich schnell vergrösserte, dabei besonders nach rechts. Gegen April 1932 wurde Anschwellung mehr des rechten Lappens der Schilddrüse als des linken beobachtet. Im Verlauf des Leidens hatte sie zuweilen Herzklopfen. Im Juli 1932 trat Atemnot auf. Auch sonstige Beschwerden nahmen zu. In letzter Zeit wurde dieser Tumor faustgross. Klinisch wurde Verdacht auf die RIEDEL'sche Struma gestellt. Im Juli 1932 wurde sie chirurgisch operiert. Damals war der Tumor nur als diffuse Vergrösserung der Schilddrüse diagnostiziert. Dabei wurden keine sonstigen Veränderungen nachgewiesen. Es wurden deswegen kleine hühnereigrosse Masse vom rechten Lappen der Schilddrüse und ein dünnes Stück vom linken entfernet. 1 Monat später, im August 1932, erfolgte eine zweite Operation, da an der alten Operationsstelle eine starke Anschwellung zustandekam und wieder Atemnot, Herzklopfen in Erscheinung traten. Deswegen wurde die Kranke wiedermalig in

die Klinik aufgenommen. Bei der Untersuchung zeigte der Tumor nekrotischen Zerfall und erhebliche Verwachsung mit der Haut, den umgebenden Geweben und Organen. Da eine radikale Operation unmöglich war, wurde die Tumormasse möglichst ausgeschabt. Zwei Tage nach der Operation trat Herzklopfen auf, woran die Kranke zugrunde ging.

Das erste exstrpirte Stück zeigt histologisch das Bild von chronischer Thyreoiditis. An zweiten Probestück wurde kein normales Schilddrüsengewebe nachgewiesen. Statt dessen fand man ein polymorphkerniges Sarkom, das aus spindeligen, runden, ovalen und dreieckigen Zellen bestand. Ausserdem waren vereinzelte mononukläre und polymorphkernige Riesenzellen vorhanden.

Die Schilddrüse, die bei der Sektion entnommen wurde, bestand aus zwei Teilen, nach polymorphzelligem Sarkom und chronisch thyreoiditisch verändertem Gewebe.

## Schlüsse.

- Dieses polymorphzellige Sarkom entwickelte sich wahrschein lich auf Boden der chronischen Thyreoiditis.
  - 2) Diese Thyreoiditis ist vielleicht von syphylitischer Natur.

(Autoreferat.)

#### 緒 論

肉腫も癌腫に於けると同様に、慢性の反復せる刺戟によりて發生する者なりと雖, 肉腫の慢性炎症より發生せも例は、癌腫の夫に比すれば甚だ少と。且正常甲狀腺又は 既に發生したる甲狀腺腫に、慢性炎症を發生せる事は相當に稀れにじて、更に夫より 肉腫を發生したる例は本邦はもとより泰西に於ても甚だ稀有なり。

余は1932年7月下旬東大鹽田外科學教室に於て,1年前より腫大し初めたる甲狀腺腫にて,手術鏡見の結果,慢性炎症の像を示めしたる者が,次いで同年9月上旬再手術を行ひ,鏡見せるに既に腫瘍化し居り,患者は1週間後に心臓性喘息様の症狀の下に死亡したる1例を剖檢するの機に遭遇し,その甲狀腺を精査せしに,一部分に於て,尚ほ慢性炎症の残れる所あるも大

部分は腫瘍化したる者にして、慢性甲狀腺炎より甲狀腺肉腫の發生せし事を 確め得たるを以て此處に報告せんごする者なり.

病歷及臨床的所見

並河某。女。55歲。東京居住。

臨床的診斷 慢性甲狀腺炎.

病 歷.

家族歴。患者の父は70歳の時胃癌にて死す。3人の子あり、一番上の子は流産す。 その他特記すべき事なら、

概往歴. 明治30年頃雨にぬれ,方々の關節が痛み, 磬師より急性ロイマチスムスと 云はる。花柳病は否定すれども、 旦氏反應は強陽性なり。酒, 煙草は嗜まず。

現疾患初期の狀態並に經過。1931年5月に始めて頸部に腫瘍の存するに氣付き、6 月非常に烈しき心悸亢進あり。腫瘍は次第に增大したるも、腫瘍自身には疼痛なく、 頸部を動かす時に疼痛あり、最近右側の殊に大となりも鶯頭を廻し又は下を向く時に 息苦しくなり、約1ヶ月前より軽度の嗄聲あり。同年7月心悸亢進又起り、1週間位 にして止む。同月中旬鹽田外科を訪び、リーデル氏甲狀腺腫の疑の下に同科に入院す。

現在症狀。頸部には手拳大の膨隆存するも, その部の皮膚は外見上異常なく, 壓痛なく, 又パセドウ氏病を思はらむる種々の症狀なく, 其の他特別の異常なら.

第1 囘手術時所見。1932 年 7 月 23 日

甲狀腺は、右葉の方、左葉より稍、大なるも、全體に亙り平等に腫大し、大さ手拳大、紅褐色表面は平滑、硬度は一樣に彈力性硬固を呈し、皮膚とは癒著なく、後部組織とは緩く癒著するも、全摘出をなす事も可能なりと思ばれる程なり。此時は甲狀腺のみ單獨に腫大も、他の部分には何等の異常なも、術後もばらくもて快方に向ひ、8月3日に至りて引續き同科を訪ふた約して退院せり。8月24日に至りて、再び苦懐增進し、9月5日に非常に息苦もくなり再び入院す。

局所は手拳大に腫脹し, 前手術創の癥痕の附近に於て, 皮膚は腫瘍と癒著し, 褐黄 色を呈せり。

第2囘手術時所見, 1923年9月10日,

甲狀腺所在部は出血し、赤褐色を呈し、硬度は軟且脆弱なり。周圍の組織器官とは 密に癒著し、且周圍の筋肉中にも浸潤し行き、明瞭なる境なし。出來うる限り搔爬し 其後にドレーンを入れ置く。

此手術の始めと終に喘息標發作あり, 術後も時々發作を起し, 同月 12 日繃帶交換の際に發作をなこし、その儘恢復せずして死亡せり。

手術材料顯微鏡的所見。

第1囘手術材料所見。

取出されたる者は右葉鳩卵大よりも称、大、左葉は小指頭大の扁平なる塊片にして、 右葉の部分は敷ケ所より、左葉の部分はその約3分の1を取りて檢索せり。組織學的 所見は慢性炎症の像を示める。何れも大同小異なれば此に概括して述ぶべし。

葉間結締組織著しく肥厚も、楽狀をなし、輪狀に走り、細胞に富める所と細胞少く して殆ど硝子様に見ゆる所、新生せる血管を相當に見る所等あり。胞間結締組織甚だ 增殖せる所あるも、多くは繊細なる繊維にして濾胞を園繞走行す。

濾胞には大小あるも多くは小形にもて、大部分の者は圓形又は卵圓形なり。濾胞上皮は肥大も、圓柱状を呈も、透明泡状圓形の大なる核を有も、核小體を認め得。一部分に於て扁平なる上皮を有する所も存す。又上皮の剝離せる濾胞も所々に存む、その中には壞死に陥りて腔内につまり蜂窩狀をなむたる者、或は核の萎小黑染する者等あり。增殖せる結締組織又は强き炎症性細胞浸潤の爲に、全然實質組織を認め得ざるか、或は島嶼狀に殘存せる所、濾胞の壓迫萎小、或は崩壞を來たせる所等存す。一部分に於て被膜直下の濾胞上皮の違型的增殖を來たも、濾胞腔全然消失も恰も扁平上皮癌の初期を思はもむる如き所あれども、未だ核分剖像もなく何等惡性の微なも。

膠質は濃厚の所少しくなし、稀薄なる者大部分を占め、その中には溷濁せる者、雲 絮狀或は網狀を呈せる者等存す、濾胞中には全然膠質を含くまざる者も存す。

奏症性細胞浸潤相當に强く, 主とじて淋巴細胞なれども形質細胞も相當に存す。浸潤せる淋巴細胞は葉間結締組織中に或は集簇し, 或は汎發性に, 或は新生せる血管周圍に蝟集す,濾胞間にも到る所に細胞の汎發性浸潤をみる。是等淋巴細胞の集簇中には周圍と比較的明瞭に界され, 周邊に於ては濃密にして, 中心部に於ては粗にして, 所謂淋巴濾胞形成を認むる者も相當に存す。

甲狀腺動脈はその內壁肥厚すれども,大動脈硬化の相當に强きに對比すれば, その 變化は寧ろ輕度なり。 莢膜には相當の結締組織の増殖, 炎症性細胞浸潤ありて癒著の 存在を思はもむ。

第2囘手術材料所見.

切除されら塊片より數個を擇び夫より標本を作成しみるに,何れの部分にても甲狀 腺組織を認めず,全部腫瘍化らたる者なり。

腫瘍細胞は所によりて形を異にし、大部分に於ては多形性、紡錘形、類圓形等の種々の細胞が混然として集り居るも、一部分に於ては稍、大なる類圓形にして、明き泡狀の核を有する細胞の集り居り、又達型的核分剖像や壊死に陷りて、黑染せる核等も所々に見出さる。所によりては單核又は多核巨大細胞を相當にみる所あり。多核巨大細胞中にはランゲルハンス氏巨大細胞或は異物巨大細胞を思はらめる如き者存す。腫瘍細胞は大多數の者は原形質に富める明き核を有する者にして、核中に脂肪球を認むる者も存す。中には核小體を認め得る者ありて、上皮性細胞にあらずやと思はるゝ者存すれども、他の腫瘍細胞と同じく細き繊維は細胞間を走行し、或は細胞より繊維を出せる所、或は繊維によりて互に連絡せる所、一つの繊維ありてそのふくらみたる所

に、腫瘍細胞の存する所等存む、所謂蜂窩狀をなせる所は何處にも認むる事能はず、 大部分の所にては結締組織縦横に錯綜む、それに沿うて種々の腫瘍細胞が存す。標本 全體に亙り方々に出血む居り、又毛細血管も相當に多く、いづれにも血液細胞を充む 居るたみる。又是等の腫瘍細胞中には、毛細血管又は血管壁に沿ひ、或は管壁より繊維を出む、それに沿うて腫瘍細胞存する等、血管と密接なる關係あるやを思はむむ 所も存す。

### 剖檢的並びに組織學的所見.

### 剖檢的診斷.

- (1) 周圍組織への浸潤性増殖著明なる甲狀腺肉腫
- (2)轉移形成(兩肺, 肋膜, 心囊, 胸壁內面, 附近淋巴腺)
- (3) 癒著件心囊炎
- (4)心筋の褐色々素沈著竝に心筋斷裂
- (5) 横隔膜 : 癒著部位に於ける限局性肝周圍炎並に限局性の肝臓間質の増加 (黴毒性)
- (6)腎臓被膜に於ける小腺腫(小豆大)
- (7)子宮筋腫(鳩卵大)
- (8)粉瘤(膝關節前面の皮下組織)
- (9) 蛔蟲症
- (10) 中等度の大動脈硬化
- (11) 結核初期變化群(左肺下葉の上部並に淋巴腺)

#### 解剖的所見,

體格中等榮養相當に良好なる老婆の死屍。頭部の中央に過手拳大の腫瘍存し、その中央に長き約10糎の手術創ある外外部に特別なる變化なし。

## 甲狀腺肉眼的所見,

甲狀腺の所在部に,過手拳大の暗赤色の硬度軟き腫瘍あり。手術創の所に て皮膚ミ癒著し,下部の組織,器管ミは固く癒著すれごも,食道ミは癒著せ ず。腫瘍は周圍へ浸潤性に增殖したる為,附近筋肉ミの界は判明せず。上端 は前面にては,舌骨の下縁,後面は喉頭部の下端迄達し,下方は大動弓の上 端に至る(第1圖参照)。右側は手術にて大半切除されし為,約鷄卵大,左側 は約鵞卵大なり。左側中央に約5糎の横走せる手術創あり。縫合せし締尙ほ 存す。それを開くに一つの腔を形成し、中に血液を混ぜる軟化物質存す。壁 及び底面は凹凸不平所々黄褐色を呈す。この腔の中央より喉頭にかけて切割 を加ふるに、下方は軟化せる組織なるも、喉頭下の筋肉下に、50銭銀貨2枚 大の廣さの灰白色の所あり。周邊部は纖維性に見え、中央部は黄色を帶び、 此所は腔の底部の黄褐色の所に相當し、上部以外の他の三方は、腫瘍組織に てつゝまれ、その間は次第に移行し明かな界なし。

此切斷面に平行に,膝の右端より切割を加ふるに,氣管をミりまきて,正常甲狀腺の所在部に該當する所に馬蹄形をなせる 灰白色彈力性硬固の 10 鍰白銅 2 枚位の廣さの部分あり、此處は第二切斷面の灰白色の所に相當し,上方は筋肉,三方は腫瘍組織よりなるも,比較的にその境は明瞭なり。

此所の氣管粘膜にも灰白色の小斑點數個あるをみる(第2圖参照)。右側に於ても、左側に加へたる切割ミ大體平行に切を加へみるに、矢張り壞死性の腫瘍組織にて、その中に灰白色の斑點(1錢銅貨半分大より四分の一大の者)4個存す。硬度は彈力性硬固、左葉の切斷面にて、氣管の周圍に馬蹄形をなして存せる者ミ位置相當せるをみる。

甲狀腺組織的所見.

標本は腫瘍の中心部、周邊部等より、各數ケ所をこりて檢索せり。所によりて鏡下の所見を異にし、或は種々なる細胞存し、多形細胞肉腫こも云ふべき所、或は巨大細胞多くして、巨大細胞肉腫こも云ふべき所、或は紡錘形細胞多くして、紡錘形細胞肉腫こも云ふべき所あり。或は萎縮せる甲狀腺の残存せる所あり。

腫瘍細胞は、その形態性狀全く、第2回手術時材料に相等しけれごも、大 多數の者は壞死に陷りて、核が萎小黑染し、或は汚紫色に染り、或は細胞全 體が、エオジンにて均等に染色せる者等あり、又達型的核分剖檢像も所々に 認めらる。

周邊部、腫瘍の最外側ミ思はるゝ所を數ケ所ミりて檢索するに、大半は筋 肉中に浸潤し行ける者にして、腫瘍中に筋肉組織が島嶼狀に存する所、或 は筋肉細胞がちりぢりになつて存する 所等あり、筋肉組織中に 所々存する 結締組織中に, 疎に 腫瘍細胞の 浸潤をみる 所あり. 腫瘍組織 ご 筋肉組織 ご 筋肉組織 の間には鬆阻性結締組織 ありて, 境界判然 たる 所あれごも, 一般に不明なり.

腫瘍の右側端より取りし標本にて、結締組織の増殖甚だ强く、細き結締組 織縦横に錯綜し、その纖維中に明き桿狀の核の存する所、大なる長橢圓形細 胞の存する所等あり、又稍、暗き紡錘形の核の殊に多數存する纖維が種々な る方向に走行し、定型的紡錘形細胞肉腫を思はしむる如き所存す(第3圖參 照)、又此側に相當に大なる血管が栓塞し、その血栓が既に器質化せる像を認 む。

舌骨下縁,腫瘍の最上端ミ思はれる所より取りし標本にては,大部分は筋 肉組織なるも,中に2個の大豆大の結節あり,1個は腫瘍組織にて,1個は 慢性炎症の像を呈せる甲狀腺組織にて,兩方ミも薄き結締組織にてつつまれ 居るを見る・

中央部 腫瘍の前面, 空洞を形成せし所の底部に, 黄色を帶びし所, 及び 左側より數へて, 第一切斷面の灰白色をなせし所を鏡見せるに, 大部分の所は, 結締組織甚だ增殖し, 細胞の少き結締組織, 細き索狀をなして縦横に走り, 所々太くなりてそこに結締組織母細胞を見, 又是等の 機維に沿うて核 の萎小黑染せる細胞が存す. 或は 全視野が全く 硝子樣化せる 結締組織より なりし所あり. 一部分に於ては, 增殖せる結締組織に沿ひて, 壞死に陷りた る腫瘍細胞存す. 一部分に甲狀腺組織殘存す. 濾胞一般に小形にして, 膠質を有する者は僅に存し, 胞間結締組織相當高度 に增殖し, 最も强き所にて は濾胞消失し, 或は痕跡的に存する所, 或は全く機維性 こなり, その機維 束が濾胞の如き輪を作り, その壁に沿うて 壞死に陷りて, 核の黑染せる細胞が存す. 壓迫萎小するも尚よくその形態を保持し, 濾胞の一部分に, 第一 同手術材料に於けるこ, 同樣なる上皮細胞の違型的增殖を認む. 乍併核はいづれも壞死に陷りつゝありて, 比較的濃染し, 核分剖像, その他の悪性の徵 なし.

左側より數へて、第三及び第四切斷の灰白色の 斑點を 鏡見するに 何れも

甲狀腺組織なり、第1 同手術時の甲狀腺組織に比すれば、一般に結締織の增殖量く、機能は 長短細太不同の素狀をなして縦横に錯綜す。最も强き所にては、恰もリーデル氏甲狀腺腫の如くに、殆んご濾胞を認むる事能はざる所あり・胞間結締組織の増殖も相當に强くして、濾胞は大部分壓迫萎小し、核も亦萎小黑染し、或は核崩壞を來たせる者等存す。或は結締組織硝子樣化せるらしき所ありず、染色し難き部分あり。畢竟內芽組織にして、護謨腫變性の前階級にあらずやこ思はる。かゝる所には細胞少きも、他の所には細胞浸潤甚だ强く、殊に形質細胞多くして、散在性或は集合性に存在し、尚ほ淋巴細胞浸潤も相當にあり、淋巴濾胞形成を認むる所もあり、結締織母細胞、組織球も少しく存す・膠質は全體こして減少し、空泡を呈せる所も相當に存す。甲狀腺組織こ鬆粗結締組織をへだてゝ腫瘍組織存し、その一部分に於ては腫瘍組織中に血管相當に多くして、外膜より腫瘍細胞間に繊維を出し、或は腫瘍細胞の突起こ連絡せる如くに見え、血管こ密接なる關係を思はしむる所も存す。

氣管ミの癒著部位を鏡檢するに,氣管壁内に浸潤し行き,腫瘍組織ミの明な界なく,氣管自身には著變なし.

肺臓。表面には灰白不透明の米粒大の彈力性硬固の圓形斑點所々に散在す。所によりては擴況性に5錢白銅大より10錢白銅大の灰白色,不透明の彈力性硬固の斑點存す。切面は暗赤色,水腫性、氣管枝の周圍に所々に灰白色の斑點を認む。是等の灰白色の部分は鏡見するにその性狀全く原發腫瘍に相等もき轉移なるを知る。

左肺下葉の上部肋膜下約2糎位の所に,細長の大豆大の結核初期變化あり。副氣管 核淋巴腺には、同樣の變化あるも、その間の淋巴腺には結核變化なる。

淋巴腺 腫瘍の外側に腫大せも淋巴腺を可成り認めしが、轉移を來たせる者と全然 轉移なき者とが存せり。

心臓、心囊は大部分の所が心臓と繊維性に癒著す.心囊外にも、心囊腔中にも、脂肪組織が相當に存す.心筋は褐色を帶び、鏡見の結果著明なる心筋斷裂及び褐色色素 沈著を認め、且心囊に轉移ありむに氣付く.

大動脈。下行部より分岐部にかけて、可成り高度の硬化あり。 徽毒性變化は認められず。

肝臓、 有葉上部の表面の一部分が, 横隔膜と癒著あり、表面には微細なる皺襞を認む、 硬度多少増加す、割面黄褐色、 溷濁腫脹す、 鏡見するに被膜は肥厚 と、 且凹凸め

り、一部分に炎症性細胞浸潤を認む。癒著部位の直下の所は、結絡組織甚だしく増殖 し、最も强き所は弱擴大にて、一視野に全然肝細胞を認め得ざる所あり。或は肝細胞 が島嶼狀に存し、或は結絡組織が太き索狀をなして肝細胞中を走行す。所々に圓形細 胞浸潤あるも、概じて細胞少く血管は相當に新生す。又中心靜脈を中心として小葉内 にも結絡組織の増加せり。

## 考按

之を要するに著者の經驗せる例は,第一囘手術時には,甲狀腺の單獨腫大を來たせる者にして,他の所には何等の變化を認めず,且次に發生したる腫瘍は甲狀腺所在部に該當し,腫瘍の中心部にも,周邊部にも,所々甲狀腺組織の殘れるをみる。此腫瘍は甲狀腺より發生したる物なるべし,若し他器管より發生したりこせんか,此を何處に求むべきか。

食道ミは癒著もなく、氣管はその癒著部位に於ても、肉眼的にも、顯微鏡的にも、悪性腫瘍を發すべき何等の傾向を認めず。附近の筋肉組織より出でたるにあらざる事は、その組織學的所見に数するも明なり。上皮様小體又は、周圍器管の間質より出でたりこせんか、各方面より同時に出でたるにあらざれば、必ず一方の側に於て、甲狀腺組織の殘存せるを見るべし。しからずんば1ヶ月前何等特別の變化を認めざりし者か、かくの如き廣汎なる變化を呈すべき理なく、かゝる判斷の牽强附會なる事論を俟たざるべし。且第一囘手術時に於て肉眼的にも、顯微鏡的にも、全部一樣に廣汎性炎症にして、正常甲狀腺の像を認め難く、又腫瘍中に殘存せる部分は何れも炎症性なれば、甲狀腺全體に亙りし炎症ありて、それより悪性腫瘍を發生したる事は確實なるべし。

今にして、臨床的事項を案ずるに、最初に増大せしは左葉なりしが、手術にて切除せられたるは、右葉の大半ミ、左葉の僅少部分なり、此時左葉の大半を切除せられたるならば、既に發生しつゝありし腫瘍を認め得、その原發部位を探索し得、且移行狀態を認めえたらんやも計られず。第一回手術時三第二回手術時三の間の短き事を思へば殊にその感を深うす。 乍併悪性甲狀腺腫殊に、肉腫に於ては甚だ經過の短き者存す。 E. KAUFMANN 氏に依れば、29歳の男にて、其迄何等の 苦惱なき者が、急に喉頭水腫の症を起

し、8日にして死亡せし1例を剖檢せしに、甲狀腺に多形細胞肉腫存し肺に轉移ありし例を報告せり。H. KLOSE 及び ALEXANDER HELLWIG 兩氏の悪性甲狀腺腫 20 例を報告 したる 中に肉腫 2 例あり、其中 1 例は症狀の起りてより 7 週にて死亡せし旨を記したり。本例は第一回手術より第二回手術迄は、49 日間、死亡迄は 51 日間あれば、前記の例によりて考ふるに、第一回手術時に一部分に腫瘍の發生ありしや否やは、甚だ疑問なり言言はざるべからず。

次に文献に現はれし報告例を参考さして、次に余の認め得たる所見に基き、 炎症持ご腫瘍時ごに分けて、本例の本態に關しいさゝか考按する所あらんご 欲す。

慢性甲狀腺炎に關する考按.

第一回手術時標本並に,腫瘍中に残存せる甲狀腺は,所謂瀰蔓性纖維性間質性甲狀腺炎にして,間質結締組織の增殖,內芽組織の發生,圓形細胞浸潤を主こして,其外甲狀腺濾胞の變態消滅,血管新生,血管壁肥厚存し,更に 互氏反應の强陽性,臨床的所見等對照して,KUTTNER,SIMMONDS,下田諸氏等の報告せる如き,護謨腫形成を伴はざる黴毒性纖維性間質性甲狀腺炎に一致すべき者にあらずやこ思はる。尚ほ第一回手術時材料に就きて,レバデティ氏塗銀法を試みて,檢索せしがスピロへ一タは發見し得ざりき。

本例ミ鑑別を要する類似疾患・

- (1)結核、結核組織に特有なる變化を呈する者ミは、鑑別の要なきも、其 等の變化を伴はずして、慢性纖維性間質炎の變化を呈せる者ミの鑑別は困難 なるも、本例は左肺の初期結核變化群以外に結核變化なく、他の所見よりし て、寧ろ黴毒を疑ふを至常ミすべし。
- (2) リーデル氏甲狀腺腫、臨床的に最初は、リーデル氏病を疑はれしが其に特有ミする鐵樣硬度は呈せず、且第一同手術時に於ける癒著は、甲狀腺全摘出も可能なりこ思はるゝ位にして、甚だ高度なりこは言ひ難く、鏡檢するに結締組織增殖の程度はリーデル氏病に比すれば、大部分の所は程度低く、濾胞は萎縮或は充塞するも、一般に其形態を保持す。其外豫後不良の點

等著しき差異を示めせり.

- (3) 悪性慢性甲狀腺炎(Meyer). OSKAR MEYER 氏は、甲狀腺腫ありて、 其に炎症起り、肉芽腫を生じ、甲狀腺右葉より、增大し初め、前縱隔膜、右 側淋巴腺、甲狀腺左葉に蔓延し、鏡見するに、形質細胞エオジン嗜好細胞に 富みたる肉芽組織よりなる1例を報告し、悪性慢性甲狀腺炎こ名付けしが、 余の例は、肉眼的並に組織學的にこれこ甚だ異れり。
- (4) 單純性慢性甲狀腺炎・結核,アクチノミコーゼ等,特殊原因なく又何等特筆すべき原因なく起れる者にして,その組織學的所見余の例の甲狀腺組織 ミ甚だ相似たる者なれごも,前記の如くに,徽毒を思はしむる種々の所見あるにより原因不明こは言ひ難かるべし。

炎症に腫瘍にの移行狀態に關する考按。

炎症より發生したる肉腫に於て、其移行狀態をよく觀察したる例、動物腫 傷に於て相當に存す。山極教授の兎の乳腺にテールを塗布されし例にては、 諸所にテール小塊附著し、其を圍みて內芽組織存し、其より內腫組織への移 行形を認められ, 又テール小塊を中心こして, 紡錘形細胞が求心性重疊性に 園繞せる所を見られ、刺戟により結締組織の増殖を來たせる者なる事を述べ られたり、小喜多氏の鼠に於ける實驗にては、先づ刺戟の爲炎症起り、肉 芽組織を發生し夫より炎症性新生物の發生を見、夫より肉腫發生に至る者な る事を述べたり、MARIE CLUNET 及び RAULOT-LAPOINTE 兩氏は、白鼠に 於て,最初潰瘍性のレントゲン皮膚炎ありて,其後に紡錘形細胞肉腫を來た せる例を報告し、筒井氏はマウスの背部にテールを長期途布せしに、1例に 於て最初發生せる疣贅が脱落し、夫より潰瘍ごなりたるものを鏡見せしに、 紡錘形細胞腫の狀を呈せりこ。其他鼠以外の動物にても諸氏の報告あり、大 部分の者に於て、小喜多氏の認めたる炎症より腫瘍に移行せる狀態即ち、炎 症性新生物を認めたり。 反之人間に於ては,炎症又は瘢痕より發生せる例は 甚だ少く, 且多くは手術材料に就きて, 鏡檢せる為, 適確なる移行を認めた る者なし、余の例にても甲狀腺細織中の結締組織には、硝子樣化したる所、 瘢痕化したる所は相當に存するも, 一般に纖維中に細胞少く, 肉芽組織 こ思 はる ゝ部分少く, 結締組織母細胞も所々に僅に存するのみ. 叉腫瘍中に残存 せる甲狀腺組織は, 相當に厚き結締組織にて, 腫瘍組織ご境され, 何處にも 炎症より腫瘍に移れる移形を認め得ざりき.

腫瘍に關する考按.

癌腫及び癌腫ミ肉腫の本腫瘍ミ本腫瘍ミの鑑別。

肉腫ミ癌腫ミの區別の時に容易ならざる者の存する事は、既に先人諸氏の認められし所にて、殊に甲狀腺に於ていづれまも判明せざる者、兩者共に存せる者、最初何れか一方存し、次で他を續發せる者等存す。 又甲狀腺肉腫は、癌腫ミ同じく相當の高年に至りて發生する者にて、他の器管の如くに若年者に來たる事稀れなり。

癌腫に於ても發育盛んなる時には、細胞間に細き纖維存するご雖、本例にては殆ご全部の所に之を認め、且所によりては細胞より突起又は細き纖維を出せる所等あり、結締組織性の者なる事を思はしむ。又第1回手術材料にて、濾胞上皮の違型的增殖ありて、恰も扁平上皮癌の初期を思はしむる者存するも此の上皮の違型的增殖は良性甲狀腺腫及び甲狀腺腫にて、WEGELIN中山兩氏の例にて認められし所にして、WEGELIN 氏は慢性炎症の刺戟によりて起りたりこなしたり。兩氏の場合共に何等悪性の徼を呈せず。

警て SIMMONDS 氏は 2,3 年來レントゲン皮膚にかゝれる著者の手より、種々の皮膚片を切除して、鏡見せしに、大部分は皮膚炎の像を呈すれごも、一片に於て紡錘形細胞內腫の像を呈し、他の一片にて明かに表皮細胞癌を認めたる1 例を報告し、同じ個體の同じ器官に於て同時に內腫性及び癌腫性新生物を發生しうる物なる事を述べたり。之に由りて考ふるに、余の例にては炎症の結果、一部分に上皮の化生を來し、一部分に於て結締組織の肉腫性增殖を來たせる物にはあらざるか。而して HEXHEIMER、SIMMONDS 兩氏の動物實驗にて認めし所に依れば、肉腫組織は癌腫組織に比し、抵抗力强く、常に癌腫を壓迫すこいふ。又動物腫瘍に於て、肉腫の癌腫に續發し、遂に夫に代るを見れば、余の例に於ても、癌腫發生ありしやも計られざれごも、肉腫の爲に壓迫され、何處にも其像を認めざりしに至りし物か。

BECK 氏は膽囊に扁平上皮癌あり、内藤氏は胃に扁平上皮癌ありて、共に甲狀腺に轉移を起し、其虚に多形細胞肉腫樣構造を有する腫瘍を發生せし例を見、BECK 氏は癌細胞が轉移地にて、肉腫細胞に變性せるが故に、かゝる形態的變化像を生ぜる者なりご說き、内藤氏は形態學的に肉腫狀を呈するも、其性狀原發癌に類似するにより、肉腫ご言ふは、妥當ならざる旨を述べたり、余の例にては、腎臓に小腺腫、子宮筋腫、粉瘤等を認めし外に、悪性腫瘍の存せし事を認めず、又夫等の轉移ごは到底考へられず、甲狀腺自身の構造が、癌腫發育(形態)に影響を及ぼす者なる事を内膝氏は述べしが、余の例にては、明かに前記の如き肉腫的性狀を有せし者にして、肉腫樣外觀を呈せる癌腫ごは異る。

野谷氏は甲狀腺肉癌腫にて、大部分の所は、肉腫にて、一部分に肉腫組織 内に癌腫が侵入増殖せんミする狀態にある所を認め、BECK u. APOLONT兩 氏は動物腫瘍にて稀に癌腫が肉腫に打ち勝ちて増殖する事あるを述べたり。 余の例にても上皮性細胞を思はしむる者の中には、突起又は繊維の全然なき 者も相當に存すれば、或は此れより癌腫を發するに至るやも知れざれごも現 在は何處にも癌腫竈を認めざれば、癌腫又は合併腫瘍ミは言ひ得ず、單純な る多形細胞肉腫ミ見るを至當ミ信ず。

内被細胞腫ごの鑑別。

嘗て HEDINGER, LIMACHER, FRATTIN 諸氏等は、甲狀腺組織內の血管より發生せし肉腫を報告したりしが、其等に於ては血管内膜に變化あるを見、內膜細胞の肥厚より、其の腫瘍に至る迄の間の種々なる移行形を認めたり・本例に於ても細胞の突起を出し、互に連絡し、中には輸狀に連絡せし如くに見え、其中に血液の存する所ありて、內被細胞が腫瘍細胞に移行せし如くに見ゆる所あるも、かかる所は第2回手術材料に於てのみ認め得、他の所には全然なく又血管内膜の肥厚も認め得ざれば、手術の為に出血し、其が腫瘍細胞中に存する者こ見るべく、從つて本腫瘍は血管より發生せし者にはあちざるべし。

- (1)本例は慢性甲狀腺炎ありて、夫より甲狀腺多形細胞肉腫を續發せしものなり。
- (2)本例は第1回手術時には甲狀腺の單獨腫大を來たせるのみにして、他 の器官に變化を認めざれば、本腫瘍の甲狀腺より出でたる事は確實なり。
- (3)本腫瘍は大部分の所は**, 壊死に陷り**, 其中に殘存せる炎症性甲狀腺組織をみる。
- (4) 本甲狀腺は, 其臨床的並に病理學的所見より考へて, 徽毒性間質性纖維性甲狀腺炎なりご信ず.
- (5)本腫瘍は慢性炎症に續發せし者にして、肉腫に於ても、癌腫に於ける ミ、同様に慢性の反復せる刺激に依めて、發生する者なる事を適切に證し得 る例なりミ信ず・

稿を脱するに當り,御懇篤なる御指導,御校閱を賜りたる長與教授に謹謝 し,鈴木助教授,馬杉博士,高橋,鈴木兩學士の御指教を鳴謝す。尚貴重な る手術材料の檢索を許容され,且病歷を貸與されたる鹽田外科學教室及び同 教室の小松學士の御好意を深謝す。

## 文 獻

1)赤崎兼義、 容事新聞. 1246 號. 2)DÜTTMANN, Münch. med. Woch. 1924.
3)HEDINGER, Frankf Zeitschrift f. Path. 1909. 4)HENKE u. LUBARSCH, Handbuch d. spezifischen pathologischen Anatomie und Histologie. 5)KLOSE u. HELLIG, Klinisch. Woch. 1922. 6)KLUJINGER, Zentrallblat f. allg. Path. u. fath. Anat. Bd. 24. 1913. 7)小喜多晴雄、 癌. 第 17 年. 第 2 册. 8)MYER, Frankf. Zeitschrift Path. Bd. 12. 1913. 9)LANGERHANS, Virchow Arch. 189. 1907. 10)內藤豐助, 干葉醫學會雜誌. 第 4 卷. 第 6 號. 11)中山茂樹,東京醫學會雜誌. 41 卷. 6 號. 12)野谷昌臣, 日本外科學會雜誌. 14 回. 6 號. 13)RICE, CARL, Virchow Archiv. Bd. 2861. 14)RIEDEL, Münch. med. Woch. 1910. 15)ROTTER, Zentrallblat f. allg. Path. u. path. Anat. Bd. 42. 1928. 16)下田伯一, アレンツケビート. 第 2 年. 6 號. 17)SIMMONDS, Münch. med. Woch. 1907. 18)SCHULZI, Ziegl. Beitr. z. path. Anat. u. z. allg. Path. Bd. 74. 1925. 19)山極勝三郎、鈴木遂、村山小七郎、 癌. 第 15 年. 第 1 册. 20)黒川清之、東京醫事新誌. 2540號.

### 附圖說明

- 第1圖 腫瘍前面 a.舌 b.腫瘍 c.淋巴腺
- 第2圖 左側より數へて第二切斷面 a.舌 b.腫瘍 c.甲狀腺組織 d.氣管
- 第3圖 腫瘍(周邊部)
- 第4圖 腫瘍中に残りたる甲狀腺組織(第三切斷面) a. 膠質を含有せる濾胞 b. 空泡を呈せる濾胞 c. 増殖せる結締組織

Fig. 1

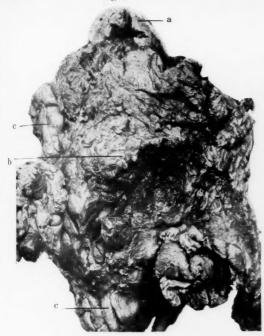


Fig. 2



Fig. 3

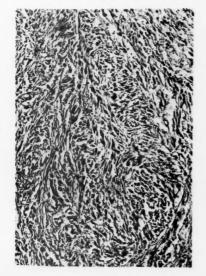
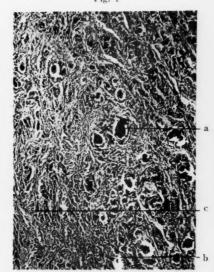
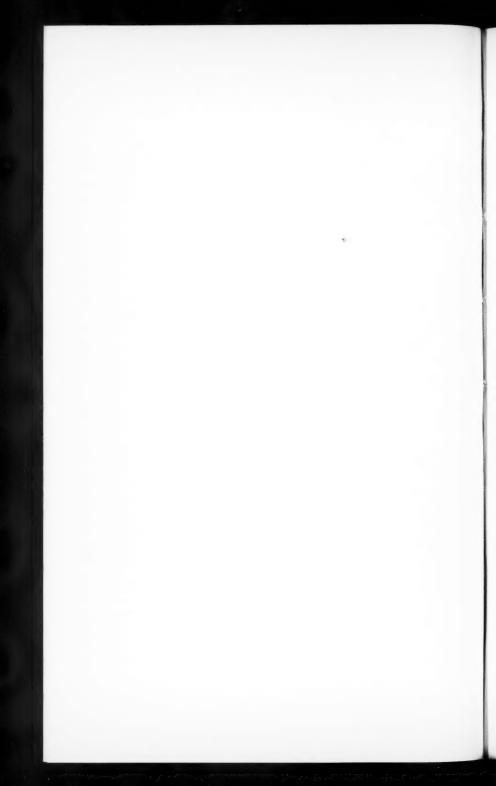


Fig. 4



小事案。

甲狀腺肉腫 Y. Komine, Schilddrüsensarkom.



# 松果腺腫の一例(圖版 XVI)

## 醫學士 久 保 久 俊

東京帝國大學醫學部病理學教室(主任長與教授)

## Ein Fall von Pinealom.

Von

### H. Kubo.

Aus dem Pathologischen Institute der Kaiserlichen Universität zu Tokio. Vorstand: Prof. M. Nagayo.

## Mit Tafel

Es handelt sich um einen Fall von Zirbeldrüsentumor bei einem 19 jährigen Mann, der klinisch hauptsächlich Symptomen der Hirndruckerhöhung aufwies und unter der Diagnose der Meningitis tuberculosa behandelt wurde. Nach zwei monatelangem Verlauf endete der Patient letal.

Bei der Besichtigung des herausgenommenen Hirns wurde von aussen nur mittelmässiger Hydrocephalus internus bemerkt. Die Oberfläche der Hypophyse war eingedellt. Auf dem medianen Sagitalschnitt konnte man zufällig in der Spalte zwischen der inneren Fläche des Lobus occipitalis und dem Kleinhirn, mit andern Worten in der Zirbeldrüsengegend ein hühnereigossen länglichovalen, ausschliesslich expansiv durchwachsenden dunkelroten Tumor auffinden, der nach vorn in den stark erweiterten dritten Ventrikel halbkugelig vorsprung, nach oben in das Splenium corporis callosi eindrang, nach hiten unten Velum medullare anterius zerstörend, das Kleinhirn und Hirnschenkel auseinander stark gewaltig zwängte, so dass Aquaeductus cerebri total verschwand und die obere Hälfte des vierten Ventrikels vollständig mit Tumormasse gefüllt war. Die Wand des dritten Ventrikels und des zurückgeblibenen vierten Ventrikels war überall rostig verfärbt, im letzteren war noch relativ frische Blutkoagula vorhanden.

Das Gewebe des Tumors ist von derber Konsistenz und mit Blutungen durchsetzt. Die innere Partie des Tumors ist ausgedehnt nekrotisch zerfallen.

Die Tumorzellen sind inselartig angeordnet und durch dünnere oder dickere Bindegewebsbündeln geteilt. Stellenweise ist das Geschwulstgewebe von dicken Bündeln von kollagenem Gewebe durchquert.

Die Tumorzellen sind unscharf begrenzt, scheinen vielmehr syntitial verbunden zu sein, ihr Protoplasma hat keinen Fortsatz. Die Kerne zeigen wechselnde Grösse und Gestalt, enthälten verschiedenen Chromatingehalt. Beinahe in der Hälfte aller Kernen, insbesondere in den chromatinarmen grösseren Kernen sieht man ein relativ wechselnd grosses Gebilde vom dem Kernkörperchen ähnlichen Aussehen, das sich entweder im Zentrum des Kerns oder an dessen Peripherie lokalisiert vorfindet. Die Form dieses Gebildes ist meist rund oder leicht eckig, in einigen blasigen grösseren Kernen erreicht dieses Gebilde eine bedeutende Grösse. In der Randpartie des Tumors sind Kalkkonkren ente, zum Teil mit konzentrischer Schichtung vorhanden.

Nach obengeschildeter histologischer Analyse müsste dieser Tumor ein Pinealom von adultem Typus zu sein.

Hierbei ist es nötig, eine noch andere interessante Veränderung des Hodens mitzuteilen. Der Hoden ist beiderseits von gewöhlicher Grösse, aber histologisch wird starke Wucherung der Zwischenzellen nachgewiesen. Fetthaltige Zwischenzellen sind überall anzutreffen, sie bilden häufig grosse Komplexe im verbreiteten Zwischengewebe. Spermatozoen ist nirgends vorhanden, Spermatiden nicht nachweisbar. Es liegt ein Stillstand der Spermatogenese vor. Dennoch wird ein wirkliche atrophische Veränderung des Hodens niemals bestätigt. Die übrigene inneresekretorische Drüsen zeigen auch histologisch nichts Besonderes.

Folglich kommen wir per exclusionem zur Annahme, dass diese hochgradige Zwischenzellenwucherung des Hodens als Ausfallserscheinung der Zirbeldrüsen infolge der Tumorbildung zu betrachten sei. (Autoreferat.)

### Tafelerklärungen.

#### Tafel.

- Fig. 1. Das mediane Sagitalschnitt des Gehirns. T. Zirbeldrüsentumor. V. Dritter Ventrikel. P. Plexus chorioideus ventriculi tertii.
- Fig. 2. Tumorgewebe.
- Fig. 3. Hoden. Z. Stark gewucherte Zwischenzellen.

#### 緒言

本邦に於て松果腺腫瘍の報告は**武谷氏の例**(1913)を以て嚆矢こし、次に長 奥教授は第3,第4例(1919)を報告せられたり、爾後今日迄その報告は12 例に達せり。

余が弦に報告せんミする例は臨床上結核性腦膜炎ミして處置せられ、その 死後全身を剖檢するに際し、偶然に正常松果腺位置に小鷄卵大腫瘍を發見し たるものなり、長與教授御指導のもミに檢索を進め多少興味ある所見を得た れば此處に報告せんこす。

#### 實驗例

#### 病歷

患者。大田某, 19歲男子。農。

本症の發端。

昭和7年5月31日の夜就寝中弟より頭部を蹴られて 覺醒し、全身に倦怠な覺え頭 痛及び眩暈を感じたるもそのまゝ再び就眠せり。

翌朝目醒むるや全身倦怠及び頭痛依存せじな以て終日就株す。6月2日に帶黄色の 液狀物を吐瀉せり。當時には體温上昇なかりじも全身倦怠及び頭痛は漸次增强し,6 月10日迄に數囘の嘔吐ありたり。6月11日本學吳內科に入院す。

#### 現症及經過

體格中等,皮下脂肪組織及筋肉は中等度に保持と、意識は正常眼瞼に浮腫並に下垂なく、瞳孔圓く調節正常なり。頸部强直腸性、肺臓に異常存せず、腹部にも特記すべき症狀など。病的反射亢進なく、ケルニヒ氏現象弱陽性。

6月 11日に腰椎腔穿刺な行ふ, 脊髄液涸濁 し血性を帶ぶ。 液壓 は 150 耗水銀柱ー

12cc排出後100 耗水銀柱となる、ノンチアペルト陽性。

爾後頭痛と興奮常存し腰椎腔穿刺術と鎮痛劑投與とな以て處置せり。脊髓液の遠心 洗渣物を培養せらもその成績陰性に終り、かくて入院後約3週間の後に死の轉歸をと れり。

臨牀診斷。結核性腦膜炎。

#### 割檢所見.

昭和7年7月4日(解剖剖檢錄番號141)。 身長167糎、體重43.5 瓩。

體格中等の稍、複削せる男屍,皮膚蒼白且つ乾燥せり,浮腫並に血斑を認めず,皮 下脂肪組織減退す。

胸部を開檢するに、胸腺は肉眼的に識別困難なり、胸廓内淋巴腺の腫脹なし、

肺臓。肋膜の癒著なら、右肺は一般に硬度増加し殊に下葉に著らく、表面平滑にして中等度の炭粉沈著あり。割面は暗赤色を呈し夥らく浮腫液流出し、これを抑壓するに多量の血色を帶びたる泡狀液體滲出す、結核性乃至化膿性變化は見られず。左肺略、右肺の變化に類すれど稍、これより輕度なり。肺結核初期變化群は精細に檢索せしまこれを證明し得ず。

腹腔を開くに腹膜平滑腹水なく臓器間に異常癒著なし、

肝臓。1520五。硬度尋常,表面平滑,割面黄褐色を呈も稍、溷濁せり。間質の増加なく勝管に異常を認めず。

脾臟, 95 瓦。莢膜皺襞に富む。割面暗赤色を呈じ脾材及び濾胞は著明ならず。

腎臓、左 140 瓦,右 120 瓦。硬度尋常。被膜は容易に剝離す,表面平滑,割面輕度 に腫脹し皮質模様は保持さる。

副腎、兩側ともに正常大、皮膚に脂肪沈著尠く髓質稍、著明、

膵臓、正常大、異常な認めず、

消化管。特記すべきの變化なし、

攝護腺, 正常大, 硬度尋常,

睾丸, 各々13 五。硬度正常、細精管の抽出可能肉眼的に異常な認めず。

甲狀腺、19 五、稍、腫大せり、割面實質性、濾胞の不同は著明ならず、

扁桃腺。兩側ともに著じく灰白色に腫大じ表面多少潰瘍性なれども膿性變化なじ。

頭蓋の形狀に異常なく頭毛の發育尋常. 頭蓋腔を開くに硬膜に異常癒著なく,腦髓液は可成り增加せるも溷濁せず. 腦を外部より觀察するに左右對稱的にして外狀の變形を認めず,表面の血管稍、著明に擴大し,これに血液の鬱滯を見る. 腦廻轉多少扁平 こなれり. 腦を側面より 抑壓 するに腦底膨出し,皮樣に薄くなれる腦底の一部穿孔し内方より多少淡赤黃色を帶びたる腦室液迸出す,即ち中等度の腦水腫を想像せしめたり.

腦に矢狀劇を加ふるに胼胝體尾部ご第三腦室後端部,小腦上端部三の間に 小鶏卵大の暗赤色を呈せる硬き腫瘍を發見せり、その最大橫徑は3糎,長徑 は5糎を算す。

第三腦室は稍、著しく擴大し室壁淡黃赤色を呈す,透明中隔も著明に擴大し、その內壁は高度に赤褐色を呈し、少量の同樣色調を帶びたる液體を容る。 Monroi 孔は多少開大し,兩側腦室も可成り擴大し,その腦室壁は淡赤褐色を呈す。第三腦室脈絡組織中を走る Galeni 靜脈は甚しく擴大し,その中に多量の血液鬱滯す。

上述腫瘍の肉眼的所見を一括せんに,該腫瘍は松果腺並に四疊體附近を中心こして事ら膨脹性の發育を營み,これに二次的に高度の出血を併發し腦室液を著色せしめたるものなり。

腫瘍の位置を述ぶれば、前方は第三腦室腔に半球狀に突出し居るも、上衣 層この癒著なく、この上端に於て第三腦室脈絡組織この中に移行せり。上方 は胼胝體尾部中に侵入し、その限界は明瞭なり。下方には四疊體を完全に壊 滅せる後、更に導水管を超へて腦脚の上方に出で、これを下方に甚しく壓迫 す。後方には一方小腦を著しく推退し、他方腦脚を壓迫し乍ら强く兩者間に 割り込みて第四腦室の上半を占居す。かくて第四腦室はその下半が僅かに狭 き腔こして残存するに過ぎず、その壁面は可成り新鮮なる血樣物にて覆は る。

腦下垂體. 0.65 瓦. 僅かに舟狀ごなり, 前葉輕度に腫大す.

# 剖檢的並組織的診斷

- 1) 小鷄卵大の膨脹性發育をなせる出血性松果腺腫瘍.
- 2) 中等度の脳水腫.
- 3) シルビー氏導水管の腫瘍による壊滅。
- 4) 透明中隔の著しき擴大.
- 5) 著しき間細胞の増生肥大を示せる睾丸。
- 6) 兩側扁桃腺の腫大.
- 7) 肺水腫.

- 8) 鬱血脾.
  - 9) 肝臓の軽度中心性脂肪變性。

#### 組織的所見

腫瘍・肉眼的所見に一致して大部分は廣汎 なる 新舊 を交へたる 出血竈なり、その間に不規則に走る大小の間質束,並にこれ等に圍繞されて嶋狀に散在する不同の細胞巢ミより成り、腫瘍の上半の周縁に砂粒が單在性に或は數個相寄りて重疊す。

腫瘍細胞. 一般に個々の細胞の區割は明瞭ならず,原形質の連絡するものあり. 数多の染色法によりたるも細胞の突起並に原形質内の顆粒性狀は明かならず,これ恐らく固定法の不充分に歸因せん.

核、核は略、中央に存し比較的大にして、その多くはヘマトキシリンに淡染し、橢圓形乃至卵圓形をこる。また甚しく膨大せるものを混じ、個々の間に稍、大小不同を認む。稀に不全直接分裂狀態にあるものあり。クロマチン含有量は均一ならざるも、一般に其量少く、廐して微細粒狀なれごまた粗大なるものも尠からず。

核内に全く均質性の比較的大なる小體あり、このものはヘマトキシリンエオジンにより淡小豆色に、ピロニンに弱嗜好性に、ハイデンハイン鐵ヘマトキシリンに著明に暗黑色に染まり、その核内位置は或は中央に或は偏心性に存し、その形狀は凡を圓形なれご時ごして稍、不整形をごる。個々の核内に普通1個の小體あり、然し各核がこれを等しく含有するごは限らず、然らざる核數略、半に達し、兩者は混然ご分布し、クロマチンに富む核にはこれを続くもの多く、大なる泡狀核にてはこの小體は可成りの大さを有す。

間質組織は主こして膠化結締織より成り、大小の東不規則に走向し、細胞 集の限界を形成するものは繊細なる結締織か稀に大なる間組織なり、而して 間組織中に血球を充満せる毛細血管あり、

腫瘍組織ご周圍組織 腫瘍は専ら膨脹性發育を營み, 周圍組織を推退乃至 壓迫せるに止る。

睾丸. 最も著明なる變化は肥大せる間細胞の高度増生にして、場所により

て幾分その程度を異にす。 間質は殆んご間細胞のみにて占居さる.

細精管中に精蟲は殆んご見られず,然し精蟲形成細胞並に前精蟲形成細胞は中等度に有し,精母細胞,原精細胞は稍、多量に存する細精管あり。散在性に存する横徑の正常より小さき細精管に於ては精細胞ご原精細胞のみにして,これ等に多量にズダン皿にて美麗に染色せる脂肪球の沈著をみる。且つ斯かる細精管は著明に增生せる間細胞にて套狀に包裹さる。固有膜の肥厚及び間結締織の増生は全くこれを缺如す。

腦下垂體. 前葉は僅かに肥大し居り實質性にして間質は極めて少なし. 脂肪沈著は概して軽微にして主細胞これを含有す. エオジン嗜好細胞は前葉の中央部より後部に亙りて分布し, 正常より若干增加せり, 且多少肥大し原形質中のエオジン顆粒著明にして, 細胞中に空泡の形成を見るものなし. 核はクロマチンに乏しく, 核の位置は偏心性のもの多く, 同一細胞中に2個の核を有するものも存す. 鹽基嗜好細胞の典型的なるものは幾分減退す.

副腎. 皮質に於ける類脂肪沈著豐富. 髓質に認む可き變化なし.

膵臓。 ラ氏島は尾部に於て著明なり.

甲狀腺・濾胞に著しき不同を見ず、膠質含有量正常・間質の増生なし・

# 總括及考按

松果腺の生理的形態的方面は植村氏(1917)の胎生的並に系統的發育,その 正常構造,比較解剖に亙る廣汎なる業績によりその大成を見たり。

人體松果腺の病理は此處に發生する腫瘍例の臨床的病理解剖的研究に資ふ所甚大なり,而してこの場合吾人の最も興味を惹くは PELLIZZI(1910)の始めて提唱せし早期生殖器身體異常發育症 Macrogenitosomia precoce(praecox)なり。但し彼の原著は臨床所見のみにして未完させるも、その後續報の發表を見ず。本症の發現に就きては既に MARBURG (1913),武谷氏 (1914)等の精細なる綜訛あり。長與教授 (1919) は更に論及を深くせられこれに生殖器の早期發展ご身體異常の發育 ごに分解的觀察を下されたり。爾後 BERBLINGER (1926, 1932),或は BENDA (1932)等の廣汎なる材料よりの綜訛にしても上述定說以上のものを見る能はず。

扠て本例は19歳の男子にして臨床上特有なる 松果腺症狀を寸毫も呈せず 主こして騰壓上昇乃至腦膜刺戟の症狀を發現し結核性腦膜の診斷のもこに處 置され、臨床的徴候の始發以來約2ヶ月の經過の後に死の轉歸をこり、剖檢 に際し腦に正中線を沿ふて矢狀制を加ふるに及び甫めて正常松果腺位置に出 血性小鷄卵大の腫瘍を發見せり。

腫瘍を形成する細胞は主こして植村氏の云ふ松果腺細胞中の大明性核を有する型に一致す。DIMITROWA (1901) は松果腺細胞の核内に均質性膠質性封入物に前めて著目し、其後 KRABBE (1911) はこの物が細胞體へ分泌されるこ說き、植村氏 (1917) もこの封入體に詳細に觸れたり。近年 VOLKMANN (1923) はこの物の細胞體への 分泌過程を實證 せりこ云ひ、これを核分泌 Kernexkretion こなせり。本例の腫瘍細胞の核内小體は上述の核封入體こ形態的に一致するものあるこ思はる。

かくて解剖的並組織的所見る相俟ちて本例の腫瘍が松果腺より發生せるは 疑を容れず,且つ腫瘍細胞が幼時期より以後の正常松果腺質質細胞に酷似し 浸潤性發育を缺如せる點より植村,Horrax、Bailey 等の所能に因み本腫瘍 を良性成熟型松果腺腫 Pinealom こするを至常さす。

本例に臨床上松果腺症狀を全く發現せざりしは年齢的關係よりすれば何等 異ミするに足らず寧ろ常然なる可く,これ從來の文獻例に悖る處なし.

然し年ら睾丸に組織的に著しき間細胞の増生肥大を證明せら、細精管に精 蟲を見ざるご雖これ病狀の經過 そのもの > 直接影響に 因せざるごは保し難 く、且つ固有膜並に間組織に彈力纖維乃至結締織の増生或は硝子樣變性を缺 如せるを以て、この睾丸を萎縮乃至退行性變化に陷れるこなす能はず、從つ てこの間細胞の増生は 精細管萎縮 の場合に見らる > ものごは 趣を異にすべ く、その由來はこれを他に求めざる可からず。

欄りて爾他內分泌器を見るにこの睾丸所見を裏付くるに足る變化を證明し得ず、本例の如き年齢に於ては松果腺は最早退行性に陷りつ♪ある可く、その機能の減退乃至脫落が他の內分泌器に著しき變化を招來するこは考へ難し。

# 先づ從來の報告例に就きて睾丸所見を通覽するに:

### 松果腺腫並に此に類するもの

番號	著者	報告年代	年幣性	腫 瘍 種 類	松果症狀		丸	所	見
1	Massot	1872	19 \$	Karzinom	(-)				
2	DALY	1887	23 🕈	Karzinom	(-)				
3	Guadrer	1889	123	Teratom + Adenom	(-)	内分	分泌腺口	韻れず	r.
4	Немрец	1901	24 3	Karzinom	(-)	松果腺、ては述べ		9分泌》	泉に就き
5	MEYER	1905	24 3	Adenom	(-)	J.	局所所見	しのみ。	
6	Bell	1916	33 🌣	Hyperplasia	(-)	内分	分泌腺1	特變7	ii.
7	Horrax	1916	123	Struma	(+)	1,	局所所見	しのみ.	
8	植村	1917	不明	Adenom	不明		不明	f	
9	Skoog	1918	9\$	Hyperplasia	(+)				
10	長 奥	1919	7\$	出血性悪性ストルーマ	(+)	睾丸發行	育程度1		遠に相應
11	田村	1919	21 🕏	惡性松果腺腫	(-)	組織的	こも異常	た認め	うず.
12	Löwenthal	1920	23 🕏	Malignes Adenom	(-)	睾丸正常生せり.	常大。問	[細胞中	等度增
13	Hübschmann	1921	11.43	Kleinzelliger epi- thelialer Tumor	(+)	睾丸完全量,	全發育,	間細腦	可成多
14	Steiner a. Johan	1922	73	Pinealom	(+)	睾丸は原あり。	成人に-	致し料加せり	<b>造形成</b>
lõ	木村, 新井	1922	不明	悪性スルーマ	不明		不明	].	
16	KLAPPROTH	1922	151/2 3	Teratom + Adenom	(-)	6/2	<b>尼丸發育</b>	不充分	
17	HORRAX a. BAILEY	1925	28 🕏	Pinealom of spongioblastic type	(-)	斥	局所所見	のみ.	
8	23	39	29 우	22	(-)		99		
9	22	2,9	6\$	**	(±)	身體發育なし。	育著明。	その他	は記載
30	318	,,	123	Pinealom of adult type		07.	しと局	所解剖	所見の
1	91	,,	10字	Pinealoma of spongioblastic type	(-)	J.	员所所見	のみ。	7
2	2.0	"	23 🕈	Pinealom of adult type	(-)		19		
3	>>	"	13 🕏	,,	(-)	糖尿病, 所見は局			組織的
4	99	,,	20 3	,,	(-)	F	所所見	03.	
5		,,	24 7	,,	(-1				

26	BERBLINGER	1925	32 🕏	Malignes Adenom od. Karzinom	1	a) 1).
27	松澤, 俁野	1926	23 🕏	ストルーマ <b>乃</b> 至腺 腫	(-)	精子成生著しく微弱。間細胞 多からず。
28	Kutscherenko	1926	17 \$	Pinealom (nach Berblinger)	(-)	肉眼的及び組織的に 異常な し.
29	Stark	1928	25 🕈	Carzinom	(-)	組織的に萎縮を證明せり。毛 餐生著明。
30	Liebert	1929	10 \$	Pinealom	(-)	外陰部正常, 局所解剖.
31	Mankowsky u. Smirnow	1929	22 🕏	Pinealom	(-)	局所所見のみ.
32	Dias	1930	8\$	Pinealom	(-)	外陰部發育不良。解剖所見は 局所のみ。
33	石 崎	1930	11 \$	畸形腫+癌腫	(+)	解剖局所.
34	吉 松	1931	15.8 \$	惡性松果腺腫	(-)	臨牀所見のみ。
35	Strauss a. Globus	1931	20 \$	Pinealom	(-)	局所所見のみ.
36	GLOBUS a. SILBERT	1931	13 🕏	99	(-)	95
37	99	,,	17 🕏	29	(-)	>>
38	>>	13	13 🕏	51	(-)	外陰部正常より大なり しと云 ふし解剖的組織的所見な し.
39	**	19	30 \$		(-)	局所所見のみ。
40	1)	,,,	37 \$	**	(-)	***
41	>9	,,	20月ま	,,	(-)	"
42	**	9.9	114	9.9	(-)	33
43	STRAUB	**	19 🕏	***	(-)	精蟲形成旺盛。其他內分泌腺 に異常な E。
44	Kux	,,	22 🕏	**	(-)	肉眼的組織的に 異常を認めず。

以上の外に直接原著に接し得ざる為に省略せる例若干あり、此等數多の報告例中にて內分泌腺に關し詳細に論ぜるは長與教授, LÖWENTHAL, KLAP-PROTH, BERLINGER, 松澤一俣野, 田村等なるべし、

次に其他松果腺腫瘍にて松果腺症狀を伴へる例(表省略)等をも通じて間細胞の著しき増生ありしは GOLDZIEHER, 長奥教授, LÖWENTHAL, HÜBSCH-MANN, STEINER and JOHAN, RAYMOND et CLAUDE, 上原一宗, BERBLI-NGER (1920) 等の例なり.

植村氏に依れば松果腺實質細胞は春季發動期以後に於ても尚よくその一部 保有せらるミ云ふ。而して春季發動期以後に於ける松果腺腫瘍例にて睾丸變 化を伴へるものに、BERBLINGER (1920) の 35 歳男子膠質腫例に於ける著明なる精蟲形成ミ間細胞の豐富、同じく 32 歳男子 (1925) 悪性腺腫乃至癌腫例にての間細胞増生、Löwenthal の 23 歳男子悪性腺腫に於ける間細胞の中等度増生、STRAUB の 19 歳男子松果腺腫に於ける著明なる精蟲形成、GIEBEL の 25 歳男子の肉腫例に於ける精蟲形成の旺盛、SCHMINCKE (1929) の 50 歳男子の Ganglioglioneuroma amyelinicum に於ける輕度睾丸肥大等あり。これ成人に於ても松果腺ミ生殖腺ミの間に一途の關聯の殘存するを裏書するものなるべし。上坂氏は 20 歳 3 ヶ月男子 の 肋骨骨瘍 ミ肺結核にて著しく痩削せる解屍例に於て松果腺の肥大ありて、その腺實質の配列、性狀の初生兒のそれに類似し、生殖器は 13 歳の男兒に相應せしを報告せり。

扠て本例は年齢關係が松果腺症狀を發現し得べき最高限界ミせらる16歳より隔るここ遠からざるより推して、この睾丸所見を松果腺腫瘍に由來するこなすも當を失せざる可しこ思惟す。

#### 結 論

- 1) 本例は臨床上結核性腦膜炎の診斷を下され,臨床徵候の始發以來約二ヶ月の後に死の轉歸をこりし19 歳の男子にして,その剖檢に際し偶然に松果腺腫瘍を發見せり.
- 2) 本腫瘍は組織的檢索によりこれを良性成熟型松果腺腫なるを確めたり.
- 3) 睾丸に組織的に間細胞の著しき増生肥大を證明せり、これ恐らく松果腺腫瘍に由る該腺機能の脱落乃至不調に基くものなる可し。

#### Literatur.

1) 秋山, 松果腺別出の甲狀腺發育に及ぼす影響に就きて、日本內分泌會誌。3 卷. 5號. (昭和 2 年). 2) Altmann, Über ein Dermoid d. Zirbeldrüse. W. Klin. W. 4. 1930. 3) Askanazy u. Brack, Sexuelle Frühreife bei einer Idiotin mit Hypoplasie d. Zirbel. V. A. Bd. 234. 1921. 4) Askanazy, Die Zirbel u. ihre Tumoren in ihrem funktionellen Einfluss. Frkf. Zt. f. Path. Bd 24, 1920. 5) Bailey a. Jeliffe, Tumors of the pineal body. Arch. of int. med. Vol. 8, 1911. 6) Batelli et Stern, Effets produits par les extraits de la glande pinéale, des capsules surrénales etc. injectés dans les ventricules latéraux du cerveau. Cpt. rend. des séances de la Soc. d. Biol., Bd. 86, 1922. 7) Bell, Hyperplasia

of the pineal body. J. of N. a. Ment. Dis. Vol. 44, 1916. 8) BENDA, Zirbeldrüse. Handb. d. inn. Sekret. I. 1932. 9) BERBLINGER, Zur Kenntnis d. Zirbelgeschwulste (primärer Zirbelkrebs mit Metastasen). Zt. f. d. g. Neurol, u. Psy. 10) DERS, Bemerkungen über die Zirbelgeschwülste. Zbl. f. Path, 1926, Bd. 38. 11) DERS, Glandula pinealis, Handb. d. Sp. path, Anato. Bd. VIII. 1926. 12) Ders, Physiologie u. Pathologied, Zirbel, Ergeb. d. g. inn. Med. Bd. 14, 1929. 13) DERS, Die Theorien über d. Zirbelfunktion u. ihre anat, Grundlage. A. f. Psy. u. Neurol. Bd. 85, 1928. 14) DERS, Zisbel u. Frühreife. Neue Deut. Klinik. Lief. 50, 1932. 15) Bienstock, Über einen. Tumor d. Zirbeldrüse. Schw. m. W. Nr. 20, 1926. 16) Boehm, Zirbeldrüsenteratom u. genitale Frühreife. Frkf. Zt. f. Path. Bd. 22, 1919. 17) BORCHARDT. Pubertas praecox epiphysären Ursprungs ohne Teratombildung. Dtsch. m. W. 18) Brandenburg, Morphologische Beiträge zur Frage d. endokrinen Funktion d. Epiphyse. Endokrinolog. Bd. 4, 1929. 19) DERMAN u. KOPELOWITSCH, Zur Kenntnis d. Zirbeldrüsengeschwülste. V. A. Bd. 273, 1929. 20) DIAS, Über einen Pinealtumor mit multiplen Gliomen. Monatschr. f. Psy. u, Neurol. Bd. 76, 1930. 21) Dietrisch, Mangel d. Zirbeldrüse mit Hirsutismus. Centbl. f. allg. Path. Bd. 48, 1930. 22) Foà, Ipertrofia del testicoli e della cresta dopo l'asportazione della ghiandola pineale nel gallo. Estratto da pathologica, anno 1912. num. 90. Genova. (當教室藏 Ribbert's library). 23) FRANK, Demonstration (Pubertas praecox). M. med. W. Nr. 1, 1921, 24) FRANKL-HOCHWART, Über Diagnose d. Zirbeldrüsentumor. Dtsch. Zt. f. Nervenheilk. Bd. 37, 1909. 25) 藤井, 春情夙發症. 神經醫. 大正6年. 16卷. 26) GIEBEL, Über primäre Tumoren d. Zirbeldrüse. Frkf. Zt. f. Path. Bd. 25, 27) GLOBUS a. SILBERT, Pinealomas. A. of Neurol. a. Psy. Vol. 28) GOLDZIEHER, Über eine Zirbeldrüsengeshwulst. V. A. Bd 29) HALDEMANN, Tumors of the Pineal gland. A. of Neuro. a. Psv. Vol. 18. 1927, 30) HEILMANN u. RÜCKART, Beitrag zur Frage d. körperlichen u. geistigen Frühreife bei Geschwülsten bei in d. Schädelhöhle. Zieg. Beit. Bd. 89. 1932. 31) HORRAX, Studies on the pineal gland. A. of inter. Med. Vol. 17, 1916. 32) HORRAX a. BAILEY, Tumor of the pineal body. A. of Neurol. a. Psych. Vol. 139, 125. 33) Ders, Pineal pathology. A. of Neur. u. Psych. Bd. 19. 1928. 34) HÜBSCHMANN, Sektionsbefund bei Pubertas praecox. M. med. W. Nr. 7. 1921. 35) HÜCKEL, Ein Fall von Sarkom d. Zirbeldrüse. V. A. Bd. 269. 1928. 36) 石崎, Makrogenitosomia praecox た

伴へる松果腺腫瘍の一例. 大阪醫. 29 卷. 5 號. (昭和5年5月). 37) 石橋、睾丸 間細胞に就て、日本病理會誌. 7卷. 1917. 38) 市井, 睾丸間細胞の内分泌機能 に就て. 日本病理學會誌. 22 卷. 1932. 39) 伊澤, 鶏に於ける松果腺剔出試驗. 日 本病理會誌. 1922. 40) 伊澤一秋山, 松果腺の研究. 日本病理會誌. 17卷. 1927. 41) 伊澤, 白星の松果腺剔出試驗成績及該腺剔出の出産に及ぼす影響に就て. 日 本病理會誌. 17 卷. 1927. 42) JACOBI, Beitrag zur Kenntnis d. Epiphysenmor. Dtsch. Zt. f. Nervenheilk. Bd. 71, 1921. 43) 桂島, 松果腺腫瘍の一例. 東北醫. 11卷. 昭和4年6月. 44) 木村一新井, 興味ある腦腫瘍六例(松果腺腫瘍). 吳教 授紀念論文集. 9122. 45) KLAPPROTH, Teratom d. Zirbel, kombiniert mit Adenom. Centbl. f. allg. Path. Bd. 32, 1922. 46) 今, 睾丸間細胞の機能に就て. 日本病理會誌. 15卷. 1925. 47) KUTSCHERENKO, Tumor glandulae pinealis. Zbl. f. Path. Bd. 37, 1926. 48) Kux, Ein bösartiges Pinealom. Zieg. Beitr. f. Path. Bd. 87, 1931. 49) Liebert, Über Epiphysentumor. Dt. Zt. f. ervenheilk. Bd. 103, 1929. 50) LÖWENTHAL, Zur Pathologie d. Zirbeldrüse. Zieg. Beitr. z. path. Anat. Bd. 67, 1920. 51) Luce, Zur Diagnostik d. Zirbelgeschwülste u. zur Klitik d. cerebralen Adipositas. Dtsch. Zt. f. Nervenh. Bd. 68/69. 1921 52) DERS, Weiterer Beitrag zur Pathologie d. Zirbeldrüse. Dtsch. Zt. f. Nervenh. Bd. 71, 1921. 53) MANKOWSKY u. SMIRNOW, Ein Beitrag zur Klinik u. path. Anatomie d. Geschwülste d. Zirbeldrüse. Zt. f. g. Neurol u. Psych. Bd. 121. 1929. 54)松澤一俣野, 松果腺腫瘍の一例. 神經學雜誌. 26 卷. 2 號. 大正 15 年. 55) 長興. 松果腺の病理. 神經學雜誌. 18卷. 大正8年. 56) 中村, 內分泌の病理補遺. 殊 に睾丸間細胞の增生. 日本病理學會誌. 16卷. 1926. 57) OBMANN, Über vorzeitige Geschlechtentwicklung. Dtsch. med. W. Nr. 7, 1916. 58) ODERMATT, Die epiphysäre Frühreife. Schw. med. W. Nr. 22, 1925. 59) OGLE, Sarcoma of pineal body. Transactions of the Patholog. Soc. of London. Vol. 50. 1899. Schmidt's Jahrbücher d. ges. Med. 1900. 60) 岡本, 松果腺腫瘍の一例. 神經 學雜誌. 16卷. 9號. 大正6年. 61) 大野, 松果腺畸形腫. 福岡醫. 8卷. 1號. 大 正3年. 62) OESTREICH u. SLAWYK, Riesenwuchs u. Zirbeldrüsengeschwulst. V. A. Bd 157, 1899. 63) 大塚, 日本人睾丸に關する研究. 日本病理會誌. 15 卷. 64) PAPPENHEIMER, Über Geschwülste d. Corpus pineale. V. A. Bd. 200. 1910. 65) Pastori, Über Nervenfasern u. Nervenzellen in der Epiphysis cerebri. Zt. f. g. Neurol. u. Psych. Bd. 117, 1928. 66) PAWLITZKY, Zwei Fälle von Plötzlichen Tod durch seltene Hirntumoren. Med. Klinik. Bd. 45, 1929. Ref. Ztbl. f. Path. Bd. 51. 1931. 67) Pellizzi, La sindrome epifisaria "macrogenitosomia precoce ". Rivista italiana di Neuropatho., Psichiat., ed Elettroterapia.

Vol. III. 1910. 68) QUAST, Zur Histo-physiologie d. Zirbeldrüse d. Menschen. Kl. W. Nr. 24, 1928. 69) RAYMOND et CLAUDE, Les tumeurs de la glande pinéal chez l'enfant. Bulletin de l'académie de Médecine. 3. Série 63. 1910. Ref. Schmidt's Jb. 310. 1911. 77) SCHMALZ, Über einen Fall von Hirntumer mit Pubertas praecox, Zieg. Beitr. z. Path. Bd. 73. 1924. 71) SCHMINCKE, Zur Kenntnis d. Zirbelgeschwülste. Zieg. Beitr. z. Path. Bd. 83. 1929. 72) STARK, Tumor der Glandula pinealis u. des Hypophysisgebietes. A. f. Psych. u. Neurol. Bd. 82. 1928. 73) STRAUB, Zur Kenntnis d. Zirbelgeschwülste. Frank. Zt. f. Path. Bd. 42, 1931. 74) 武谷, 松果腺の疾患, 日新醫學. 第3年. 1913. 75) 田村、松果腺腫瘍の一例。岡山醫. 352. 大正8年. 76) 照山, 人の松果腺病理學 的研究. 日本病理會誌. 15 卷. 1925. 77) 内田, 松果腺部位に於ける所謂惡性神 經膠腫の一例. 日本眼科雑誌. 20 卷. 大正 5 年. 78) 上原一宗, 松果腺腫瘍. 臨肽 醫雜誌. 12年. 2, 3號. 大正 13年. 79) 上坂, 身體發育の著しく遅延せる一屍 體の松果腺に就て. 吳教授論文集. 1922. 80) UEMURA, Zur normalen u. pathologischen Anatomie der Glandula pinealis des Menschen u. eini ger Haustiere. Frkf. Zt. f. Path. Bd. 20, 1917. 81) 植村, 松果腺/解剖及病理解剖補遺. 日本 病理學會誌. 7 卷. 1917 年. 82) VOLKMANN, Sekretionsvorgänge in der Zirbeldrüse. M. med. W. Nr. 12, 1923. 83) WALTER, Beiträge zur Histologie d. mensch, Zirbeldrüse, Zt. f. g. Neurol, u. Psych. Bd. 17, 1913. 84) Wirth, Über sexuelle Fsühreife, Z. Anat. II. Abt. Z. Konstit. 15. H. 4, 1930. Ref. Ztbl. f. allg. Path. Bd. 51. 1931. 85) Yокон, Experimentelle Untersuchungen über die Doppelextripation d. Epiphyse u. d. Keimdrüse. Zt. f. d. g. exp. Med. Bd. 55, 1927. 86) 吉松, 脳水腫を招來せる松果腺腫瘍の一例. グレンツゲビー b. 5年. 9號. 昭和6年9月.

#### 圖版說明

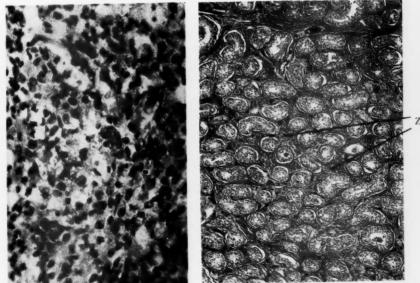
Fig. 1. 臘の矢狀割面. T. 松果腺腫瘍. V. 第三臘室. P. 第三臘室脈絡叢.

Fig. 2. 松腺腫瘍. Fig. 3. 睾丸 Z. 著明に増殖せる間細胞.



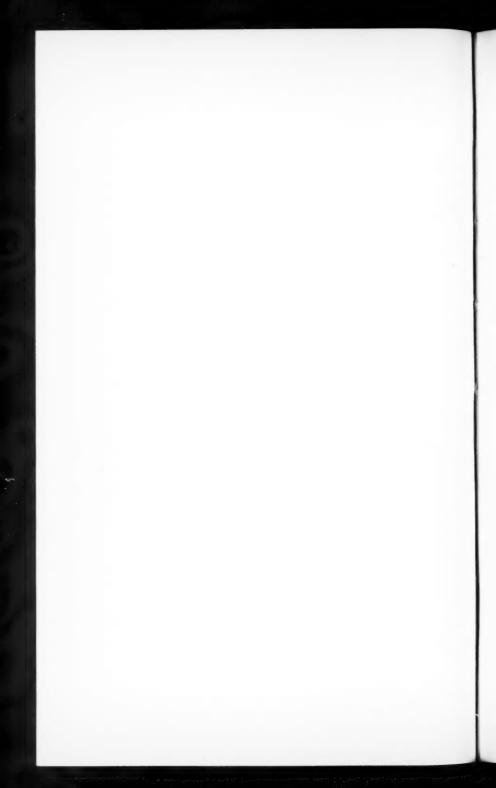
Fig. 2

Fig. 3



久 保、 松果腺腫 H. Kubo, Pinealom.





# 渦去 22 年間に於ける本教室の子宮 癌腫治療成績抄錄

# 緒方十右衞門 中川正路

大阪帝國大學醫學部產婦人科教室

化學的方面の研究

講師 吉松信寶

病理學的方面の研究

講師新海輝一

#### 目 次

#### 第一章 總 論

- 患者の年齢
- (Ⅱ)本教室に於ける子宮癌腫患者の遺 第四章 本教室に於ける子宮癌根治手術 傳的關係
- (II)本教室に於ける子宮癌腫患者の分 (I)手術可能率に就いて 娩回數及び最終分娩と癌腫發見迄 の期間
- 分類
- (VI)本教室に於ける子宮癌腫の所屬淋 (I)死亡例 巴腺に於ける轉移
- (VII)合併症
- (Vm) 骨盤結締織浸潤程度
- 第二章 本教室に於て子宮癌根治手術を 第八章 本教室の子宮癌腫治療現況 受けたる者の其後の經過及び治

#### 極期間

- (1)本教室にて子宮癌腫と診斷したる 第三章 本教室に於ける子宮癌腫手術後 に於ける被手術者の生存率
  - 絕對治績率
  - (Ⅱ)本教室に於ける子宮癌根治手術絶 對治癒率
- (IV)本教室に於ける子宮癌患者の主訴 第五章 子宮癌根治手術に用ひし麻酔法 (V)本教室に於ける子宮癌腫の組織的 第六章 子宮癌根治手術に際する死亡例 対に剖檢例

  - (11)剖檢例
  - 第七章 子宮癌患者の手術前後に於ける 血清蛋白膠樣狀態

# 第一章 總 論

本教室に於て大正8年より昭和7年末迄の外來患者57,376名中子宮癌腫

こ診斷せしは 1910 名(3.3%) である.

(1)本教室にて子宮癌腫ご診斷したる患者の年齢

大正8年より昭和7年末迄に當教室を訪れたる癌腫患者1.757名に就き年 齢の差を5ヶ年を一期こして區別するご次の如くになる。

番號	年	齡	例數	番號	年	倫	例數	番號	年	齡	例數
1	15歲	20歲	1	6	40歳-	45歲	320	11	65歲	-70歳	40
2	20歲-	-25歲	16	7	45歲-	-50歳	350	12	70歲	-75歲	12
3	25歲	30歲	68	8	50歲-	-55歲	271	13	75歲-	-80歳	3
4	30歳	-35歳	158	9	55歲	60歳	173				
5	35歳-	40歳	234	10	60歳	-65歳	111				

上表に於て番號 r 欄にある例數 Nr. は (Tr-2.5) 年= (Tr+2.5) 年= 0 間 に發見せる子宮癌患者の例數である.

 ${
m Tr}=5{
m n}+12.5$  12.5 年を原點にせしを以て年齢は  $5{
m n}+2.5$  にて表はさる。此の例數を千分比  ${
m fr}$  に改算し  ${
m fr}$  に相當する年齢を  ${
m Tr}$  ミセば、

番 號	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
年 T	r 17.5	22.5	27.5	32.5	37.5	42.5	47.5	52.5	57.5	62.5	67.5	72.5	77.5
例 fr	0.57	9.11	88.70	39.93	133.18	182.13	199.20	154.24	98.46	63.17	22.77	6.83	1.71

代表年齢Trはrを任意の自然數ミしたもので上表は一區間を5年ミした。

$$Tr = T_o + rc$$

$$c = 5$$

$$T = T_0 + x$$

偖座表による圖示組織系に於て平均期間を過ぎる縦軸に對する平行線を平 均値線ミ云ひ、此の平均値線に關する度数fのS-次能率 μs は

$$V_s = \frac{\Sigma r^s tr}{\Sigma fr}$$
 平均値

第二,第三,第四次能率は次の公式を用ひて算定する.

$$\mu_1 \! = \! O_1 \quad \mu_2 \! = \! C^2 \, (V'_2 \! - \! V'_1{}^2 \! + \! \frac{1}{12}) \, , \quad$$

$$\mu_3 = C^3 (V'_3 - 3V'_1 V'_2 + 2V'_1^3)$$

$$\mu_{4} = C^{4} \left[ V'_{4} - 4 V'_{1} V'_{3} + 6 V'_{1}^{2} V'_{2} - 3 V'_{1}^{4} + \frac{1}{2} \left( V'_{2} - V'_{1}^{2} \right) + \frac{13}{240} \right]$$

總 $\tau$   $\nu_z$   $\gamma_z$   $\gamma_z$ 

 $\mu_2 = 4.12780$   $\mu_3 = 0.91187$   $\mu_4 = 46.59957$ 

子宮癌腫を發見せらる  $\lambda$  平均年数は 6.75 年,即ち  $12.5+5\times6.75=46.25$  年ごなる.

次に第二,第三,第四次の高次能率値 μ2, μ3, μ4 の數値を以て

$$\beta_1 = \frac{(\mu_3)^2}{(\mu_2)^3}$$
  $\beta_2 = \frac{(\mu_4)}{(\mu_2)^2}$ 

なる法式より恒數βι及びβωを求め之れより

$$r = \frac{6 (\beta_2 - \beta_1 - 1)}{2\beta_2 - 3\beta_1 - 6}$$

なる法式より r なる恒数を定む, 今實際に計算せる數値を與ふれば

$$\beta_1 = 0.01182$$
  $\beta_2 = 2.73492$   $r = 18.27834$ 

次に時の平均値に於ける度數yıは

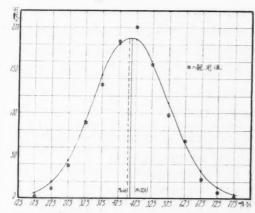
$$y_1 = \sqrt{\frac{r}{r+1}} \cdot \frac{1}{\sqrt{2\pi \mu^2}} e^{-\frac{1}{12r}(3 + \frac{\beta_1}{4} \cdot \frac{(r+2)^2}{r+1})}$$

なる法式にて示され、且つ N, A を夫々

$$N = \frac{2\mu_2 (r-2)}{\mu_3 (r+2)} \qquad A = \frac{2\mu_2^2 (r+1)}{\mu_3 (r+2)}$$

なるが如く置けば時 t を時の平均値線の位置より測るもの ミして當研究の精 密度の範圍内に於て度數曲線は

$$y = y_1 e^{-Nt} (1 + \frac{t}{A})^{NA-1}$$



平均年齢時に於 ける癌腫發生の 確率は 0.18876 で單位千分比な

 $v_1 = 0.18876$  自用

實際計算するに

れば其の度数は 189 ミなる.

N = 7.26764

A=35,52806 次でソを算出し

先の觀察値ご共に圖示すれば上の如きグラフごなる。

子宮癌ミ診斷せられた平均年齢ミ子宮癌を最も多數に診斷した年齢ミの間 隔るは

$$\delta = \frac{1}{N}$$
  $\delta = -0.13760$  (モード)を與ふるこき

子宮癌を發見せる平均年齢は 6.75411 年なるを以て

6.75411-0.13760=6.61651 年は 12.5+5×6.62=45.60 年 (子宮癌の最 も多い年齢)

即ち子宮癌を診斷せる平均年齢 46.25 年に比するこ 0.65 年(約8 ヶ月) 早い. 今標準偏倚を p で示すこ

$$\rho = \sqrt{\mu_2} = 2.03170 \, \text{ }$$

年敷に改算すれば10.15850年ミなる。

即子宮癌ミ診斷 せられた 平均年齢は46.3歳で、子宮癌の最も多い年齢は 5.6歳である.

#### (1) 本教室に於ける子宮癌腫患者の遺傳的關係

遺傳にて來る癌は 稻田教授の 報告では約10-15-20% こなつて居る、腸 癌では岩永教授の報告では泰西で 10 %以下こなつて居り Fiehiger Trier で12.2%に家族的癌發生を認めて居る.瑞西醫會の總合調査では148例の腸 癌中 33 例に遺傳的關係を見て居る。

本教室にて治療 せる 子宮癌腫患者 142 名中遺傳的關係を全く 否定 せる者 102 名、遺傳的關係不明のもの4名,遺傳的關係を有する者 36 名 (25,4%)で ある.

これを内譯するこ。

祖父に癌あるもの3名(胃癌2 上顎癌1)

祖母に癌あるもの3名(子宮癌1 胃癌2一内母方の叔父に胃癌あるもの1名) 父に癌あるもの 11 名(胃癌7 ― 内駄に子 | 兩親に遺傳的素因なきもの 3 名 ) | 不明のもの 4 名 |

(喉頭癌2 兩親に遺傳的素因なし)

(食道癌1 兩親に遺傳的素因なし)

(肝臓癌1 兩親に遺傳的素因なし)

**時に癌あるもの 10 名(胃癌 4 一内姉に胃 阿親に遺傳的素因なきもの 2 名)** 不明のもの 2 名)

兩親に遺傳的素因なきもの1名 (子宮癌2 不明のもの1名/ (乳 癌2 兩親の遺傳的素因不明)

(肝臓癌1 兩親に遺傳的素因なし)

(喉頭癌1 兩親に遺傳的素因なじ)

兩親共癌腫に犯される者3名(父 胃 癌 不明のもの1) 不明のもの1

(父 陰莖癌 , 兩親に遺傳的業因なし)

兄に癌あるもの1名(祖父母、兩親に遺傳的素因なじ)

姉に癌あるもの2名(3名)(子宮癌1 祖父母兩親共遺傳的素因なし)

(胃 癌1 母親胃癌に罹りし故其の部に入る)

(乳 癌1 祖父母兩親共遺傳的素因なじ)

妹に癌あるもの(1名)(胃 癌1 父胃癌に罹りし故其の部に入る)

質母房(叔父)に癌あるもの1名(胃 癌1 祖母に胃癌ある故其の部に入る)

實父兄(伯父)に癌あるもの1名(胃 癌1)

實母妹(叔母)に癌あるもの1名(子宮癌1)

從妹に癌あるもの1名(子宮癌1)

以上の數値を以ては遺傳に關係があるや否やは不明である,見方によりては癌腫が老年に至り可成多數を占めて居る關係上其の子係が一部癌に罹患せりこて之れに關係を附し得るや否やは甚だ困難なる問題であるが,全然關係がないこ云ふ根據もない,矢張り25.35%丈けには確かに其の近親に癌罹患者がある,今後非常に多數の材料につき調査の上でなければならぬが先づ夫れ迄は否定すべき確證がなく,且つ一方には142名中36名(25.35%)に其の近親に癌罹患者があり,且つ其の兩親共に癌の罹患者なごがあつて居る. 及兄弟姊妹に癌發生者があるので少なくも近親に癌患者があつたものであれば之れに犯され易い傾向はあるものこ見て大過はあるまい,而して診斷に際しても此等血縁者に癌の既往症を見出した場合には充分注意を拂ひ診斷すべきものこ思ふ。

ウィリャムス氏の英國の Middlesex Hospital の調査では 132 例の癌腫患者中子宮癌 23.7%, 乳癌 24.3%, 舌癌 3.5%の割合で遺傳性が認められた。

- (Ⅲ) 本教室に於ける子宮癌腫患者の分娩回数及び最終分娩 ミ癌腫發見迄の 期間
- 1) 子宮頸腟部癌腫ミ分娩囘數
- 一般に子宮頸腟部癌は經産婦に多く不妊者に少ないものご考へられ、且つ

分娩による 裂傷等は後來子宮頸腟部磨發生 に關係あるが 如く思考 されて居る。

實際經產婦ミ不妊者ミの癌腫患者の數を比較して見るミ癌腫患者の數は經 產婦の方に遙かに多い。今本教室に於ける子宮癌患者1789 名につき不妊者 ミ經產婦の數を千分比にして見るミ,不妊者112 に對し經產婦888 である, 即經產婦癌患者は不妊患者の7 倍以上に當つて居る。

しかしこれを以て直ちに不妊者よりも經産婦が子宮癌に罹患し易い 三考へるのは誤りである。

何ミなれば今試みに當教室に於ける 癌患者 1789 例並びに九州帝國大學の 376 例を各千分比ミし、これ等ミ我國に於ける旣婚婦人 1000 例の分娩囘數ミ を比較するに次の如くになる。

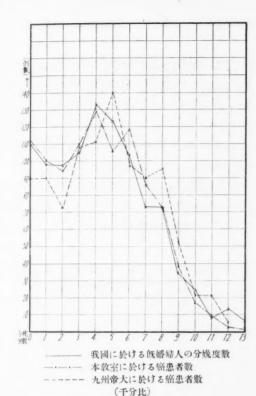
分 娩 囘 數	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
本教室に於ける子宮癌 例數 千分比)	112	100	94	110	129	106	118	86	72	38	17	8.9	2.7	1.1
九州帝大に於ける子宮 癌例數(千分比)	90	90	72	108	111	140	98	90	95	51	21	21	5	
我國に於ける既婚婦人 の分娩度數(千分比)	110	98	97	105	133	123	103	73	73	34	24	8	13	6

これを圖示する言次の如きグラフミなる.

下圏の如く癌患者の絶對の數から見るミ本教室の例では4回經産の癌患者が最も多く,九大では5回經産の癌患者が最も多數を占めて居る. 従つて見力によつては千人の癌患者中に4回又は5回の經産婦が最も多數であるから直ちに4回もしくは5回經産婦が最も多いこミになる.

もし分娩の度数に應じて刺戟が加はるものミすれば5回6回ミ分娩度数が 増すにつれてよし比例せずミも癌患者の数は増加の傾向を示すべきである。 然るに下圖では7,8,9回ミ漸次著しく減少して居るので分娩の度数には關 係せないこも見られるが,然し之れ等は孰れも觀察の仕方が悪いのである。 此の数値は單に千人中に含まれたる癌患者の分布にすぎないから之れを以て 以上の如き意義を附するここは出來ない。

斯く分娩回數に應じて癌患者の數を集めて見ただけでは不妊者に癌罹患者



が少なくて經產婦に 罹患者が多いこの結 論は出來ない, 其關 係を明かにするのに は既婚者千人につき 其内に不妊者が何 名, 1 回經產者が何 名ミ云ふ標準を定 め,此の標準値ミ癌 罹患者數ミを比較 し、もし或回數の經 産者が此の標準値よ りも多く癌に罹患し て居れば爰に初めて 當該經產者は癌罹患 率が高いご云ひ得る ものである。卽ち例 へば5回の經產婦で 見るミ千人の旣婚婦

人中5回の經産婦は123名あつてよい,然るに 癌患者1000 中5回經産婦は 我教室では106名で普通分布123名に對し少ないので,5回經産婦に癌罹患 率が多いミ云ふ事は出來ない,尤も九大の統計では少し多くなつて居る,不 妊者でも千人の旣婚者中110名あり,癌に罹つて居るものが112名であるか 55回經産婦に比して決して少数ではない。

そこで上圖の如く我國に於ける旣婚婦人千名に對する分娩數の分布を本教 室並びに九大の統計ミ比較するミ其の分布狀態が殆んご一致して居り,經產 婦であるために特に癌罹患率が高いミ云ふ關係は認めない。

これご略、同一の意見が京都帝大産婦人科教室で云はれた、卽ち從來の成

書に記載された多産婦に癌が多いミ云ふ事質は根據**薄弱であつて確**定的でないミ記載されてある。

一筒ほ上圖に就て旣婚婦人千人の分娩度數曲線ミ本教室に於ける癌腫患者の 分娩度數曲線ミを比較するこ6回及び7回に於て癌罹患者の度數が健康經產 婦の千分比に對し稍:多い. 卽ち此等の多產婦は癌に多く罹つて居るこも見 られるが,元來6,7回の多產者の數は1000中に其の數が少ないので少數で の統計は確實でない.且つ7,8,9回の經產者の年齡を見るこ,先行分娩こ之 れに續行する分娩この期間を本教室で調査したのでは約3年位であるので, 今假りに20歳で結婚した婦人を想像し,之れが7回の分娩を經過したもの こすれば最早40歳內外で將に癌腫發生の年齡に近づき居るので,此等の關係 は癌發生に或る意義を有するここになるこも見られる。

今少しく観察の方面を變へて見るに,

分娩	人數	癌腫に罹りし 平均年齢	30歳迄の罹患 數	40歳―44歳迄の罹患数	45歳以上の罹 患数
0	76	42.8歳	31	18	27
1	74	43.6歲	29	16	29
2	75	43.6歲	32	11	32
3	79	41.9歳	38	18	28
4	109	43.8歳	38	17	54
5	91	46.7歲	26	20	45
6	87	48.0歳	15	16	56
7	71	51.5歳	13	12	46
8	46	49.5歳	4	4	38

上表に示す如く本教室に於ける子宮癌腫患者の中不妊者及び1回より8回 迄の經產婦708名に就て,癌腫發見常時の年齢の平均値をこるこ41歳から 51歳の間を上下して居る,而して不妊で子宮癌に罹つた者の平均年齢は42.8 歳である。

又各分娩回数によつて 39 歳迄に罹患 した者ミ, 45 歳以上で罹患したもの こを分けて見るこ不妊者では 39 歳迄に全體の約半数が罹患し,1回より3回 迄の經產婦では 39 歳迄に罹患したものミ,45 歳以上で罹患したものミの数 に餘り差がない,4回以上の經產婦になるこ 45 歳以上で罹患した者の数が

39 歳迄に罹患した者に比し著しく多くなつて居る。而して5回以上の經產婦になるご癌に罹つた平均年齢も50歳に近づいて來る。

#### 2) 最終分娩 : 癌腫發見迄の年數

本教室に於ける癌腫患者 663 例に就いて最終分娩ご癌腫發見迄の年數を調 香する三次表の如くになる。

最終分娩	より癌	0-5	6-10	1115	16-20	21-25	26-30	31-35	36-4
例	數	180	125	124	98	68	42	21	15
百分	比	27.1	18.9	18.7	14.8	10.3	6.3	3.2	2.3

即ち全體の癌腫患者から見るご最終分娩後5年以内に罹患したものが一番 多く27%に達した。即ち癌腫患者の約四分の一は最終分娩後5年内に罹患 したここになる。

尚此等を分娩囘數により區別して見る三次表の如くになる.

	分娩より癌 迄の年数	0 - 5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-30	31-35	36-4
1	回經產	4	12	9	11	13	8	12	5
2	21	15	14	8	16	4	10	3	5
3	1.	28	16	13	8	7	2	3	1
4	**	33	22	20	15	9	7	1	2
5	**	29	17	15	14	6	8	1	1
6	**	25	14	21	14	9	3	0	1
7	17	23	12	19	9	5	2	1	0
8	99	12	6	9	9	8	1	1	0

即ち1回經產婦では最終分娩後20年を經で其の間に罹患せる者が約全數の半分で2回經產婦では最終分娩後15年間に全數の約半數罹患した事になり、3回の經產者では最終分娩後10年を經たごきに既に半數以上罹患した事になつて居るので分娩回數が多くなるご最終分娩後10年以内に全體の約半數位罹患するご云ふ事になり、之れを見方によるご分娩が重なるご最終分娩後遠からず癌に罹患した樣に思はれる。つまり分娩なる刺戟が一つの誘因になつた根據にもなるからご考へられるが5回6回7回ご云ふ經產者になるこ最終分娩後10年以後に初めて罹患したものが多數を占めて居るので分娩

に全く其の誘因を歸するミ云ふ事も如何ミ思はれる.

(IV) 本教室に於ける子宮癌患者の主訴

自大正 8 年至昭和 7 年期間に當教室 を訪れたる 癌患者 1910 名中生殖器出血を訴へた者は 1285 名 (67.3%) である、他は訴ふる所属々であつて統一し難い。

(V) 本教室に於ける子宮癌腫の組織的分類

本教室に於ける子宮癌腫 500 例を其の發生部位並びに組織的所見により分類すれば次の如し.

(1)頸部癌 478例(95.6%)

扁平上皮癌 445 例 (93.1%)

初期扁平上皮癌 30 例 (6.7%)

未熟型 74例(16.6%)

成熟型 230例(51.7%)

中熟型 111例(24.9%)

腺癌 20例 (4.2%)

腺癌兼扁平上皮癌 14 例 (2.9%)

(Ⅱ)體部癌 5例(1.0%)

腺癌 4例 扁平上皮癌 1例

(Ⅲ)頸部及腟壁癌 6例

扁平上皮癌

成熟型 4例 未熟型 1例 中熟型 1例

(IV) 體部及頸部癌 5 例

腺癌 1例

扁平上皮癌

成熟型 2例 中熟型 1例

腟部扁平上皮癌兼體部腺癌 1例

(V) 腟部及腟壁癌 6例

扁平上皮癌

成熟型 4例 中熟型 1例 未熟型 1例

尚頸部癌 478 例を發生部位により分類すれば次の如し

(1) 腟部癌 281 例 (58.8%)

扁平上皮癌 260 例 (92.5%)

初期扁平上皮癌 30例(11.5%) 未熟型 44例(16.9%)

成熟型 128例(49.2%) 中熟型 58例(22.3%)

腺癌 13例 (4.6%)

腺癌兼扁平上皮癌成熟型 7例 腺癌兼扁平上皮癌未熟型 1例

(Ⅱ)頸管癌 19例(4.0%)

扁平上皮癌

未熟型 5例(26.3%) 成熟型 9例(47.4%)

中熟型 5例(26.3%)

(Ⅲ)頸腟部癌 178例(37.2%)

扁平上皮癌 166例(93.3%)

未熟型 25例(15.1%) 成熟型 93例(56.0%)

中熟型 48例(28.9%)

腺癌 7例(4.2%)

腺癌兼扁平上皮癌未熟型 1例

腺癌兼扁平上皮癌成熟型 3例

腺癌兼扁平上皮癌中熟型 1例

(VI) 本教室に於ける子宮癌腫の所屬淋巴腺に於ける轉移

本教室に於て子宮癌根治手術を行ひたる 516 例中所屬淋巴腺の腫脹を認めたる者 154 例 (29.8%) で内 100 例に 就き顯微鏡的研索を行ふに癌腫轉移を認めたる者 29 例 (29.0%) あり。

原發病竈の癌腫の種類によりこれを分類すれば次の如し.

扁平上皮癌 24 例

成熟型 17例

。未熟型 4例

中熟型 3例 (轉移は原發竈に同じ)

腺癌 1例

腺癌兼扁平上皮癌成熟型 3例(轉移は腺癌のみ)

腺癌兼扁平上皮癌未熟型 1例(轉移は腺癌のみ)

(VII) 合併症

本教室に於て行ひたる子宮癌腫の 開腹手術 514 例中合併症を 認めたる者 110 例 (21 %) でこれを細別するこ,

卵巢囊腫	21例(4.0%)	ヘルニヤ	1例
筋腫	20例(3.8%)	重複子宮	1例
輸卵管水腫	16例(3.0%)	卵巢血腫	1例
附屬器周圍炎	16例(3.0%)}(7	1.4%) 輪卵管結核	1例
附屬器炎	6 (54)	卵巢癌腫	1例
妊 娠	12例(2.3%)	卵巢纖維腫	1例
輪卵管 膿瘍	11例(2.1%)	膫 石	1例
輸卵管血腫	2 例		

(VIII) 骨盤結締織浸潤程度

記載明かなる514例に就て浸潤の程度を分類するこ,

	明治41	大正元2	3	4	5	6,	7	8	9	10	11	12	13	14	15	昭和2	3	4	5	6	7	ät	百分比	第一次死者	死亡者 の百分 比
(-)	1																								14.3
(±)	0	1	0	0	0	(	0	1	1	2	0	2	1	0	2	2	2	2	0	2	0	18	3.5	4	22.2
(+)	3	1	1	2	1		1	0	0	3	1	7	5	4	4	6	6	3	3	8	4	63	12.0	15	23.8
(++)	2	5	4	4	4		1	6	3	5	10	6	8	14	7	10	16	11	10	8	12	146	28.0	46	31.5
(##)	7	8	5	3	4	-	6	6	6	13	11	12	24	11	11	29	21	11	24	30	27	266	52.0	80	30.1

上表の如く手術例数の約年数は骨盤結絡織浸潤並びに癒著の甚しきものであつたが此等の(冊)に相當する者の65.4%は手術完全に遂行された、從つて手術の困難の程度が推測される、而して第一次死亡者は略、浸潤の程度により増加して居る傾向がある。

第二章 本教室に於て子宮癌根治手術を受けた 2.者の其後の經過及び治癒期間

# 手術完全なりご思考せる者 (術 後 經 過)

51	Ē.	A	£		大正元	2	3	4	5	6, 7	8	9	10	11	12	13	14	15	昭和2		4	5	6	7	合計	生存(第者
各斯與	度に全と	於け	8年8	11	12	9	5	4	12	5	11	6	14	14	17	16	20	17	28	31	24	27	40	30	353	一
衡	後	死	t	1	1	2	1	_	1	1		1	2	3	8	8	6	5	7	11	7	5	7	6	83	767
在	所	不	明	2	4	2	3		5	1	1	-	1	2	1	1	1	2	2	3	1	4	4	2	42	亡明
斯往		年末	满		1	2		2	3		3	2	2	1	2	1		2	6	5	5	5	1	22	65	228
		年以内生			1				1				1	1			2	3	2	1	2	1	28		43	168
		年以內生						Ī		1				1		1	3			1	2	12			21	120
		年以內生											1	2			_		_		7				10	90
		年以內生								1	1		1		1			2	1	10					17	88
析後 七右		年以	Ŀ	8	5	3	1	2	2	1	6	3	6	4	5	5	8	3	10						72	72

# 手術は遂行せるも不全なりし者

(術後經過)

华	度	明治44	Œ	2	3	4	5	6,	7	8	9	10	11	12	13	14	15	昭和2	3	4	5	6	7	合計	15-48
各年度に 術不全と 例數	於ける手 思考せる	5	2	5	6	10	6		4	7	10	12	12	9	11	7	5	11	9	3	7	11	11	16:	術者者を
衛後 第一さ	死 亡		1	3	2	3	62			5	4	7	4	4	5	2	4	5	-1	2	3	1	6	67	一在除
在所	不明	1	1	nemen .	-	-	3			-		1		2	1				1		2	4		16	
術後1 生存	年未滿			1	1	22	1		3	1	3	1			2		1	4		1	1	2	5	31	80
	年以上內生存					1				1	1		4	3	0 4				3		1	4		20	49
	年以上 內生存									Ī			2	_		2			1					5	29
	年以上 內生存										2													2	24
	年以上 内生存								1															1	22
術後5 生存	年以上	2		1	:3	4						3	22		1	3		2						21	21

# 開腹せるも根治手術不能なりし者

(術後經過)

年	度	治	大正元		3	4	5	6, 7	8	9	10	11	12	13	14	15	昭和2	3	4	5	6	7	合計	1子数
	於ける手 思考せる		1	4	3	2	4	3	3	2	5	3	3	13	9	4	11	7	3	5	4	3	92	術古代後者、大
	死 亡			1	1	1	1	1	1		1	1	2	2	2	1	2	1		1	1	2	22	一在 次所 死不
在所	不明			2	2	1	2				2	1		1	3	1	5	4	1	2	3	1	31	0
術後1 生存	年未滿		1	1			1	1	1		1	1	1	7	4	2	3	2	1	2			29	39
	年以上 內生存				The same of				1					3					1				5	10
	年以上 內生存																1						1	5
	年以上 內生存							1															1	4
	年以上 內生存																							3
断後5 生存	年以上									2	1												3	3

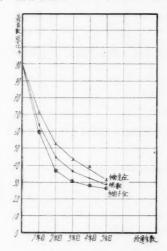
生存者數

		術後第一次治癒者	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	5年以上
毛崇	生存者數	228	163	120	99	89	72	72
	百分比		71.49	52.63	43.42	39.04	31.58	31.58
手不	生存者數	80	48	29	24	22	21	21
術完	百分比		60.00	36.25	30.00	27.50	26.25	26.25
手不	生存者數	39	10	5	4	3	3	3
	百分比		25.64	12.82	10.26	7.69	7.69	7.69
納	生存者數	347	221	154	127	114	66	96
總數	百分比		63.68	44.38	36.60	32.85	27.67	27.67

上表は癌根治手術が完全に出來たこ思考せらるる者及び手術は遂行したが 後分不充分な所があつた者並びに開腹したが根治的手術が不能なので輸入血 管結紮に止めた者又は附屬器切除,腟上部切斷術,或は單に開腹のみに終つ たもの等の其の後の經過を觀察したものである。

兎に角何等かの治療後1年目には總数の63.7%生存して居るが2年目には44.4% こなり,5年以上生存したものは27.7%こなつた.

今此等の關係を圖示する三次の如くになる.



線は計測値による曲線 × ・ ⊗ は實測値

第三章 本教室に於ける子宮癌腫手術後に於け る被手術者の生存率

手術後或期間に於て被手術者の生存數の減少は調査時に至る期間に關係する,今便宜上生存者例數を百分比ミし,之れをNミし,手術時を標準ミした時を t にて示すものミせば N は勿論 t の函數にして手術後時日の經過に從ひ被手術者生存數の漸次減少 するは 容易 に想像 し得べし,然るにその減少率  $-\frac{dN}{dt}$  は手術の完否も亦一定の影響あるべく,依りて  $-\frac{dN}{dt}$  は單に t にのみ逆比例するものは思考し難ければ今手術の完否を示す數を P ミし $-\frac{dN}{dt}$  が t に逆比例するこするこ a を比例常數ミし

$$-\frac{dN}{dt} = a \frac{1}{tp}$$

なる微分方程式を得,此れを積分すれば

$$N = \frac{a}{p-1} \quad \frac{1}{tp-1}$$

を得る.

若し簡單のために $\frac{a}{p-1}$ =A  $P-1=\beta$  にて示せば

 $N = A \frac{1}{t\beta}$ 

なる法式を得, その對數を取れば

 $\log N = \alpha - \beta \log t$ 

但し  $a=\beta \log A$  こなる, これにより 本教室の過去 22 年間の手術により 生存者數を示す法式を求めるこ

 $\log N = 1.798569 - 0.501351 \log t$ 

(Nは生存者數, tは治癒年數)

なる式を得,これより算出した値ご實測値を比較するご次の如く極めてよく 一致するものである.

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
觀測值	71.4	57.7	51.4	47.4	44.4
計算值	70.4	57.1	50.0	47.3	45.5

最大偏倚は  $t=\pm$  の時で $\frac{N - N + 100}{N - N + 100} \times 100 = 4.5$  である。此の場合  $t=\pm$ , 即  $t=\pm$  年目に計算値  $t=\pm$  表別値が著しく差異を生するは術後  $t=\pm$  が外を行つた者を合併して考へたからである。

次にラデウム後放射したものを除外し單に手術のみにより治癒生存したものに就いて此の法式を適用する三次の式を得。

log N=1,847399-0,285589 log t

これに就いて計算値ご觀測値ごを比較するご更によく一致する。

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
觀測值	71.4	57.7	51.4	47.4	44.4
計算值	70.4	57.1	50.0	47.3	45.5

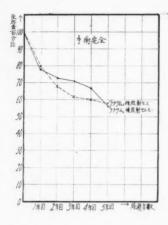
最大偏倚は t=3 の時で $\frac{N觀測-N計算}{N觀測} \times 100 = 2.7$  こなる.

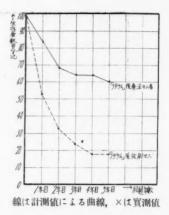
次に手術後ラヂウム後放射を行つた者ミ手術のみによつたものミの術後の 經過を調査するミ次の如くになる.

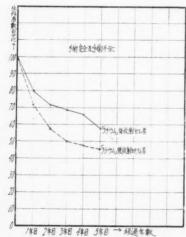
手術完全なりこ 思考せる者の内ラヂウム 後放射を行はなかつた 者は合計 149 名で其内 47 名は第一次死亡し、24 名は在所不明 で共に 爾後の經過を觀察し得なかつたので此等を除外するこ 残り 68 名こなり、その 内 5 年以上生

ラヂウム後放射の有無により分類したる生存者數表

	後考	~			뉙	-	15	53	67	12	53
	2.1				安		79.45	71.23	68.49	65.75	57.53
Ad	チで行	64		9	百五						
手術完全及手術不全	術後ラギウ. 放射を行ひ!				比生存者數百	73	528	52	90	48	42
全及	汝华						43	14	00	35	54
光	より後じ				东		71.43	57.14	50.00	47.32	45.54
手術	000	244	101	31	一世						
	術後ラギウム後放 射を行けざりこ者				生存者數百	112	80	64	56	50	51
					当		00	00	00	00	00
	ならい				安		84.00	68.00	64.00	64.00	60.00
<b>₩</b>	产	27		6.1	西西						
K	新後ラギウム後 放射を行びこ者				比生存者數	203	21	17	16	16	15
彩	後校に				式		94	35	53	65	17.65
100	ない				安		52.94	32.35	23.53	17.65	17.
100	まなっていまってい	95	54	-1	西 百						
	術後ラヂウム 射を行けざり				比生存者數百	34	18	11	00	9	9
	1						80	65	00	67	10
	ママン				子		77.08	72.92	70.83	66.67	56.25
<b>∜</b> H	并	62		4	数百			- 1			-
弘	衝後ラギウム後 放射を行ひし者				比生存者数百	48	37	300	34	65	27
銄	後を対が						49	95	54	60.26	69
100	なり	_		-	5.		79.49	67.95	61.54	60	57.69
11	されないない	149	47	45	数百						
	術後ラヂウム{ 新を行けざり				生存者數百	78	62	53	48	47	45
		*	t	噩		摇	7十二年	大学	九上:	7上	TY
		製	K	K		年未満	年上	年上	年上	年上	北下
		瓮	海	所		備後1 生存	循後1年以上 2年以內生存	術後2年以上 3年以內生存	備後3年以上 4年以內生存	術後4年以上 5年以內生存	術後5年以上 生存
		11	海	本		衛生	第2	後の	衛士	海の	衛士







存した者が 45 名 あるから 治癒 且つ無再發率は約 66 % こなる. 然るに一方手術は完全であつた が更に術後ラヂウム放射をした ものは總數 52 名で, 內 4 名は在 所不明こなり爾後經過觀察不能 であつたから残り 48 名こなり, 其の 內 27 名が 5 年以上生存 し たので 治癒且無再發率 は 56 % である.

即ちこれに依つて見るご吾人 が手術完全なりこ思考した例で

は術後ラギウムの放射は吾人の例では大した意義を有せなかつた、然し術後 ラギウム後放射をした例では3 ケ年、4 ケ年の生存者が比較的多かつたので これには注意を拂ふ必要があるのではなからうか。

手術は遂行したが吾人の滿足出來る程度でなかつた者は全部で122名, 内ラデウム後放射を行ふたものが27名で, 在所不明 こなつた2名を除けば25

名ミなる,その内 5 年以上生存者は 15 名で、治癒無再發率は 60 %である. 然るに一方で手術が吾人の滿足出來る程度でなかつた者で爾後ラヂウム後療 法を行ひ得なかつた者は總數 95 名、内術後死亡 54 名ミ在所不明ミなつた 7 名を除外し、殘り 34 名で、その内 5 ケ年以上の 生存者は 僅かに 6 名に過ぎ なかつた、即ち治癒無再發率は 17.6 %ミなる.

即ち手術が吾人の滿足出來ざる程度の際では爾後ラデウムの後放射を行つ た者ご其の儘に放置して置いた例ごの間に3倍以上の治癒率の差を見たので ある。

これミ手術の完全に行はれた場合に於けるラヂウム後放射の有無に大差なきこミを比較するミその間に驚くべき差異を見るものである。此等の點を考慮せば吾人の手術が滿足し得ざる程度であつたものには爾後是非共後放射の必要を獨り理論上のみならず,實際以上の結果にて其の真價を證明するものである。

# 第四章 本教室に於ける子宮癌根治手術絕對治癒率

# (1)手術可能率に就いて

手術能不能の決定には不確實な點がある。第一之れを決定する人によつて 異なるは勿論である。從つて同一教室でも之れを決定する個人によつて差異 がある。而して一方には之れを決定した人が手術をするこ定まつて居らな い、又手術可能なりこ思考したものでも實際手術を試みて而して不能に終る ここもあるので可能こ云ふ診斷には確實性が缺けて居る。其の不確實な數値 が延ては絕對治癒率を算定する事になるので從つて絕對治癒率の値も亦動搖 するに至るので同一教室ですら不確實の點があるので失々算定された値を他 の教室こ比較する等の事は全く意義なき事になる。

又年度により病勢進行の度に著しき差を見るもので同じ人が之れを決定しても年により患者に非常な差がある事は内外等しく認むる所である。それで同一人がこれを決定したこしても時期により差異があるので或年度に於ける 手術患者につき絕對治癒率を調査する時には其の年度の手術可能率を用ふる

本教室では緒方一人で手術の能,不能を判斷し,且つ子官癌の手術は終始一貫余1人でやつて居るので非常な變動はない筈である。又一般に認められて居るが如く近年其材料が著しく悪化した。然し手術可能の範圍は漸次廣められて居る,此の事は手術による剔出標本が其の事實を證明する,斯く病勢の進行せしものを手術して居るために此の手術を初めた頃に比し手術数を重ねるにつれ手術が次第に手に入る樣になるのは當然であるべきに拘らず第一次死亡率は反つて多少増加した,今假りに手術能,不能につきては次の四項を標準にした。

- 1) 癌腫患者に就き單に外診及び内診等の檢査のみにて手術能,不能を診 斷せるもの。
  - 2) 手術を試み實際手術可能なりしや否やを決定せるもの。
- 3) 手術を行ひ其上吾人が手術完全なりこ思考したもののみを手術可能であつたこし、他を全部不能なりし者こせるもの。
- 4) 1) 及び 2) の場合の手術可能率の相乗積をこりし者.

以上の内 2) の方法を採る場合當教室に於ては主まして有料患者で従つて 手術可能 こ思考せるものを選擇的に入院せしめ難く,患者の意により手術不 能の者も入院するのであるから之れにより手術可能率を算定するのは餘り大 なる誤りはない こ思はれるので此の場合の手術可能率をこつて絕對治癒率を 計算するこ次の如くになる。

(Ⅱ) 本教室に於ける子宮癌根治手術絕對治癒率

今5 筒年以上(根治手術後)生存した者を永久治癒者 5 見做し,一般に行は れる如く5年前迄の手術總數に就き考ふれば,

	手術を遂行せら者	手	衝	完	全	手	術	不	全
永久治療率	43.84	57.14					35	.00	
死亡率	29.77	23.38		23,38		43.44			

手術可能率=82.19((2)の方法による)

### ウィンテル氏式による絕對治癒率

手術を遂行せし者 36.06

手術完全なりしご思考する者 46.96

手術不完全なりご思考する者 28.77

### ワルドスタイン氏式による絕對治癒率

手術を遂行せし者 25.30

手術完全なりしご思考する者 35.98

手術不完全なりしご思考する者 16.27

# 第五章 子宮癌根治手術に用ひし麻酔法

	總數	術後2週間以内の死亡者	百分比
クロロホルム、エーテル吸 入麻痹のみによりも者	156	50	32.05
吸入麻酔と腰椎麻酔を併用 せし者	136	32	23.53
吸入麻酔と他の麻酔剤注射 を併用せじ者	33	7	21.21
腰椎麻酔と他の麻酔劑注射 を併用せも者	38	7	18.42
吸入麻酔と腰椎麻酔及び他 の麻酔剤注射を併用せら者	109	20	18.35
腰椎麻酔のみによりし者	100	16	16.00

明治 4年度では豫めシュナイデルリン氏液を注射し、其後ストバインの腰椎麻酔を行ひ之れでも尚ほ不充分な場合はクロロホルム補助吸入麻酔を行つた。

大正元年度及2年度では豫め「バントボン・スコボラミン 液を注射し之れに ストバインの腰椎麻酔を併用し、不充分の場合には更にクロロホルムの補助 吸入麻酔を行つた。 大正3年度では豫めシュナイデルリン氏液を注射しストバインの腰椎麻酔を行ひ、尚不充分の場合にはクロロホルム、エーテルの吸入麻酔で補つた。

大正 4 年度では豫めシュナイデルリン氏液又はバントポンを注射し、次でストバインの腰椎麻酔を併用し、尚不充分の時はクロロホルム、エーテル吸入麻酔を行つた。

大正5年度ではシュナイデルリン氏液或は「バントボン・スコポラミン」又は「ナルコポン・スコポラミン」を注射し、これにトロバコカイン(0.04瓦)の腰椎 麻酔を併用し、これにエーテル、クロロホルム補助吸入麻酔を施した。

大正7年度ではクロロホルム、エーテル吸入麻酔のみを使用した。

大正8年度及び9年度では豫め「ナルコポン・スコポラミン」を注射しクロロホルム、エーテル吸入麻酔を行つた。

大正 10, 11 年度ではトロバコカイン(0.05 瓦) で腰椎麻酔を行ひ, 不充分のこきにはクロロホルム, エーテルで補助吸入麻酔を施した.

大正 12 年度ではトロバコカイン $(0.05 \, \mathbbm{Z})$  で腰椎麻酔を行ひ,クロロホルム,エーテル補助吸入麻酔を行つた。

大正13年度ではクロロホルム、エーテル吸入麻酔のみミした。

大正 14 年度の前三分の一期,後三分の一期はクロロホルム, エーテル吸入 麻酔のみで中頃はトロバコカイン (0.05 瓦) の腰椎麻酔にバントボン, スコボラミンの注射を併用した。

大正 15 年度では大部分クロロホルム, エーテルの吸入麻酔のみを行ひ, 一部トロバコカイン (0.05 瓦) の腰椎麻酔を併用した.

昭和2年度ではスクロコカイン (0.5-2.0 廷) で腰椎麻醉を行ひ 吸入麻醉を以て補助し、後半期はトロバコカイン  $(0.05 \, \mathbb{Z})$  で腰椎麻醉のみこした。

昭和4年以後はトロバコカイン腰椎麻酔のみミし,其の量を0.06 瓦より多きは0.085 瓦, 筒0.09 瓦に及んだ者もある。これで 不足の場合はエーテルのみの吸入麻酔をオンプレダン吸入麻酔器で補助した,其内の一部は像めモルヒチ・アトロピン」を注射したものもあつた。

本教室では大體上記種々の麻酔法が試みられた。而して上表では不幸の例

が盡く麻醉法に關係ありこは思へない。何こなれば此の内の約四分の一が心 職衰弱によつた死亡例で、他は大多數創傷傳染によるものであり、麻醉の影響は主こして心臟自己にあるのであるから此等の關係は後章更に記載する。

後章剖檢例に就て記載するが一般に癌患者で病勢の進んだ者は勿論左程病勢の進んで居らない者でも心筋の變性を認めたものが多い,此等の例ではモルヒチ, スコボラミンの注射及びクロロホルムは非常に悪影響があつた三思はなければならぬ。從つて種々の臨床的檢査法により、心臟機能を檢し心筋の狀態を推察して豫めこれに備ふるは勿論なるも,殊に老人並びに多産婦では動脈硬化症等にも深く考慮を要し、之れに向ふて令より以上注意を拂ひ,場合に應じ夫々手術の範圍程度を伸縮せば勢手術不全なる例は其数を増すべきも,第一次死亡率は著しく低下し,爾後充分に後放射療法を應用せば治癒率の如きも亦恐らく上昇すべきものであらう。

#### 第六章 子宮癌根治手術に際する死亡例竝に剖檢例

#### (1)死亡例

大正 10 年より昭和 7 年末迄 の本教室 に於ける 癌手術後第一次死亡者 122 名に就いて其の死因を調査するに (内剖検例 39 例を含む)

1) 創傷傳染により死亡せりご思考せらる 3者 66名

2) 心臓衰弱により死亡せりご思考せらるゝ者 38名

3) 後出血により死亡せりご思考せらる」者 5名

其他腸狹窄 4 名, 尿毒症 3 名, 肺炎 2 名, 粟粒結核 2 名, 肺栓塞及び再發 1 例 こなる。

全死亡例の約半數は創傷傳染により約四分の一は心臟衰弱である.この關係は恰も次に述べる解剖例に於ける三同一であつて,臨床上吾人の推定した死因は左程誤りでなからう三思はれる.

今心臟衰弱により死亡したミ思考せらる x 38 例に就 きその 麻醉ミの關係 を調査するミ次の如くになる.

	自大正10年至昭 和7年癌手術に 用ひし麻酔例数	る第一次死亡	百分比
クロロホルム、エーテル吸入 麻酔のみによりし者	109	13	11.9
吸入麻酔と腰椎麻酔を併用せ し者	131	12	9.2
吸入麻酔叉は腰椎麻酔と他の 麻酔薬の注射を併用せら者	67	10	14.9
腰椎麻酔のみによりし者	100	3	3.0

次章に述べるが如く癌患者には心筋變性あるものが多く, 從つてクロロホルムの吸入麻醉は心臓に悪影響を及ぼすここは明かである。 尚ほ麻醉薬の量を減ずる目的で豫め他の麻醉薬即ちバントボンスコボラミン, バントボン又はモルヒチ, アトロピン等の注射を行ふご麻酔薬の量は明かに節約出來たがモルヒチの心臓に及ぼす影響によるものか、却つて心臓死の率が増加を示した。 腰椎麻醉 三吸入麻醉 三を併用した例では吸入麻酔薬の量は極めて少量で心臓死も亦少なくなつて居る, 更に單獨腰椎麻酔丈によつたものでは心臓死が僅か3%であつた。 勿論此等の死亡例には各、浸潤の程度も異なり, 手術の難易もあり, 又患者の衰弱, 悪疫質其他種々の關係があるので此等心臓衰弱による死亡全部が麻酔に原因したものこは思へないが, 麻酔法が必ず其間に重要なる影響を及ぼして居るには相違ない。

#### (Ⅱ)剖檢例

大正 10 年より昭和 7 年迄の死亡例中剖檢せる 40 例につきその死因を調査 するに其の内約半數は創傷傳染により、約四分の一は心臟衰弱によるもので ある。

今此等を表示するご次の如くになる.

以上40 例の剖檢屍體中15 例の動脈硬化を認めた. 分娩回數が5,6 回に及んで居るものには 毎常動脈硬化があり、49 歳 7 回 の經產婦は 萎縮腎を,49 歳8 回の經產婦に甲狀腺腫を,41 歳の不妊患者に淋巴腺體質を認めた.

年齢に比し子宮癌患者には剖檢上動脈硬變を認めた例多く, 叉血壓の高き ものが多かつた, 而して此の40例中12例は心臓衰弱の症症で死亡した。そ

### 1) 心臓衰弱による死亡例 (12 例)

番號	姓 名 (手術日)	年齡	分娩 囘數		診 断 (手術の 完否)	麻 醉 (手術所要時間)	心	藏所見	Ł
1	安〇ゥ〇 大正12年 6月16日	43	10	11日目	頸部癌	トロパコカイン 0.05 クロロホルム 22.0 エーテル 5.0	褐色	娄	剩
2	森〇キ〇 大正13年 6月26日	36	8	當日	腟部癌 未熟型 (完)	クロロホルム 6.0 エーテル (67分)	心第		禮引
3	池〇ツ〇 大正14年 6月13日	38	4	3 日日	膣部癌 未熟型 (完)	クロロホルム 13.0 エーテル 8.0 (37分)	心筋补大動穿孔	加脈	報
4	個○ツ○ 大正15年 6月3日	37	2	2 日 目	頸腟部癌 腺癌 (完)	クロロホルム 9.0 エーテル 70.0 (100分)	心筋补	易色多	<b>E</b> 絲
5	竹○こ○ 昭和2年 8月5日	47	12	當日	腟部癌 腺 癌 (完)	トロパコカイン 0.025 クロロホルム 5.0 エーテル 45.0 (67分)	心筋补心。全		
6	小〇季〇 昭和2年 3月19日	43	7	3 日日	隆部癌 未熟型 (完)	グロロホルム 9.0 エーテル 35.0 (43分)	心節		弘月
7	任〇マ〇 昭和3年 6月5日	38	4	當日	頸膣部癌 成熟型 (完)	スクロコカイン 0.1瓦 エーテル 40.0 (30分)	心筋补		
8	富〇ョ〇エ 昭和5年 10月6日	39	5	2 日日	膣部癌 未熟型 (不全)	グロロホルム 30.0 エーテル (105分)	心筋心室		温弘
9	長〇マ〇 昭和6年 6月29日	41	不妊	2 日 目	膣部癌 未成熟型 (完)	モルヒ子アトロピン トロパコカイン 0.075 エーテル 30.0 (2時間35分)	心室	撕	弘
10	南〇ジ〇 昭和6年 2月27日	48	5	8日日	頸部癌 成熟型 (完)	トロパコカロン 0.07 (1時間50分)	心節		厚張
11	渡○マ○ 昭和7年 11月4日	56	4	4 日目	頸腟部癌 成熟型 (不全)	トロパコカイン 0.08 エーテル 120.0 (2時間8分)	心筋室		大張
12	淺○フ○エ 昭和7年 5月25日	35	5	2 日日	頸腟部癌 (完)	トロパコカイン 0.085 クロロホルム 5.0 エーテル 50.0 (1時間55分)	心筋室		濁張

(死亡日は手術の日より起算、クロロホルム、エーテルは延、トロパコカイ) ンは虱を以て表はも腰麻に使用「モルヒチ・アトロピン」は衝前に注射せり

月	市臟所	見		肝臓	所見	L	腎臟所見				1	動脚	硬	遊	其の他の所見
肺鬱	氣		鬱萎			血縮	營			m	動	脈	硬	變	急性胃潰瘍,胃萎縮、ギンテリー性壊死性膀胱炎, 臍囊內沈渣形成
肺鬱	氣	腫血	脂	肪	浸	潤	慢	性臂	TE	首类					,
治療	質せる	結核	脂	В	)ĵ	肝	慢	性的	實質	1 类	動	脈	硬	變	癒著性肋膜炎、膽石, 腺 囊炎, 輪膽管擴張
荷き肺	· 結核 水	病竈	肝脂	楊允朋	色菱	縮潤					動	脈	硬	變	肋 膜 炎
肺鬱	氣	肺血血	褐	色	菱	縮	萎左維	<b>脊髓</b>	To	縮	動	脈	硬	變	甲狀腺腫, 全身浮腫, 胆萎縮
市	水	腫血血											Prince.		脾萎縮、右側に癒著性肋膜炎
		IfiL	柳	9	轉	移	鬱褐	色	娄	血縮	輕	変の	動型	<b>低硬</b>	脾萎縮, 鬱血
			溷			涸	溷			濁					膽石,後腹膜淋巴腺,腸骨淋巴腺に轉移
			脂	A)	lĵ	肝									胸腺體質
肺	水	腫													實質性甲狀腺腫,胃加答 兒
市	죏	腫									動	脈	硬	變	實質性甲狀腺腫
			涵			濁	溷			濁					

## 2) 傳染による

香咖	姓 名 (手術日)	年齡	分的	<sup>免</sup> 死亡[	1元省)	麻 (手術所要時	醉間)	腹腔所見
1	滿○ト○ 大正10年 12月3日	47	7	3 日日	隆部癌 腺細胞癌 (輸入血管)	クロロホルム (42分)	25.0	骨盤結締織勝軟化
2	谷 ○ ェ 大正10年 10月13日	46	7	10日日	膣部癌 成熟型 (不全)	クロロホルム エーテル (69分)	15.0 45.0	急性膿性炎
3	山○カ○ョ 大正10年 5月31日	34	1	11日日	頭膣部癌 成熟型 (完)	クロロホルム エーテル (76分)	18.0 45.0	骨盤腔瀰蔓性 出血 腐敗性軟化
4	上〇カ〇 大正11年 9月28日	41	2	14日日	腟部癌 未熟型 (完)	トロパコカイン クロロホルム エーテル (51分)	0.05 12.0 22.0	急性腹膜炎
5	內○□○ 大正11年 9月5日	34	6	5 日日	頸隆部癌 成熟型 (壁上部切) (監新のみ)	トロバコカイン クロロホルム エーテル (58分)	0.05 $12.0$ $22.0$	汎發性化腺性 腹膜炎
6	河〇ヒ〇 大正11年 7月20日	49	不妊	13日日	頭腟部癌 腺 癌 (略完全)	トロパコカイン クロロホルム エーテル (51分)	0.05 16.0 22.0	限局性腹膜炎
7	山〇キ〇エ 大正11年 4月6日	34	3	13日日	頸部癌 成熟型 (不全)	クロロホルム エーテル (68分)	28.0 32.0	汎 <b>發性化</b> 腺性 腹膜炎
8	市〇ヤ〇 大正12年 7月17日	43	2	12日日	腟部癌 未熟型 (不全)	トロバコカイン クロロホルム エーテル (50分)	0.05 17.0 20.0	
9	中〇ツ〇 大正12年 6月26日	39	6	9日日	頸膣部癌 未熟型 (完)	トロパコカイン クロロホルム エーテル (35分)	0.05 13.0 8.0	小骨盤膿瘍
10	松○≠○ 大正14年 7月2日	46	2	40日日	頸部癌 腺 頸 (完)	トロバコカイン クロロホルム エーテル (23分)	0.05 3.0 60.0	
1	魚〇ツ〇 大正14年 3月16日	37	2	人工流產當日	腟部癌 未熟型 (人工流) 産のみ)			化膿性腹膜炎
2	朝〇サ〇 大正15年 10月26日	40	流産 2回	3 日日	頸腟部癌 未熟型 (略;完)	クロロホルム エーテル (1時間25分)	10.0	全般性化膿性 腹膜炎

## 死亡例(25例)

心臟所見	肺臓所」	己	肝	議所	見	F	<b>肾</b> 腕	所!	l	重	加版	硬物	蓮	其他の所見
心筋脂肪性	變		ムスヌス	力肝	- 1	脂	側射形形	<b>腎水</b>	腫囊	動	脈	硬	變	化膿性膀胱炎、氣管 加答兒,慢性胃加答5
心筋脂肪	速水	腫				慢	性	腎	炎					膽石, 黃疸, 慢性胃放 答兒, 慢性氣管枝炎
右心室擴張 心筋脂肪變性 褐色 萎料	一下垂性肺	<b>次</b>	盲肋	万 浸	计准	轉汽性	移性膿瘍	<b>上</b> 栓	寒腫				1	右側肋膜炎、慢性加急 兒性膀胱炎、慢性胃加 答兒
		Ŋ	自肋	浸	潤	脂	Ali	變(	生	動(輕	脈	硬度	菱:	急性胃潰瘍,急性膀胱炎,蓐瘡
心筋脂肪變性 陽 色 萎 締 弘 室 擴 張	下垂性鬱	fn.	i Ili	縺	性	涵		1	-				-	<b>胃潰瘍,膽</b> 石
が 高 高 る の 高 の の の の の の の の の の の の の	氣 ル	重報	肪色	浸萎	潤縮	慢性	生實	質性	ŧ				4	全身黃疸
心筋褐色萎 宿	下垂性鬱血	1				貧血	性	栓第	177.				助人	農 <b>胸,</b> 脾萎縮,黴毒性 大動脈中膜炎
<b>唯</b> 者性心 <b></b> 周圍炎	氣 胴水 胴	脂褐	肪色	變萎	性縮	化膘	性	腎炎					育成	心膿性膀胱炎,右侧股 肺脈血栓,肺門腺,分 皮腺陳舊性結核,左侧 般性癒著性肋膜炎
が 筋 溷 濁 三心室肥厚 「心室擴張	鬱 血	施は			m	慢性	N.	質炎血	動	h Au	《 何	电化	性能	瘻、肺門腺結核癒著 助膜炎、脾鬱血、骨 質の纖維腫、膀胱加 兒
心室擴張	兩 肺 栓 塞 全般性癒著性 性纖維素性 心囊周圍炎				3	<b>肾</b> 炎、 大 大 十	右門	學上					膀	靜脈血栓,上矢狀竇 栓,腦內水腫,慢性 胱炎,甲狀腺囊腫形 ,傳染脾,脾周圍炎
淄		润脂	<b>用方</b> <sup>4</sup>	遊竹	蜀生	曼性	ĦI.	1类					轉般	移性卵巢癌, 左側全 癒著性肋膜炎
色萎縮	i m	脂	別方 ~	麦津	野朋	自動	變	濁性	動	脈	硬	變	癒	身鬱血、右側限局性 著性肋膜炎,慢性胃 答兒,脾萎縮

13	個 〇 ホ 昭和2年 5月3日	53	4	3 日 目	頸隆部癌 成熟型 (完)	トロパコカイン 0.025 クロロホルム 10.0 エーテル 60.0	
14	河○ト○昭和2年3月1日	38	7	96日目	頸腟部癌 成熟型 (不全)	クロロホルム 10.0 エーテル 45.0 (75分)	骨盤結締織膿瘍
15	石〇コ〇 昭和3年 12月14日	45	4	21日日	<b>腟</b> 部癌 成熟型 (完)	トロパコカイン 0.055 (56分)	腐敗性骨盤腹膜炎
16	島○ハ〇 昭和3年 10月10日	51	6	4 日日	頸腟部 成熟型 (完)	トロパコカイン 0.055 (46分)	骨盤腹膜炎
17	井○ク○ョ 昭和3年 7月21日	34	5	59日目	隆部癌 成熟型 (完)	トロバコカイン 0.05 (39分)	
18	杉 〇 善昭和 4 年 7月29日	45	5	18日目	<b>膣</b> 部癌 成熟型 (略完)	トロパコカイン 0.06 (65分)	汎發性纖維素 性腹膜炎
19	村〇ト〇 昭和4年 4月19日	39	6	7日目	膣部癌 未熟型 (完)	トロパコカイン 0.05 (47分)	汎 <b>發性腹膜炎</b> 骨盤腹膜の癌 腫性播種
20	大〇シ〇 昭和6年 9月30日	49	6	3 日日	頸腟部癌 成熟型 (完全)	トロパコカイン 0.07 エーテル 90.0 (2時間10分)	化膿性骨盤腹 膜炎
21	又〇マ〇 昭和6年 2月25日	39	4	6日日	隆部癌 成熟型 (不全)	モルピチ、アトロピン トロパコカイン 0.065 エーテル 少量 (80分)	汎發性化腺性 腹膜炎
22	重〇ト〇	48	8	60日目	隆部癌 未熟型 (完)	トロパコカイン 0,085 エーテル 130,0 (1 時間58分)	
23	岡〇シ〇ノ 昭和7年 3月14日	35	2	145日日	頸隆部癌 未熟型 (完)	トロパコカイン 0.075 エーテル 少量 (1時間50分)	播種性簡腹膜轉移
24	綾○梅○ 大正13年 9月24日	42	5	14日目	頸膣部癌 成熟型 (不全)	クロロホルム 17.0 エーテル 20.0 (48分)	限局性化膿性腹膜炎
25	飛○チ○ 大正12年 5月24日	64	3	9 日目	頸腟部癌 未熟型 (不全)	トロパコカイン 0.05 カロロホルム 28.0 エーテル 32.0 (50分)	穿孔性腹膜炎

兩心室擴張	表	核脂肪浸消	動脈硬變性萎縮腎,性質性質	生動脈硬變	右側限局性肋膜炎,胃糜爛
心筋脂肪 性褐色萎維 心兩室擴張	宿水 月	重 重脂 肪 浸 泥	化膿性腎証 数 左臀の血料	動脈硬變	下腹, 陰部靜脈血栓, 胃腸加答兒, 體腔水腫
心筋脂肪沙 著 兩心室擴張 卵圓孔開放	右侧栓》	ムスカートマス肝	慢性實質夠		右側股靜脈血栓,義膜 性膀胱炎,全身水腫, 舌糜爛
兩心室擴張 褐色萎縮	管加	1褐色萎絲	in the second		限局性癒著性肋膜炎
	氣管枝肺炎 水 肺鬱 血	褐色萎縮 一個一個 一個 一個 一個 一個 一個 一個 一個 一個 一個 一個 一個 一	肾 盂 炭肾 蛋 炭		化膿性膀胱炎
			腎 膿 瘍	動脈硬變	右侧肋膜炎,鵩水腫
心囊內臟葉 出血 心筋 溷 濁 褐 色 萎 縮	分葉性肺炎	溷 濁	溷 濁		義膜性膀胱加答兒、肋 膜出血、脾褐色萎縮
兩心室擴張	•			動脈硬變	
心筋溷濁					
兩心室肥大	下垂性肺炎		轉移性腎膿瘍	動脈硬變	右侧癒著性肋膜炎,尿 毒病性大腸潰瘍
		癌腫轉移	上昇性腎膿	動脈硬化(輕度)	
兩心室擴張	兩肺嚥下性 肺炎, 氣腫	脂肪變性		大動脈脂肪斑竹	卑褐色萎縮, 左側癒著 生肋膜炎, 手術創化膿
心筋褐色萎縮 浴室擴張肥。	鬱 血水 腫	褐色萎縮脂肪變性		動脈硬度	十二指腸潰瘍, 脾萎縮, 慢性加答兒性膀胱浮腫

3) 其他の原因による

番號	姓 名(手術日)	年齡	分娩 囘數	死τ	LB	診 断 (手術完否)	麻 (手術	醉 所要時間)	腹腔所見
1	佐〇ョ〇 大正10年 11月1日	36	6	3 %	ナ月	堅 部 癌型 が (妊娠10ケ月 が エーロー氏) 手術のみ	クロロホ	ルム 30.( 47分)	の癌腫の播種性 腹膜轉移
2	隅〇サ〇 大正13年 11月29日	33	4	雪田	H	頸腟部癌 成 熟 型 (完)	) II // I	カイン 0.08 43分)	腹腔內出血
3	外○ス○ 昭和7年 10月28日	32	不妊	當	H	頸膣部癌 未 熟 型 (不全)	モルヒチ	カイン 0.085 アトロピン 時間)	

の剖檢所見には每常特別の病變を見ず,單に心臟兩心室の擴張 こ心筋の脂肪 變性,褐色萎縮を見るのみである,此れはウェルトハイムの心臟衰弱による 死亡例の剖檢所見 こ同様である。氏の死亡例の約半數は創傷傳染で全死亡數 の四分の一が心臟衰弱による死亡である。これは本教室に於ける死亡例の比 係三全く一致する。

尚ほ吸入麻酔薬を節約する目的で豫めモルヒチ,アトロヒチを注射した例では吸入麻酔薬の量は減少したが却つて悪い結果を見た様である.

病勢の進行して居る例では常に術前に實支答利斯を 0.2 瓦位づつ用ひて脈搏の性質のよくなるのを待ちて手術して居るが、特にこれによつて好結果が表はれる程ではなかつたが術前像め實支答利斯が何かの都合で與へられなかった例では偶然かも知れないが心臓衰弱に接した例が多かつた様である。 これも真に心筋變性のあるものは效を奏せないのは勿論である。

本教室に於ては心臓疾患には心筋の狀態を察知するために常にエレクトロカルデオグラムで檢して居るが子宮癌患者の心筋檢査は現在迄では例數が少ないので彼是論評するここは出來ないが充分材料が集まれば自然正當な見解がつくこここ思ふ。

京都帝大婦人科教室では癌疾患者の心筋衰弱の診斷に就き大略次の通り發表されて居る。

エレクトロカルヂオグラムで R.T. の棘が其年齢に不相應に低く且つSの

死亡例(3例)

3	心臟	<b>・臓</b> 所見 肺臓所見		L	J.	开联	F臟所見		腎臓所見		動脈硬變	其他の所見		見						
心心	室福	擴 色萎	張縮	氣加	答兒	性加	腫炎	褐脂	色肪	萎浸	縮潤	水			腫			英炎		胃腸
ů ů	筋室	溷擴	濁張	御	m.	水	腫	溷			濁	溷脂	肪	變	濁性		全	身	浮	腫
	筋心含	溷	濁張					溷			濁	涵			濁	•	內脈血(	<b>说一</b>	般性貧	()

棘の形が V字型を取るものを心筋衰弱ミし、Q.R.S.T. 棘の形が變り特に丁 棘が轉倒して Sが V字型をなしたものを心筋變性ミし、之れを基礎ミして檢 査した成績では手術可能の子宮癌患者中健康心臟 ミ思考されたのが 40 %, 心 筋衰弱が 27 %, 心筋變性 12 %で、手術不能の患者では健康心臟が 29 %, 心 筋衰弱が 42 %, 心筋變性 17 %であつた。

以上の如く手術可能の例にて其の内12%に心筋變性があれば癌の手術に對し最小限度に12%は危險率が餘程高いものミ見なければならぬ,心筋衰弱の程度では適當なる實菱答利斯の投與で心臟衰弱による危險を或程度は防ぎ得るものであるが實際心筋變性が確實であれば之れには餘程危險が伴ふここを豫め覺悟せなければならぬ,又萎縮腎,動脈硬化症には極度の注意を拂ふ必要がある,數回日を異にした計測成績で血壓200粍以上であれば萎縮腎に注意せなければならぬ,血壓の高いあのには豫めカルシューム等を與へて血壓の下降を認めた時手術を行ふ事が安全である,苟も心筋變性が推測せられたる場合にはモルヒチ,アトロヒチ類の注射は之を避くべきものである,手術可能の例でも此等患者が50歳を越えて居る樣なこきには放射療法による方が完全であるが,さなくば多少姑息的でも操作を可及的簡單にし,手術時間の短縮を計り後で放射を行ふべきものこ思ふ。もし患者が5,60歳に近いこ云ふ位で且つ數回の分娩を經過したものであれば臨床上確定出來ないにしても動脈硬化に考慮せなければならぬので血壓の關係萎縮腎の合併等を檢

査し、傍らエレクトロカルヂラグラムにより心筋の狀態を精査して荷も心筋 に變性の徴を見たならば癌の根治的手術に對しては豫め危險率が甚だ高いこ 想像し、自己在來の經驗により其處置に就ては充分に考慮し其の危險の程度 の大なるを推定し、場合によりては 姑息的處置 も亦止 むを得 ざるものでら

50 歳以上の者にあつては大なる 危険を犯して 根治手術 によらんより是に 2,3年にても其生命を延すここに努力すべきものであらう.

前章に述べたるが如く本教室では手術が完全であつたご記載してある例で は術後放射したものごせないものごの間に永久治癒を得て居る率は全く同數 であるが、手術が不完全であつた例では術後放射したものご其儘に放置した ものごの間に永久治癒率に大差がある、それでもし以上述べた樣に心筋變性 を推定し得た者には手術の完全を期し危險率を高らしめるより寧ろ手術完全 の率は低下しても手術直接の危險を避け不全の所は放射で補ふも相當の成績 には達するものご思ふ、殊に老人では手術の危險率は多いが放射療法の效果 を見るここも亦多い事には注意を拂ふべきこごである。

## 第七章 子宮癌患者の手術前後に於ける血清蛋白膠樣狀態

之れは本教室にて岡田啓吾の研究によつた成績である,先づ健康非妊婦に就き血清蛋白膠様狀態を調査し,次で本教室で組織的に確診した子宮癌患者に就き手術前に血清蛋白膠様狀態を調査し,次で術後更に其の調査を反復して、術前の狀態ミ比較し,以て術後の經過ミの間の關係を觀察したものである,

元來血清の各蛋白體を完全に分離するここは現今尚甚だ難事であるので同一の方法で檢查する事にし、此の方法に充分熟練する事に努め之れで此の成績を比較する事に留めなければならぬ、岡田氏ハブルフリッヒの屈折率計を用ひ、スイス氏の表により算出する法即ちロバートソン氏法を用ひた、フイブリノーゲンの定量に Lendertz Glomelski の法を用ひた。

先づ臨床上健康なり こ思考せる非妊婦の 10 名に就き検査 せる 成績は下の

通り.

平均値年齢は17歳より32歳迄

非蛋白體	1.470	アルブミン	5.519
グロブリン	2.316	オイグロブリン	0.219
フィブリノーゲン	0.163	總蛋白量	7.654
アルブミンミグロフ	プリンの比A	2,604	

余が根治手術可能なりこせる患者 48 名につき 豫め 手術前血清蛋白膠様狀態を檢し、次で根治手術を行ひ、術後下記の期日に再檢査を施し、其の成績を比較すれば下の表の通りである。

手術可能なりし子宮癌患者血清蛋白膠様狀態 48 例

香號	姓名		手術日 後		アルブミン	グロブリン	オイグロブリン	フィブリケン	總蛋白 自量	A G
1	中〇ツ〇	49	23/IX 21日	1.35 1.39	$\frac{5.24}{6.02}$	$\frac{3.45}{2.87}$	$0.26 \\ 0.25$	$0.32 \\ 0.28$	8.69	$\frac{1.52}{2.10}$
2	植〇キ〇	49	7/X 16日	1.30 1.44	4.04 4.62	3,34 2,24	$0.57 \\ 0.41$	$0.52 \\ 0.43$	7.38 6.89	$\frac{1.21}{2.06}$
3	安つッ〇	43	9/X 14日	1.35 1.44	5.90 4.87	2,30 2,69	$0.28 \\ 0.46$	$0.34 \\ 0.43$	8.20 7.56	2.56 1.81
4	兒〇萬〇	48	9/X 17日	1.76 1.73	5.07 4.24	2.84 3.09	$0.32 \\ 0.34$	$0.24 \\ 0.34$	7.91 7.33	1.79 1.37 化膿
5	島○シ○	45	15/X 19日	1.68 1.49	$5.34 \\ 5.52$	$\frac{2.30}{2.13}$	$0.34 \\ 0.34$	$0.28 \\ 0.22$	7.64 7.65	$\frac{2.32}{2.59}$
6	小〇1〇	45	10/X 21 H	1.44 1.68	4.67 5.34	$\frac{2.58}{2.12}$	0.57 0.39	$0.37 \\ 0.28$	7.25 7.25	$\frac{1.81}{2.58}$
7	井つト〇	45	5/XI 28日目	1.30 1.44	4.97 5.24	2.33 1.93	0.27	$0.39 \\ 0.28$	6.30 7.17	2.13 2.71
8	森〇〇	39	16/XI 26日	1.39 1.68	5.35 5.85	$\frac{2.40}{2.32}$	0.26 0.33	$0.24 \\ 0.45$	7.75 8.17	$\frac{2.23}{2.52}$
9	佐○サ○	57	25/XI 3 日目	1.98 (27/XI)死亡	4.69	3.50	0.14	0.37	8.19	1.34
0	瀧〇〇	45	13/XI 24日	1.49 1.76	3.72 3.97	3.38 2.27	0.41 0.34	0.37 0.24	7.10 6.24	1.10 1.75 化膿
1	芳〇ミ〇	57	20/XI 23日	1.44 1.49	5.29 4.38	$\frac{2.56}{2.33}$	0.37 0.39	$\substack{0.47\\0.37}$	7.85 6.71	2.07 1.88
2	大〇ゥ〇	45	18/XI 25日	1.49 1.49	4:46 4.94	$\frac{2.16}{2.04}$	$0.27 \\ 0.25$	$\begin{smallmatrix}0.24\\0.26\end{smallmatrix}$	6.62 6.98	$\frac{2.06}{2.42}$
3	石〇房〇	39	30/XI 21 H	1.54 1.49	4.73 4.31	2.86 2.13	0.39 0.27	0.28	7.59 6.44	$\frac{1.65}{2.02}$

14	池〇久	0	45		1.54	3.5					2.12 1.24 膀胱腟瘻
15	鎌()フ(	0	36	19/XI 27日	1.54	3.66					1.17 1.84
16	森〇キ	)	39	13/I 20日	1.73 1.54	5.49					2.27 2.31
17	有○カ(	)	12	17日	1.39 1.44	4.96				7.15 6.57	2.26 2.03
18	瀧〇ト〇	) 4	18	27/I 15日	1.39 1.44	5.21 4.43			0.45	7.87 6.97	1.96 1.74 化膿
19	北〇〇	) [3	33	5/I 22日	1.44 1.54	5.57 5.35			0.28	8.54 7.86	1.88
20	大〇8〇	4	6	12/II 2日日	1.34 (24/II) 死亡	3.74	3.68	0.64	0.48	7.42	1.02
21	岡〇ト〇	3	5	14/四 14日	1.44 1.44	5.32 5.57	2.84 2.33	0.39	0.33	8.07	1.84 2.39
22	長○サ○	4	4	23/I 19日	1.30 1.49	4.37 5.45	2.71 2.78	0.39	0.26	7.08	1.61 1.96
23	川〇盆〇	3		16/V 20日	1.25 1.30	4.49 4.04	3.32 2.80	0.37	0.45 0.41	7.81 6.84	1.35 1.44 化膿
24	岡() 1-()	38		18/V 17 自	1.39 1.35	5.42 4.31	2.41 2.22	0.37	0.28	7.83 6.53	2.25
25	勝○タカ	4		23/V 23日	1.35 1.44	$\frac{4.57}{5.20}$	2.85 1.91	0.42	$0.34 \\ 0.22$	7.40 7.11	1.60 2.72
26	後〇つ〇	36		25/V 日日	1.30 (27/V) 死亡	5.54	2.96	0.34	0.32	8.50	1.87
27	奥○マ○	52		30/V 24日	1.49 1.44	4.87 5.80	2.19 2.26	0.32	0.32	7.06	2.22
28	黒O t O	53		B/VI 當日	1.20(3/Ⅵ) 死亡	5.38	2.87	0.48	0.39	8.25	1.87
39	船つすつ	35		5/VI 6日	1.25 1.30	5.64 5.32	1.96 2.01	0.26	0.22	7.60 7.33	2.87 2.60
30	真〇マ〇	45		4/VI 1日	1.39 1.39	4.65 4.58	2.67 2.26	0.35	0.41	7.32	1.74 2.03
1 3	売○克○	26		7/VI 日日 (	12.5 28/VI)死亡	4.35	2.52	0.53	0.39	6.87	1.73
2 2	FO#0	39		9/VI 3日	$\frac{1.25}{1.25}$	5.51 5.06	2.38 2.27	0.48	0.34	7.89 7.33	2.32
3 1	1070	48		7 H	1.39 1.42	4.48 5.53	2.84 2.28	0.42	0.39	7.32 7.81	1.58 2.43 化膿
4 桁	有○靜○	28		S/VII	1.41	4.80 5.38	2.63 2.27			7.43	1.83
村村	OBOZ	40		VM H	1.35 1.35	5.21 5.61					2.17 2.71

36	西〇マ〇ヱ	44	1/IX 35日	1.44	5.44 5.43	2.29	$\begin{vmatrix} 0.32 \\ 0.23 \end{vmatrix}$	0.30	7.73 7.57	$\frac{2.38}{2.54}$
37	出○フク	46	6/IX 50日	1.44 1.49	3.83 4.10	$\frac{3.02}{2.43}$	$0.42 \\ 0.24$	$0.39 \\ 0.27$	6.86 6.53	1.28 1.69
38	渡○チ○	45	10/IX 48日	1.44 1.39	3.66 4.48	3.32 2.73	0.42 0.36	0.43 0.43	6.98 7.21	1.10 1.64 尿瘻
39	湯○フ○ヱ	42	22/IX 當日	1.44 (空/IX)死亡	4.23	2.81	0.39	0.39	7.04	1.51
40	岡〇玉〇	36	24/IX 35日	1.49 1.44	$\frac{4.27}{4.97}$	3.08 2.29	$0.45 \\ 0.36$	0.39	7.35 7.26	1.39 2.17
41	高〇八〇	43	11/X 40日	1.35 1.49	2.87 3.67	3,96 2,38	0.34 0.39	0.41 0.37	6.83 6.05	0.72 1.54 化膿
12	自○靜○	33	12/X 42日	1.30 1.39	$\substack{4.72\\5.71}$	$\frac{3.02}{2.10}$	$0.37 \\ 0.26$	$0.39 \\ 0.26$	7.74 7.81	$\frac{1.56}{2.72}$
13	外○2○	32	28/X 當日	1.44 (28/X) 死亡	3.67	3.47	3.09	0.41	7.16	1.05
14	村○と○	2/XI	2/XI 43日	1.39 1.49	4.96 4.94	2.22 1.91	$\frac{0.32}{0.38}$	$0.24 \\ 0.35$	7.18 5.85	$\frac{2.23}{2.59}$
15	生〇ミ〇ノ		2/XI 43日	1.39	5.05	2.77	0.37	0.30	7.82	1.82
16	波〇マ〇	56	4/XI 3 日目	1.35 (7/XI) 死亡	4.09	4.12	0.39	0.42	8.21	0.99
17	高〇シ〇	52	16/XI 41日	1.39 1.44	3.56 4.61	4.06 2.78	0.40 0.37	0.50 0.39	7.62 7.39	0.99 1.66 尿瘻
18	太〇マ〇	42	18/XI 40 ∏	1.35 1.39	$\frac{5.24}{5.04}$	$\frac{3.35}{2.49}$	$0.27 \\ 0.29$	0.30	8.59 7.53	$\frac{1.56}{2.02}$

今之れを夫々健康非妊婦の平均値に比較して見るに非蛋白體は健康非妊婦 1.47%に對し1.419%で,總蛋白量が健康非妊婦の7.654%に對し,癌患者 では7.581%であるから其間に著しい差異 はないがオイグロブリンは0.219%に對し,癌患者では0.374%てフィブリノーゲンは0.163%に對し0.354%で敦れも増加して居り,更に $\frac{A}{G}$ の關係は2.604に對し癌患者では1.748を示し,其の比率の著しき低下を認めた.

全例を通じてフィブリノーゲンの増量が著しく、術後死亡した例では 概ねアルブミンの減少が著しいオイグロブリンも概して増量してるる。  $\frac{A}{G}$ の關係を見るに二、三例が平均値又は平均値に近接して居るに過ぎない、他は其の率が著しく低い、殊に術後死の轉歸を取りて居るものを見るに 1.34 (3 日目死亡)、1.02 (12 日死亡)、1.87 (3 日目死亡)、1.87 (常日死亡)、1.73 (3 日目死亡)、1.88 (常日死亡)、1.73 (3 日日死亡)、1.88 (第日死亡)、1.88 (第日死亡) (1.88) (1

死亡)。1.51(當日死亡), 1.05(當日死亡), 0.99(3日目死亡)。

鎌後不良なりし8例ミ**豫後良好な**りし40例につき血清蛋白膠镁狀態の關係を比較するに

		アルブミン	プロブ リン	オイグロブリン	フィブ リノー ゲン	總蛋白量	A G
豫後良	40例	4.792	2.765	0.960	0.945	7.556	1.813
死の轉歸	8例	4.461	3.244	0.446	0.396	7.705	1.423
健康者平	均值	5.519	2.196	0.219	0.163	7.654	2.604

死の轉歸を取りた者ではアルブミンの減量が著しくグロブリン、オイグロブリン、フィブリノーゲンの増量が著しいが、殊にオイグロブリン、フィブリノーゲンの増量は倍量以上になり $\frac{A}{G}$ も比率が約 $\frac{1}{2}$ 近くなりて居る、各例につき精査するにかく豫後の不良なりし例では微小散相より粗大散相側に移動が顯著である、此の關係は全例を通じて比率が低下に就き其の限界を定め難きは勿論なるも比率の低下につれ危險率を増す、即ち生體の抗抵力の減少を來すもので手術に際し一層戒を要すべきものこ思考せなければならぬ。

次に病症の程度で區別して見るに

		非蛋白體	アルプミン	プロブ リン	オイグロブリン	フィブ リノー ゲン	總蛋 白量	AG
軸亞	症 9例	1.473	4.981	2.451	0.942	0.329	7.438	2.106
重	症 39例	1.406	4.681	2.935	0.382	0.959	7,613	1.665
手-初	所不能とせじもの 6例	1.493	4.290	2.702	0.445	0.342	6.990	1.623

上表を見るミ明かに軽症重症及び手術後不幸の轉歸を取りし者ミの間に其の消息を示して居る,即ち死の轉歸を取りし者にては血清蛋白膠樣狀態が租大散相移動の度が最も顯著で吾人が手術不能ミせる例次で手術を遂行せる重症例の順を示し終りに手術容易なりし軽症例ミなり著しく健康非妊婦血清蛋白膠狀態の値へ近接を示せて居る獨り此の關係よけでは手術に對する豫後の決定並びに手術の危險の標識ミはなし難いかも知れないが之れより吾人臨床家には確かに一定の指南である。

術後アルブミンごグロブリンごの比率が吾人が健康非妊婦にて是たるAの値に近づく狀況を見るに上表 48 例中 8 例は術後死亡して居るので残り 40 名

は第一治癒を見た,而して其の内の 17 例は 40%は術後 14-43 日の間に略ぼ健康非妊婦に於ける  $\frac{A}{G}$ の値 = なりて居る,かく膠様狀態の粗大散相より生理的狀態に歸復するに其の期間に大差がある,之れ元より未だ精細なる檢査でないので大體の見常を得るに過ぎない。

残の60%は尚ほ回復して居らぬが今述べた通り檢査の期日が一定して居らないので残り總でが此の期間内に回復せなかつたの意味でない。

- (1) 島 $\odot$  し $\bigcirc$ , 45 歳,腟部癌 (扁平上皮癌),榮養住良,骨盤結締織の浸潤 軽度, $\frac{A}{G}$ は初め 2.32 で術後 19 日目には $\frac{A}{G}$  こなつた.
- (2)小 $\bigcirc$ い $\bigcirc$ 、45 歲,頸腟部癌 (扁平上皮癌),榮養中等,子宮は後方腸管に癒着頸部は膀胱は癒着し,兩側骨盤結絡織高度に浸潤右輪尿管埋没し,淋巴腺の腫大せるもの數個,初め $\frac{A}{G}$ =1.81 なりしものが 術後 21 日目には $\frac{A}{G}$ は 2.52 ミなつた・
- (3) 井○ミ○, 45 歳,腟部癌(類癌),榮養中等,貧血兩側の卵巢及び輪卵管は子宮の後壁に癒着,左側骨盤結締織浸潤高度淋巴腺小鷄卵大腫大,輪尿管埋沒,右側浸潤輕度,術前A2.13,術後 28 にてA2.71.
- (4)森 $\bigcirc$  $\bigcirc$ , 39 歲, 腟部 $\stackrel{\cdot}{E}$ (扁平上皮 $\stackrel{\cdot}{E}$ ),榮養不良,兩側骨盤結締織浸潤輕度,淋巴腺數け腫大,術前 $\stackrel{\cdot}{C}$ 2.23,術後 26  $\stackrel{\cdot}{E}$  2.52
- (5)大○う○, 45 歳、腟部癌 (扁平上皮癌), 榮養可, 子宮稍、大骨盤結締 織僅かに浸潤, 淋巴腺腫大せず, 術前 △2.06, 術後 25 日目 △2.42.
- (6)森○き○, 39 歳, 頸腟部癌 (腺癌), 榮養可, 骨盤結絡織浸潤軽度, 膀胱 Ξ軽度に癒着淋巴腺腫大せず, 術前 €2.27, 術後 20 日 €2.31.
- (8) 勝 $\odot$ た $\odot$ , 45 歲. 頸部癌 (扁平上皮癌),榮養中,骨盤結絡織兩側浸潤高度,左側輪尿管其內に埋沒,淋巴腺大豆大より蠶豆大腫大,左側輪卵管水腫形成大網膜及び腸管  $\Xi$  衛前 $\frac{A}{G}$ 1.60, 術後 23 日 $\frac{A}{G}$ 2.72  $\Xi$  なる.
- (9) 奥○ま○,52 歲,頸腟部癌(扁平上皮癌),榮養中,子宮萎縮,右側は膀胱ミ癒着,骨盤結締織浸潤比較的輕度,淋巴腺右2個,左1個腫大,術前

 $\frac{A}{G}$ 2.22, 術後 24 日 $\frac{A}{G}$ 2.56.

- (10)中 $\bigcirc$ ふ $\bigcirc$ ,48 歳。腟部癌 (扁平上皮瘤),榮養中,骨盤腹膜肥厚,兩側殊に左側骨盤結締織高度に浸潤し輸尿管其內に埋沒,腸骨腺及び骨盤腫大,術前 $\frac{A}{G}$ 1.58, 術後 47 日目 $\frac{A}{G}$ 2.43,經過中に創傷化膿す。
- (11) 楠〇靜〇, 28 歳, 腟部癌 (扁平上皮癌), 榮養可, 子宮頸部ミ膀胱ミ高度に癒着し左側骨盤結締織浸潤中等, 輸尿管其内に埋没, 淋巴腺は兩側共小指頭大各 1 個, 術前 A 18.3, 術後 42 日 A 2.37.
- (12)村 $\bigcirc$ よ $\bigcirc$ る。40 歳,腟部癌(扁平上皮癌),榮養中,左側骨盤結締織浸潤中等,下腹腺 2 個,骨盤淋巴腺 1 個 拇指頭大腫大,右側骨盤淋巴腺小指頭大 1 個腫大,術前 $\frac{A}{G}$ 2.17,術後 40 日 $\frac{A}{G}$ 2.71 こなれり。
- (13) 西〇ま〇ゑ, 44 歳。腟部瘤(腺瘤),榮養可,兩側骨盤結締織輕度に浸潤,輸尿管其内に埋没,右骨盤淋巴腺小指頭大腫大,術前 $\frac{A}{G}$ 2.38, 術後 35 日 目 $\frac{A}{G}$ 2.54  $\Xi$  なる。
- (14) 間○王○, 36 歳, 腟部癌 (扁平上皮癌), 榮養可, 大網膜は子宮 ミ癒着, 兩側骨盤結締織輕度に浸潤, 左側淋巴腺拇指大に腫大せるもの 2 個, 術前 A 1.39, 術後 35 日目 2.17.
- (15) 白 $\bigcirc$  靜 $\bigcirc$  , 33 歲, 脏部虧(扁平上皮癌),榮養中,兩側骨盤結締織高度に浸潤,左側骨盤淋巴腺拇指頭大に腫大せるもの 1 個,術前 $\frac{A}{G}$ 1.56,術後 42 日日 $\frac{A}{G}$ 2.72.
- (17) 生 $\bigcirc$  み $\bigcirc$  の,32 歳,腟部癌 (扁平上皮癌),榮養中,頸部は膀胱ミ中等度に癒着兩側殊に左側骨盤結締織高度に浸潤し,輸尿管埋沒,淋巴腺の腫大せるもの右小指頭大,左拇指頭大1個,術前 $\frac{A}{G}$ 1.82,術後 43 日 $\frac{A}{G}$ 2.69.

以上の例を通覽するに術前にアルブミン,グロブリンの比率の低下著しからざるものにありては術後 (A)値の高昇速かなるが如きも强ち多數の例に同様の型をたごるものこも限らず、比率の低下著しき者ありても比較的短時日にて正常こ思考すべき値を示すに至るものあり、爾後多數の例につき種々の條

項を考慮するにあらざれば此れに説明を加へる事は困難であるが兎に角手術 不完全であり、且つ術後の經過が順調であれば約3週日も經過せば略々正常 値に復するものご思はれる。

## 第八章 本教室の子宮癌治療現況

・以上各章に亙り述べたる事項中手術に關し現今本教室に於て行ひつゝある 子宮癌腫の治療方針は大略次の如く總括し得るものである。

即手術に先立ち詳細なる全般的診察並びに諸檢査を行ひ、且エレクトロカルデオグラムによつて心筋の狀態を檢し、傍ら血清中のグロブリン、アルブミンの比を測定し種々の檢査の結果こ在來の經驗こを考慮し、患者が根治手術に堪へ得るや否やを決定し、手術可能なりこ思考せる例にあつては殆んご總ての場合手術數日前よりデギタリス葉0.2—0.3 瓦位を浸劑 こして投與し傍ら5%葡萄糖、リンゲル氏液300 延を毎日又は隔日皮下注入し脈搏の良好こなつた際に手術を行ふ。

手術に際してに患者の年齢,病勢進行の度により,もし高年のものにありては手術の廣汎度を限局し時間の短縮ミ延ては患者に對する手術による負擔の軽減に力め場合によりては腟式手術を行ひて爾後レントゲン又はラヂウム後放射に,或は兩者の併用により治癒目的の到達に努めて居る。

吾人が手術可能なりご推定し得たものには手術の完全を期して極めて廣汎 性に手術を行ふ事は論を俟たない。 其他術後後放射を許さざる事情あるもの は止むを得す手術は可及的廣汎性に行ふて居る。

手術式は特に術後の創傷傳染を豫防する事に注意し、**腟腔は豫めカルボール石鹼及びリブール水にて洗滌する**は勿論骨盤結締織**分雕後腟管を切断する**に先立ち更に再び沃度丁幾及びアルコホルを塗布し、次で乾燥滅菌ガーゼにて清拭し、之より腟管の可及的深部にて直角に曲れる鉗子を兩側より掛けて

庭管を閉鎖し、更に他の鉗子を掛けて腟の上部にて腟管を以て子宮腟部を包被し腟の下部にかけたる鉗子の上縁に沿ひ電氣メス又は刀にて腟管を切断し幅度きガーゼ約4乃至9米を固定栓塞しその一端を腟より出し、一は止血の完全を期し傍ら骨盤腟内の創傷分泌物を吸收せしめ手術後3日目頃より徐々にガーゼを除去し約1週間にて全部を拔き終る。

手術による剔出標本は正中線にて切割し、腫瘍の各部に亙る組織切片を作成して顯微鏡的檢査を行ひ、1%のフェルマリン液中に逐次番號を附して保存し、後來の研究に責す。

斯くして保存せらる x 本教室の 癌腫標本番號は現在 (昭和8年3月末日) 750 號に達し、卵巣癌、悪性絨毛上皮腫、其の他の悪性腫瘍を 合すれば 802 を算す。

此等患者の姓名,住所其の他は癌腫患者原薄に一々記載し,每年1 回父は2 回書狀によりその健否,再發の有無を返事せしめ,或は來院を求めて再發を成るべく早期に發見する事に努めて居る.

## 子宮癌組織の新陳代謝に就て(豫報)

# 緒 方 十右衞門 吉 松 信 寶

E. Fischer は葡萄糖は或變化を受くれば其の安定を缺く事を豫言せり.

葡萄糖には周知の如く a,  $\beta$  の二型あり,而して如上の變化を受けしもの を  $\gamma$ -Zucker こ名づけたり。Neuberg 氏は之れを特に Am-Zucker こ名づけたり。其他 Aktive Zucker,Heterogene Zucker 等幾多の研究家が種々の命名の下に其の存在を認むるこも其の本態を知るを得ざりき。

今往昔 Fischer の豫言せる或變化ミは 何處如何 なる所にて如何なる變化 を受くるものなるかは疑問の的ミせられしが何人も生體の細胞を除外しては 其の生成の場所を假想し得す。

古武氏は眼房水中より既知の糖ミは少しく其の趣を異にし其の法則に從ひ難き或種の物質を發見し、而もこれは六單糖の反應を與ふる極めて不安定にして Winter の所謂フラノーゼに類するものなるここを知り、これをビタモーゼニ命名せり、此のものは Vitamin C ならびにアスコルビン酸等三近似の關係に立つものならんこ想像せり、何れにしても含水炭素が分解の途にあるここは最早や疑を容れず、而も此物は沃度酸の Kältewert を與ふるここを知り既知の糖より異なれる方法にて其約量を定め得こせり、然れごもグルタチオンこの分離定量困難なり。

癌組織中に證するグルタチオンに就ては Hopkins 以來其の量的關係は研究者によりて一致せず、即ちグルタチオンの量的關係を以て癌組織に或意義を附するここに大なる疑義を存す。即ち玆に不安定なるX物質の存在するありてグルタチオン定量に斯くも誤差を生ぜしむるものならんか。

吾人は先づ子宮癌組織の 滲出液より 蛋白を除外 しグルタチォンを 檢せし に、しかく大量に存するものこは認められず、尚ほ該浸出液の Folin-denis の反應を强度に與ふるここを認めたり、弦に於て更に健康なる子宮腟部組織 の沃度酸寒冷値を求めこれを癌組織のそれご比較考察せるに別表に明かなる如く常に健常組織の約数倍なり、而も癌組織のグルタチォン量は表示の如く僅少むしろ痕跡なるを知る尚ほ確證を得んがために癌組織を三鹽化醋酸溶液に浸出して 2-4 Dinitrophenylhydrazin を以て Osazon を作り(古武氏法) Vitamosazon を得たり。

案ずるに先人の業績より悪性腫瘍組織新陳代謝は Anaelob の徑路をごり グリコリーゼの盛なる結果多量の乳酸成生は Warburg 一門の業績より之れを否定し得ず,此の組織呼吸の變調は含水炭素を分解の途に於て停止せしめ居るここ H-acceptor こしての酸化型グルタチオンの減少,並に乳酸生成による組織の酸化性は又 Vitamose の分解に不適當なる Medium を與へる事,而して,是等の物質の蓄積は腫瘍そのもの悪性度に何を物語るか,今二三の方向より此を檢しつゝあり。

以上吾人がグルタチオン量に**對する**先人の考察を評して代謝狀態に**對する** 一新知見を補遺せんごす。

子宫腟部健常組織(0.2 瓦)11 例平均值

沃度酸寒冷値 0.1: タン = クリック終末反應 (-): 「ニトロブルシッド」 曹達 反應 (-): フュリン デ = ス反應 (+).

子宫癌腫組織(1.2 瓦) 12 例

番號	骨盤結 締織浸 潤	年齡	麻醉	沃度酸 寒冷值	タンニクリック終末反應	「ニトロプル シッドナトリ ウム」反應	フォニンデニ ス反應
1	中	45		0.485	±	_	++
2	中	44		0.495	_	_	##
3	稍高度	54	單	0.550	±	_	++
4	輕度	34	190	0.330	±	±	++
5	高 度	40		0.490	+	_	+++
6	稍高度	57	腰	0.320	_	_	+++
7	中	52	椎	0.530	±	_	+++
8	輕度	48		0.460	±	_	++
9	中	56	麻	0.550	+	±	+++
10	高度	48	醉	0.570	<u>+</u>	_	++
11	中	30		0.440	_	_	++
12	輕度	61		0.470	±	_	+++

## 雜纂

## 癌腫放射線療法の歐米に於ける最近の趨勢

癌研究會及び東大分院

#### 醫學博士 山 川 保 城

癌腫放射線療法の歐米に於ける最近の趨勢なぎ、仰々しい表題を掲げましたが質は今春短時日の間に歐米各地の病院、「ラヂウム」治療所等を巡遊して見聞した所を私自身の参考の為めに控へて置く程度のものでありまして大方の供覽に供す可き考へでは毛頭ないのであります。放射線療法の實際を見まして嘗て雜誌書物等を通して懐いて居つた豫想は少からず裏切られました。治療成績の如き喧傳されて居る程良くありませぬ。永久治癒例ミして諸所で得意になつて見せられるものは殆んご或る種類の癌に限られて居ります。然しながら啓發させられた所もないではありません。「ラヂウム」放射が主でと線照射は之を補ふ程度であります。

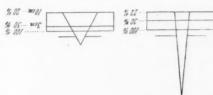
#### レ線治療

最も興味を覺えたのはベルリン Sauerbruch 外科教室に於ける CHAUL 氏の放射方法であります。2年半前より次の如き放射條件にて 25 例の癌患者を治療し100%治つたご言ひます。その特長ごする所は皮膚焦點距離を出來る丈け短くし比較的軟絲を數 10 回放射するこごであります。かくする時は其の作用殆んご「ラギウム」に近く核分裂の種々の時期に光線が働くのであります。1例の口唇癌の放射記錄を見まするに次の樣であります。

H	部位	電壓	mA	距離	濾過	時間	被
22.2	前	180.KV	4mA	8cm	0.5Cu+0.5Al	63秒	
25.2	0.9	**		19	**	**	
1.3		2.2			89	63 ,,	
4.3		23	2.0	**		34	
8.3	**	**				**	
11.3	**	**	41	**	**	**	

14.3	9.9	33	>1	95	39	9.9	
15.3	9.9	19	91	7.0	39	9.9	
16.3	.99	**	99	**	,,	,,	
17.3	9.9	**	99	**	"	99	
18.3	**	**	**	**	11	**	
20.3		93	91	**	9.9	42	
22.3	17	**	**	11	1)	99	
24.3		**	**	91	,,,	60	
27.3	>>	,,	**	**	9.9	,,	全量4900 r
	前面の加	文射量=49	00 r				

左側の " =6000 r 右側の " =6900 r



180KV. 0.5Cu+0.5Al F. H. D. 49cm F. H. D. 8cm H. W. S. in cm 0.95 班難放射との組織内に 吸收さるゝ量の相違を示す(Chaul 氏) 各國に於て使用せられ て居る上線の電壓は一般 に高くありませぬ。唯 ベルリン婦人科教室 (Schubert) ロンドン癌 病院(Morison) ニューョ 一ク記念病院等にては 45 萬乃至 100 萬『ボルト』の高彫義生装置を設

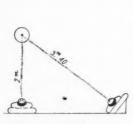
備して試験的に放射して居ります。SCHUBERT 氏は Gamma-Voltapparatを以て 60 萬「ボルト」の硬線を出し 80 例の癌患者を放射しましたが特によい成績を得て居りませぬ。「メモリアル」病院にては約100 萬「ボルト」に近い電壓を出して居るこの装置により4瓦の「ラヂウム」が數時間に生ずる量を僅に 45 分で發生する相です。然し治療を開始してより日尚ほ淺く未だ約20名の患者に試みたのみで試験中このここです。然し瑞典を除き歐米各地では遷延分割放射を行つて居ますが其の治療效果を舉けて居るのは獨り喉頭癌。扁桃腺領域に於ける癌であります。この事は Coutard 氏の成績に見ても明かであり氏自身余に語つた所によれば喉頭扁桃腺下部咽喉の「エビテリオ

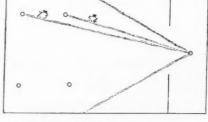
#### ーム」及び子宮癌以外には殆んご應用しないご言ふ.

症例		<b>业</b> 专与图			
71.15. 779	扁桃腺領域	下部喉腔	喉 頭	總數	生存年限
	46:11	89:9	77:22	42	
212	23%	10%	28%	42(20%)	4-9年

COUTARD A

Téléroentogenthérapie totale が l'Hopital Teuon, Paris (MALLET) Memorial Hospital, New York (HEUBLEIN) 等に於て試みられて居ります 之は 2-7 米の距離より患者の全身を放射する方法であります MALLET 氏は白血病悪性淋巴腫を HEUBLEIN 氏は淋巴肉腫ホドキン氏病白血病癌腫を照射しましたが尚ほ試験的時代を出でぬ。





同時に2人放射(MALLET 氏)

200KV.

1mm Cu+2.AL

3mA

同時に4人放射(Henblein 氏) 185KV.

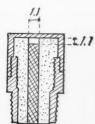
2mm Cu

之を要するに癌に對する上線療法には自ら限界あり唯量及び放射術式を選擇加減するのみにては治癒するものではありませぬ 兹に 於てか諸家の關心は今や被照射體の狀態に何等かの變化を起させ上線に對しよく反應せしむるこまに向けられて居る樣です。例へば CRAMER 氏 (Imperial cancer research fund, London) は鼠癌を種々の温度に於て放射し或る低温にて最もよく腫瘍の消失するこまを實驗しました。

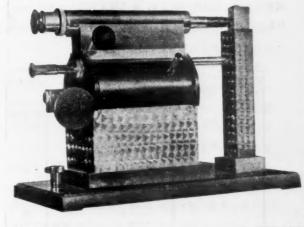
#### 「ラヂウム」方面

癌の放射には主こして「ラ」が應用され上線は唯「ラ」が奏效せぬ場合こか或は補助放射の意味で用るられて居るに過ぎぬ,「ラ」の遠距離强放射(1乃至4瓦の「ラデウム」にて5万至10糎より照射す)はもはや試験的時代を過ぎて着々治療的效果を收めて居ります。例へば舌癌の如き從来は上線のみにては殆んご治らなかつたものが此の方法によつて癒りつゝあります。

「ラ」量の測定につきて見まするに未だと線に於ける「 $\tau$ 」の如き絕對量は決つて居らない Regaud, Ferroux は Millicuries détruit を採用し之に倣ふ人も多い。アングロサクソン、スカンチナビャ、ドイツにては大部分 Milligramhour を用るて居る。其の他 D (MALLET) ergs/cm³ (STAHEL, MURDOCH) の單位があるが、その應用は一部の人に限られて居る。 従來は「1 オン」槽が大きかつた為に皮膚表面に近い組織内に吸收される量は正確に測られなかつたが近時小「1 オン」槽を作り任意の部位に於ける量を測定し得るに至りました SLUYS、KESSLER は 1.5cc. FERROUX は 1.8cc. UTH は 0.5cc. GLASSER,



1 mmc「イオン」槽 (Mallet 氏)

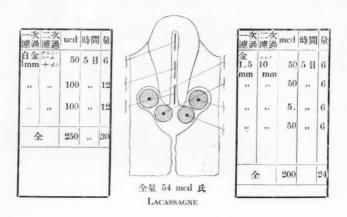


Mallet IE

PORTMANN, SEITZ は 25mme の「イオン」槽を作つた遂に STAHEL は 2 mmc (1928) MALLET は 1 mmc (1933) 程の Microchambres dionisation indépendantes を考案製作しました。

各治療所に於ける癌に對する「ラ」療法の照射術式その成績ミに就きて簡單に申します。先づ子宮癌について見まするに用ふる全量は大體等しいが照射時間及强さに相違があります。 バリー學派では小量を長時間放射し癌細胞の各分裂期に作用せしめんこして居ます。 フランス、イギリス、イタリー等は大體之れに倣つて照射します,其の治療成績は漸次良好こなりつ、ある。ストクターの場所は短時間内に大量を照射するその成績は初めはフランス派より良かつたが中途少し低下し後「ラ」遠距離放射を合併するに至つて又著しく良好こなつた, スウェーデン、ノルウェー, デンマルク及びイギリス, ドイツの一部に應用されて居る。「メモリアル」病院にては bomb を用るて大量のラチウムエマナチオンを短時間内に照射さす。

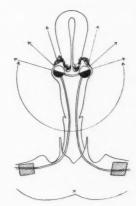
Fondation Curie, Paris (LACASSAGNE) 治療用に 8,200 ミリグラムを備 ふ3本の「ラ」管を子宮腔内に3個のコルポスター(ラヂウムをコルク内に 装 填せるもの) を腟内に插入す, 5 乃至 6 日間内に全量 54mcd を與ふ「ラ遠隔 放射を併用す。4 瓦一6 糎—8 照射野,此の遠距離照射を行へば可なり病勢



の進行せる場合にも見ての癌症狀は去るミ言ふ 1926 年に 16 %が 1926年に は 30 %の治癒率を得る様になつた。

Centre anticancéreux de banlieue Parisienne (WICKHAM) 5 瓦の「ラギ ウム」を有す 2-3 管を子宮腔内に 2-3 個のコルボスターを腟内に插入して 5-6 日間に 38-52mcd を與ふ 2 瓦の「ラ」にて遠距離照射をなす、コルボスターの外側に鉛を含有させて不必要なる放射線を除く。時には上線を併用す (50cm, 2 mm Cu+2 Al. 180KV. 4 円, 2700r 宛)

總	40%	第一	第一度		第二度		第三度		度	平均率
本部	數	症例	治	治症例	治	症例	治	症例	治	1-1-1
	173	5	3	24	31	94	21	50	0	
5 年	問治癒	8	0%	55.	5%	23,	4%		0%	
5-10	年間治癒	8	0%	5	4%	22.	3%		0%	2196



WICKHAM 氏法

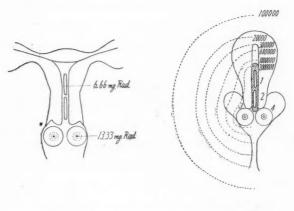
Centre anticancereux は巴里郊外 VILLEJUIF の Hospice Paul Brousse 内 に在ります 60 床を有しラヂウム治療部の 外に内科耳鼻咽頭科を備ふ所長は Roussy で兩病院の院長を兼ねて居ます此の9月よ り同數地内に新研究所が開かれるのであり ます病理解剖(LEROUX)實驗醫學 (OBERL-ING) 化學物理化學生理(SANIÉ) 實驗細胞學 (VERNE) 血清細菌學 (GRANDCLANDE) 普 通及び顯微鏡寫真 (ARDOIN) の六部門あり 或る者は既に仕事を始めて居ります病院の

方も著しく擴張され上線部「ラ」部外科を新設し一般患者を診察します入院は 有料無料こあり 150 床を弄ぶ、毎年癌の病理,解剖,治療法等に關するクルズ スがありまして獨りフランス醫家のみならず外國の醫師も聽講に來ます。此 の病院の如く癌患者を治療する中央部はフランスに 10 (内+はバリーに)個 所ありその内でこ」は最大であります.

Centre anticancéreux de l'Hopital Tenon, Paris (MALLET) 照射方法 は大體 Curie Insfitut に同じ 12 日間に 50 D奥ふ 600 ミリグラムにて遠距離照射をなす。

Centre anticancereux, Bruxelles (MURDOCH) 「ラヂウム」は Union Minière より提供され料金の半分は研究に寄贈される子宮腔内に 2 管插入し9 日間に 21.6mcd を與ふ腟内には 2 箇のコルボスターを入れ5 日間に 24 mcd を奥ふ, 上線併用す。

-		第四		第三		第二		第一	總數
-	治	症例	治	症例	治	症例	治	症例	
	0	6	2	1.0	. 6	13	6	13	42
339	6	03	6	209	26	469	26	469	



MURCHDOCH A

等量曲線



Marie curie Hospital, London 此の病院は女性癌患者のみを收容す 1925 年に開院初めは 200mg の「ラヂウム」に過ぎなかつたが今は 714mg を持つて居る子宮腔内に25mg 宛の管を1本8mg 宛の管 2本庭内には 25mg 宛の容器を2個圖の如く 66時間插入す・上線を併用す 147 例中第1度 94 %第2度79 %治療せりこ言ふ但し5年治癒ではない・

Memorial Hospital, New York (HEA-

LY) 10 瓦のラヂウムを有す第1日に 1000mc を容れたる bomb を2時間 腟内に入れ第2日には子宮腔内に 100mc を容れたる管を2-3本6-12

> 時間插入す第4日以後上線を併用す各門に 4007 を照 射す. sensible non-sensible ごごを區別し前者は 100 %治癒するご言ふ.



			症 例	5年以上治癒
初		期	197	55%
臨	界	[9]	190	34.6%
進行	せる	60	1187	15.0%

HEALY JE

Radiumhemmet, Stockholm (HEYMAN) 5 瓦の「ラ デウム」を有す子宮腔内に2一數本の圓柱形アプリカト ール腟部に 2 一数個の扁平アプリカトールを插入す子 宮腟内に 1100—1300meh 腟内に 1800—2000meh (24

-30 時間)を奥ふ時には腟内に Microcanonen を営て放射するここあり此の中に 250mgl の「ラヂウム」を容れ4時間照射す1週間後に第2回5週日後に第3回照射を行ふ、一定數の者に「ラヂウム」遠距離照射をなす、2瓦にて2-5糎の距離より1日2-4時間宛20 瓦元素時奥ふ。

	症					治	寮 後	症	狀	i i				
次	例	年%	年%	年%	年%	年 %	多%	年%	年%	年%	年%	8 %	年%	年%
1914				12 46.2				7 26.9			5 19.2		5.19.2	4/15
1915	40	22 55.0	21 52.5	15 37.5	15 37.5	14 35.0	13 32.5	13 32.5	13 32.5	12 30.0	10 25.0	10 25.0	10 25.0	8 22
1916	47	15 31.9	10 21.3	8 17.0	6 12.8	4 8.5	4 8.5	4 8.5	4 8.5	3 6.4	3 6.4	1 2.1	1 2.1	1 2
1917	63	34 53,9	23 36.5	20 31.7	14 22.2	13 20.6	10 15.9	10 15.9	9 14.4	8 1.27	8 12.7	8 12.7	8 12.7	7 11
1918 •	41	21 51.2	21 31.2	19 46.3	17 41.5	15 36.6	13 31.7	12 29.3	11 26.8	10 24.4	10 24.4	10 24.4	10 24.4	10 24
919	76	50 65.8	41 53.9	29 38.2	25 32.9	25 32.0	24 31.6	21 27.6	20 26.3	20 26.3	17 22.4	17 22.4	16 21.1	15 19
1920	96	53 55.2	48 50.0	40 41.7	32 33.3	31 32.3	29 30.2	28 29.2	26 27.1	25 26.0	24 25.0	22 22.9	24 21.9	20 20
\$211	13	70 61.9	60 53.1	54 47.8	46 40.7	44 38.9	36 31.8	30 26.5	27 23.9	27 23.9	25 22.1	24 21.2	22 19.5	20 17
922 - 1	31	61 46.2	55 42.0	50 38.2	43 32.8	40 30.5	34 26.0	29 22.1	28 21.4	27 20.6	27 20.6	25 19.1		
923 1	04	55 59.9	49 47.1	43 41.3	36 34.6	32 30.8	28 27.9	27 26.0	25 24.0	24 23.1	22 21.2			
9241	48	87 58.8	75 50.7	69 46.6	58 39.2	52 35.1	44 29.7	33 25.7	35 23.6	34 23.0				
925 . 1	32	72 54.6	57 43.2	47 35.7	34 25.8	28 21.2	22 16.7	20 15.2	19 14.4	19 14.4				
926 - 1	40	83 59.3	7.50.0	61 13.6	54 38.6	45 32.1	4: 16.7	39 27.9	35 25.0					
927 1	44	84 58.8	70 48.6	62 43.1	53 36.8	50 31.7	45 30.0							
928 1	27	76 59.8	60 47.2	54 42.5	48 37.8	46 36.2	31.3							
929 1	50	98 65.3	78 52.0	68 45.3	61 46.7	56 37.3								
93019	37	08 54.9	\$6 48.7	87 44.2										

HEYMAN E

Radiumhemmet は臨床部 (外來及び入院 56 床) 病理部 上線部「ラ」治療部物理研究部 三統計部 三に 分る手術室にては「エレクトロエンドテルミー」の如き小手術を行ひ大手術を要する時は他の病院へ送お然し現在の建築では狭隘に過ぐるので一兩年内に研究所三病院三を兼ねた一大病院を建造し「ラヂウム」も8 瓦に増し病室も100床三し外科を新設して完備せるもの三なすそうです スウェーデンには今斯くの如く悪性腫瘍を治療する放射線治療中央部が三つありますーは Stockholm (北部中部瑞典 350 萬人の爲め) 他は Lund (南部瑞典 135 萬人の爲め) 第3は Göteborg 西部瑞典 135 萬人の爲め)にあります,Lund 及び Göteborg には現在2 瓦の「ラヂウム」がありますが 之も3 瓦に増加するそうです。

Radiumstationen, Copenhagen (Juul) 「ラヂウム治療はストックホルムに上線治療はバリーに倣つて居ます。1931年3月に開院され日茂く未だ統計は出來て居りませぬ然しよく設備され治療の一時的成績もよろしい。 臨牀部 (外來及び入院 65 床)「ラヂウム」治療部 (1642mgel を固體にて2瓦を溶液こして備ふ)上線部(7臺深部治療機械有り)病理部物理研究部 こに分る,物理研究室にては「エマナチオン」を金毛細管(穿刺用)に採集し或は或る種の蠟

に吸收させて居る後者を表在性癌に應用す。「エレクトロコアグラチオンの如 き小手術は行ふが大手術を要する者は Finsen Institut の外科に送る, 斯く

	113 1/62 -12
第1度	99:49=49.4%
第2度	91:21=23.1%
第3度	129:23=17.9%
40 4 Hz	0= 4 4 0-4

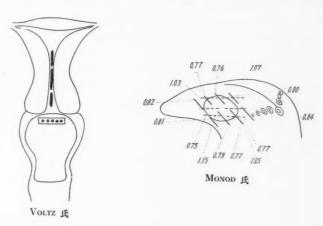
VOLTZ E

治衞茲

の如き癌の治療中央部はデンマルクに3つある. Gynaecologische Klinik, München (Voltz) 500 mgel「ラ」を有す子宮腔内に 1400 meh 腟内に 85: 4= 4.9% 1800meh を 24 時間内に與ふ腟に は 梨子狀容器 を用ふ<u>レ</u>線を併用す即ち 180KV. 1mm Cu. 40cm

### 2 Felder (100 γ)

舌癌には一般に「ラ」針を插し次で「ラ」の大量を以て頬の外面より放射するの であります。而して此方法で得られる治療成績が最もよいのであります針の 刺し方は人によりて種々に考案されて居ります.大體1㎝の組織に對し 0.85 mcd を照射し4-7日間其儘にして置く, 左圖は Monod (Curie Institut)氏



## の方法であります.

Radiumhemmet にては先づ Teleradium 照射を行ひ然る後に「ラ」針を插 す,又 Middlesex-hospital,London では Teleradium 放射のみにて良成 績を得て居ります.

			症例	治癒	96				症例	治癒	26		症例	治癒	%
舌有	了面前	油	151	47	31.4%	舌	行面	前部	48	14	29%	第 1 群 (移轉など)	27	16	5000
舌看	了面後	部	72	14	38.4%	舌	行面	後部	32	7	21%	-		10	0070
舌	腹	面	64	16	63%	舌	腹	面	47	12	26%	第 2 群 (轉移あり)	23	0	

MONOD A

ロンドン癌病院

Radiumhemmet

轉移も癒著もない手術可能の乳癌に對し「ラチウム」照射のみを試みて治癒例を得て居ります。その方法は「ラチウム」針を刺し或は之に「ラ」遠距離照射を併用するのであります。 上線は用るませぬ,Cancer hospital,Londonに於ては 13 例中 4 例 (卽 31 %,1-3 年) Memorial hospital,New Yorkにては 6 例中 3 例 (卽 50 % 1-2 年) は完全に治癒した然し果して手術に勝るか如何は今後の經過を見なければ斷言は出來ませぬ,他の部位に於ける癌に就ては他日記するここにします。

### Current News of the Society.

The work on the building of the Cancer Hospital ("Koraku Hospital") and Laboratory of the Society has made a considerable progress, and it is now expected that the building will be completed by the end of November, 1933. A detailed account of the new hospital and laboratory will be given later in this journal.

Dr. Hojo Yamagawa, Chief of the Clinical Department of the Society, who spent some time in Europe and America inspecting cancer centers, has returned to Japan, arriving on August 3rd.

Dr. Susumu Suzuki, Assistant Professor of Pathology, Tokyo Imperial University, who is now stationed in Berlin, will attend the International Cancer Congress to be held in Madrid, Spain, October 25–30, as the official representative of the Japanese Society of Cancer Research.

Professor Tatsukichi Irisawa has consented to serve as the Chairman of the Councillors of the Japanese Society of Cancer Research.

Dr. Tokue Kimura, Chairman of the Executive Committee of our Society, is away from office for the time being, pending his complete recovery from recent illness. During his absence, President Nagayo will take over the duties of the Chairman of the Executive Committee.

## 雜 報

## 理事會

昭和八年五月三十一日午後五時より丸ノ内日本工業俱樂部に於て第四理事 會を開催す。

長與會頭, 磯村, 磐瀨, 南, 宮川各理事, 今村監事, 山崎評議員出席.

#### O報告事項

- 一. 社園法人癌研究會解散手續に關する件
- 二. 寄附金申込に關する件
- 三. 緒方評議員歸朝に關する件

#### O協議事項

- 一. 財團法人癌研究會寄附行為に關する件
- 二、本年十月下旬マドリード市に開催せらる A 國際癌研究會議に代表者派 遺に關する件
- 三. 外國圖書購入に關する件
- 四、理事印作成に關する件
- 五、書記採用に關する件
- 六. 中元手當支給に關する件

昭和八年七月十日午後五時より京橋區木挽町八丁目竹葉亭本店に於て理事 會開催す。

長與會頭, 鹽田, 稻田兩副會頭, 森村, 今村兩監事, 磯村, 澁澤, 佐々木, 高木, 南, 磐瀬, 宮川各理事出席す。

## O報告事項

- 一. 寄附金申込に關する件
- 二. 評議員會長推薦に關する件
- 三. 國庫補助金に關する件
- 四. 財團法人癌研究會設立申請に關する件

#### O協議事項

- 一。理事、監事就任に關する件・
- 二. 後援會の名稱, 會長, 幹事選任に關する件
- 三. 萬國癌研究會出席代表者に旅費支給に關する件
- 四、癌研究所並に康樂病院設備費に關する件
- 五. 財團法人癌研究會後接會の主旨に關する件
- 六. 放射線科, 內科, 外科, 產婦人科, 病理部, 化學部各部長及び事務長 選任並に手當に關する件
- 七. 職員並に雇員に對する退職基金制度實施に關する件
- 八. 助手, 雇員, 傭人等に對する手當に關する件
- 九。理事長交決に闘する件
- 一〇. 癌研究所並康樂病院所員の手配支給時期に關する件
- 一一. 豐島區醫師會ミ入院料, 診察料其他打合せ交渉に關する件
- 一二. 入院料並に診察料に關する件
- 一三. 入院患者食費額決定に關する件

### 癌研究所及康樂病院建築工事報告

## 一. 大倉土木株式會社代表者變更

大倉土木株式會社専務取締役横山信毅氏は五月十八日逝去致されたる に付取締役會長門野重九郎氏名義を以て業務執行する旨の屆出を受領 せり.

## 二. 敷地內白壓根廻工事

本工事は癌研究會建物新營敷地内の白樫木の移植の準備ごして活著の 安全を期する目的を以て根廻を施行するものなり。

以上は金七拾六圓五拾錢电を以て造園業者蛭田庄二ミの間に契約成立 す。

## 三. 支障樹木移植其他工事

本工事は本會建物新築に伴ふ支障樹木の移植並に土疊一部新設を施し 且つ土壘上に四つ目垣を取設け其他兩側に「ピラカンナス」苗の植栽を なし土壘外側斜面に人止用柵を取設くるものなり。

以上は金五百五拾貳圓也を以て造園業者蛭田庄二ミ工事請員契約成立 す。

#### 四. 工事第一囘設計變更

原工事の内下記の通り設計を變更す

- 1) 指定地盤面に關する設計變更
- 2) 擁壁一部設計變更
- 別館軸部配筋一部設計變更
- 基礎深さ一部設計變更 4)
- 5) 古井戶, 古穴凌渫及砂埋
- 第四工事の內建物外圍部排水及溜桝一部設計變更
- 7) 本館二階玄關上庇設計變更
- 8) 本館軸部設計變更

以上は原請召金武拾萬參千八百七拾五圓也の外に金五百四拾圓六拾五 錢也を增額の上昭和八年十一月三十日迄に施工するこごにせり。

#### 五、工事第二囘設計變更

原工事中下記の通り設計變更す

- 1) 衛生陶器に關する設計變更
- 2) 給水枠, 給湯栓其他附屬金具に關する設計變更
- 3) 給水枠, 給湯枠の増設による設計變更
- 4) 給水栓, 給湯栓其他附屬金具の品質に關する設計變更

以上は東洋陶器株式會計より衞生器具の寄附ありたる爲めの設計變更 に依り金六百寒拾圓也を減額せり、本工事當初の豫定せる器具の價格 は武千九百九拾九圓參拾五錢也にして之を減額せるも附屬物の品質高 級こなりたるこ水栓、湯栓等著しく増加せる為め結局請負金の也より 減額は僅少なり、從つて尚請員總額金貳拾萬四千四百拾五圓六拾五錢 金六百 察拾圓を減額の上施工するここにせり.

## 寄附金

- 癌研究費指定咨附金申込 (昭和八年度第三囘報告)

七月七日附

一 金貳千圓也 (一 時 納)

近藤 友右衞門氏 名古屋市東區白璧町三丁目 九月七日附

一 金貳百圓也 (一 時 納)

望 月 望氏

東京市麻布區本村町二二五

二 癌研究所及康樂病院指定寄附金申込 (同上)

七月十七日附

一 金壹千圓也

(一 辟 納)

久 保 德 太 郎氏

東京市芝區新橋六丁目七二

八月十一日附

一 金五百圓也

(一 時 約) 山本茂三郎氏

東京市四谷區鹽町三丁目一八

### 寄附金領收報告 (昭和八年度第三囘分)

癌研究所及康樂病院建設指定寄附金 (領收順)

一 金五百圓也

(金貳千五百聊也)

公留 德 川 慶 光氏

一 金石百圓也

(金 貳 千 圓 也 )完納

木村德 衞氏

一 金貳百圓也

(金 壹 千 圓 也 ) 五ケ年賦第四囘分)

菊 池 循 一氏

金壹千圓也

(金五千 则也 五ケ年賦第四回分)

堀越角次郎氏

金四百圓也

(金貳千間也) 五ケ年賦第四回分) (金 貳 平 圓 也 )完納

杉 本 東 造氏 長 取 又 郎氏

金五百圓也 金五百圓也

(金 壹 千 間 也 )

田代重信 田代重 三氏

一 金壹千圓也

久 保 徳 太 郎氏

金五百圓也 金壹百圓也 (金 貳 千 團 也 )完納

佐々木隆朗氏 稻垣長次郎氏

金五百圓也

(金五百圓也)

山木茂三郎氏

一 金壹千圓也 金武百圓也 (金五千間也)五ケ年賦第二囘分) (一 時 納)

澁 澤 敬 三氏 子爵

一 金四百圓也

(金 貳 千 圓 也 五ケ年職第四囘分)

望月 望氏 南 大 曹氏

- 金臺萬圓也 一 金四百圓也 (金 夢 蔦 圓 也 ) ニケ年賦第一囘分) (金貳千圓也) 五ケ年賦第四囘分)

三井合名會社 鹽 田 廣 重氏

一 金壹百五拾圓也 (金譽百圓也)

遠 山 郁 三氏

一 金壹萬圓也 (金麥萬圓也) 小計 金貳萬七千八百五拾圓也 累計 四萬壹千八百拾五圓也 三菱合資會社

O	<b>喜研究費指定寄附</b>	(領收順)									
-	金壹百圓也	(金 五 百 間 也 (五ケ年賦第一間分)	太	平	生	命	保	險	株式	會市	t
	金四百五拾圓也	(金武千武百五拾閒也) 五ケ年賦第一問分	安	$\mathbb{H}$	生	命	保	險	株式	會市	Ŀ
	金七拾圓也	(金攀百五拾團也 五ケ年賦第一囘分)		光	生	命	保	險	相互	會重	t
_	金壹百五拾圓也	(金七百五拾圆也 五ケ年賦第一四分)	有	隣	生	命	保	險	株式	會重	t
	金五拾圓也	(金貳百五拾團也 五ヶ年賦第一囘分)	蓬	萊	生	命	保	險	株式	會重	£
_	金壹千百圓也	(金五千五百間也 五ヶ年賦第一回分)	帝	國	生	命	保	險	株式	會重	t
_	金八拾圓也	(金四百回也 五ヶ年賦第一回分)	富	國	徵	兵	保	險	相互	會重	Ŀ
	金麥拾圓也	(金壹百五拾圓也 五ヶ年賦第一回分)	中	央	生	命	保	險	相互	會市	t
	金壹千貳百圓也	(金 六 千 間 也 五ケ年賦第一囘分)	明	治	生.	命	保	險	株式	會重	t
_	金五拾圓也	(金貳百五拾圓也 五ヶ年賦第一囘分)	稲	詩	生.	命	保	險	株式	會產	Ŀ
	金七拾圓也	(金譽百五拾圓也 五ケ年賦第一囘分)	榄	濱	生.	命	保	險	株式	會重	t
_	金壹千參百圓也	(金六千五百圓也 五ケ年賦第一回分)	千	代	H 4	生有	市任	<b>R</b> 險	株式	會產	t
	金壹百六拾圓也	(金八百圓也 五ヶ年賦第一囘分)	日	清	生	命	保	險	株式	會重	t
_	金壹百五拾圓也	(金七百五拾團也 五ケ年賦第一囘分)	太	陽	生	命	保	險	株式	會重	Ŀ
_	金貳拾圓也	(金 壹 百 圓 也 五ケ年賦第一囘分)	國	華	徵	兵	保	險	株式	會利	t
_	金贰百五拾圓也	(金壹千貳百五拾圓也) 五ケ年賦第一囘分	$\exists$	井	生.	命	保	險	株式	會重	Ŀ
_	金壹百貳拾圓也	(金 六 百 圓 也 五ケ年賦第一囘 )	褔	能	生	命	保	險	株式	會形	t
_	金壹千參百圓也	(金六千五百圓也) 五ケ年賦一囘分)	日	本	4:	命	保	險	株式	會形	t
	金壹千圓也	(金 壹 萬 圓 也 拾ケ年賦第五囘分)	三共	株計	便	原	i	1	又匀	H	i
-	金八拾圓也	(金四百圓也 五ケ年賦第一囘分)	常	磐	4:	命	保	險	株式	會形	Ł
-	金壹百圓也	(金五百圓也 五ケ年賦第一圓分)	大	Œ	生	命	保	險	株式	會利	Ł
	金壹百圓也	(同 上)	第	-	徵	兵	保	險	株式	會利	-
-	金五拾圓也	(金貳百五拾圓也 五ケ年賦第一囘分)	H	木	徵	兵	保	險	株式	會利	-

income.	金貳百貳拾圓也	(金壹千百圓也 五ケ年賦第一囘分)		仁	壽	生	命	保	險	株式	會	社
_	金彩拾圓也	(金壹百五拾鳳也 五ケ年賦第一囘分)		富	1:	生	命	保	險	株式	會	社
	金壹百六拾圓也	(金八百 画也)		東	洋	生	命	保	險	株式	會	社
_	金貳千圓也	(→ 時 納)		近	庙	製	友	A	i	衞門	月	氏
-	金五百圓也	(金壹千五百圓也 三ケ年賦第二回分)	財團法人	森		村		57	ļ	明		會
	金七拾圓也	(金譽百五拾圓也 五ケ年賦第一回分)		東	洋	生	命	保	險	相互	會	社
	金參千圓也	(金壹萬五千圓也 五ケ年賦第四囘分)		Ξ		菱		合	7	會		社
	金貳百圓也	(金 壹 千 圓 也 (五ケ年賦第一囘分)		共	保	生	命	保	礆	株式	會	社
secolo	金琴百五拾圓也	(金壹千七百五拾圓也) 五ケ年賦第一囘分		大	同	生	命	保	險	株式	會	社
	金貳百五拾圓也	(金壹千貳百五拾圓也) 五ケ年賦第一囘分		愛	國	生	命	保	險	株式	會	社
_	金壹百圓也	(金五百間也) エケ年賦第一囘分)		昭	和	生	命	保	險	株式	會	祉
	金壹百貳拾圓也	(金 六 百 圓 也 五ケ年賦第一囘分)		片	倉	生	命	保	險	株式	會	社
	金參千圓也	(章萬五千 側也 五ケ年賦第四回分)		Ξ		井	1	合	7	自會		社
/	小計 金壹萬七千九百	<b>「八拾圓也</b>										

## 人 事

### O長與會頭學長就任

長與會頭には四月東京帝國大學醫學部長に補せらる。

## O授賞論文審查委員囑託

累計 金貳萬九千九百八拾圓也

昭和八年度第二十五回學術集談會授賞論文審査委員 こして下記諸氏を囑託す。

 醫學博士
 長
 與
 又
 郎氏

 醫學博士
 應
 浪
 鑑氏

 醫學博士
 在
 多
 ②
 意氏

 醫學博士
 額
 田
 廣
 重氏

 醫學博士
 田
 原
 淳氏

#### 〇山川博士歸朝

本會附屬腫瘍治療所主任山川保城博士は今春三月下旬より歐米各國に於ける癌腫治療方面を視察中の處去る八月三日横濱入港の龍田丸にて無事歸朝す.

#### 〇國際癌研究會議出席代表者決定

昭和八年十月二十五日より三十日に至る六日間 Spain の Madrid に開催 せらるる國際癌研究會議に本邦代表ミして目下獨乙 Berlin に留學研究中の 東京帝大助教授鈴木塗博士を派遣するに決定主催者に通知す。

#### O評議員會々長推薦

本會評議員會々長こして長與會頭より入澤達吉博士に懇請中の處快諾を得 就任す。

#### 〇理事長の交迭

木村理事長には未だ本復の域に至らず此際充分靜養の要あるにより、當分 長與會頭に於て本會理事長を兼任するここに決定す. 昭和八年九月二十六日印刷昭和八年九月三十日發行

期文(歐文抄錄付)年四囘發行 癌 一册正價金壹圓五拾錢 一册 郵 稅 金 四 錢

東京市麻布區市兵衞町二ノ八八

編輯兼長與又郎

東京市本郷區駒込林町百七十二番地

印刷者 柴 山 則 常

東京市本郷區駒込林町百七十二番地

印刷所 會查 林 舍

東京市本郷區本富士町二番地 東京帝國大學醫學部病理學教室內 發行所 社 團 癌 研 究 會 振替東京參○○七壹番





